2．関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成17年度発掘調査概要

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて継続して実施してきている。平成17年度は、内田山遺跡・内田山古墳群と、上人ヶ平５号墳の２地点で発掘調査を実施した。

内田山遺跡および内田山古墳群は、京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山に所在する。過去、平成11・12・14～16年度に調査(注1)を実施している。これまでの調査で、丘陵尾根部で古墳時代中期の方墳である内田山Ｂ１号墳、弥生時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡など集落関連の遺構・遺物を検出している。内田山遺跡・内田山古墳群の調査は今回で第６次調査となる。第６次調査では、過去の調査成果から、内田山Ｂ１号墳の所在する尾根から北側にのびる丘陵にも、遺跡の分布が予想されたため、遺構・遺物の分布状況の把握を目的とした試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物を検出した。遺構・遺物が丘陵尾根上に広範囲に分布する状況が確認され、遺跡範囲は尾根上全域に及ぶことが明らかになった。試掘調査は、当調査研究センター調査第２課調査第３係長石井清司・同主任調査員竹原一彦・同調査員柴暁彦が担当し、平成17年５月９日～同年９月５日の期間で実施した。調査面積は900㎡である。試掘の成果を元に関係諸機関の協議を経て、調査対象地南部域について、面的調査を実施することとなった。本調査は、当調査研究センター調査第２課調査第３係長石井清司・同主任調査員竹原一彦が担当し、平成17年９月12日～同年12月５日の期間で実施した。調査面積は700㎡である。第６次調査の調査面積は、試掘調査と本調査を併せて、合計1,600㎡である。

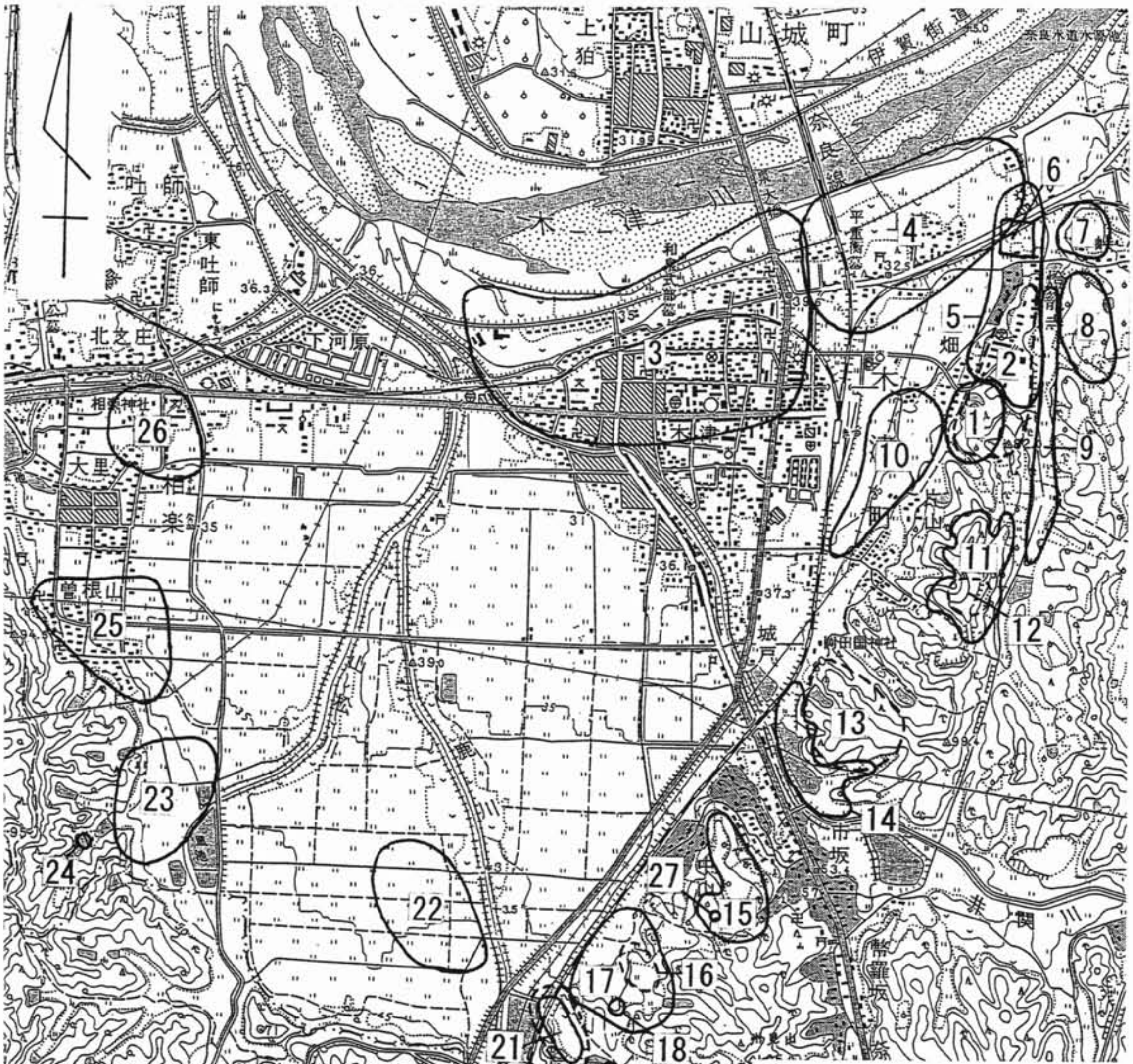
上人ヶ平５号墳は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平に所在する。同墳は昭和13年に発掘調査が行われ、埴輪や葺石の存在が確認された。その後、関西文化学術研究都市開発事業に伴い、上人ヶ平５号墳を含む上人ヶ平遺跡の調査を実施したところ、上人ヶ平古墳群が合計16基の古墳群からなること、奈良時代には平城宮へ瓦を供給した大規模な瓦工房が存在したことなどが明らかとなり(注2)、その重要性から遺跡の保存が決定された。今回の上人ヶ平５号墳の調査は、上人ヶ平遺跡を活かした公園整備を行うための詳細な資料を作成するため、５号墳の埋葬施設の遺存状況並びに墳丘規模などの確認を目的に調査を実施した。調査は、調査第３係長石井清司・同主任調査員竹原一彦、調査第２課調査第１係調査員福島孝行が担当し、平成17年９月27日～平成18年１月14日の期間で実施した。調査面積は800㎡である。

発掘調査および整理作業には、多くの調査補助員・整理員の参加・協力(注3)をいただいた。本概要報告は、内田山遺跡・内田山古墳群第６次調査については、竹原のほか、当調査研究センター調

査第２課第１係調査員筒井崇史・坂下実(花園大学卒業生)・永野宏樹(奈良大学卒業生)が分担して執筆した。上人ヶ平５号墳は、福島のほか、田中智子(立命館大学大学院)が執筆した。また本概要報告の編集は竹原と調査第１課資料係の協力を得て筒井が行った。なお、本概要報告で用いた国土座標系は、過去の調査との関連上、日本測地系(旧座標系)の国土座標を使用している。

調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城郷土資料館・木津町教育委員会・木津の緑と文化財を守る会・京都府立木津高等学校などの関係諸機関、都出比呂志・石野博信の両先生からご教示・ご協力をいただいた。

なお、今回の発掘調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。



第53図　調査地位置図

１．内田山遺跡　２．内田山古墳群　３．木津遺跡　４．上津遺跡　５．燈籠寺遺跡
６．燈籠寺廃寺　７．白口遺跡　８．赤ヶ平遺跡　９．釜ヶ谷遺跡　10．片山遺跡
11．木津城山遺跡　12．木津場跡　13．天神山古墳群　14．文廻池遺跡　15．西山遺跡
16．瓦谷古墳群　17．瓦谷遺跡　18．瓦谷埴輪窯跡群　19．上人ヶ平埴輪窯跡群
20．上人ヶ平古墳群　21．上人ヶ平遺跡　22．弓田遺跡　23．大畠遺跡　24．相楽山遺跡
25．曽根山遺跡　26．相楽遺跡　27．西山塚古墳

位置と環境

木津町は、京都府の南端部に位置し、奈良県と境を接している。町域の北東側は、三重県を源とする木津川が西から北にその流れを大きく転じ、その左岸に沖積平野が広がる。北方を除く東西と南側は、標高100m前後を最高所とする丘陵地形がみられ、沖積平野を取り囲んでいる。

木津町とその周辺の遺跡に目を向けると、縄文時代では、沖積地南部の弓田遺跡(22)と東方丘陵地の釜ヶ谷遺跡(9)が知られ、遺物が出土している。つづく弥生時代には、西方丘陵地に袈裟襷文式銅鐸出土地として知られる相楽山遺跡(24)とその母村と考えられる大畠遺跡(23、中期)が存在する。また、東方の丘陵地には、方形周溝墓群を伴う燈籠寺遺跡(5、中・後期)・内田山遺跡(1、後期)・赤ヶ平遺跡(8、前・中期)・木津城山遺跡(11、後期)・上人ヶ平遺跡(21、後期)などの集落遺跡が分布する。古墳時代の前期には、木津川を挟んだ対岸の山城町に椿井大塚山古墳が築造され、副葬された多量の銅鏡群を通して、他地域との広範な交流が窺える。古墳時代前・中期には奈良県側に大規模な前方後円墳で構成される佐紀盾列古墳群が営まれ、木津川流域を含めた強大な勢力の存在が想定される。木津町では東部丘陵地に前期後半の前方後円墳である瓦谷1号墳(16、全長51m)が築造される。以後、中期から後期前半にかけて、瓦谷古墳群(16)・内田山古墳群(2)・上人ヶ平古墳群(20)・西山塚古墳(27)などに代表される中小規模の古墳が順次築造されていく。また、上人ヶ平古墳群の近傍には瓦谷埴輪窯跡群(18)・上人ヶ平埴輪窯跡群(19)が分布する。

奈良盆地は、古代には歴代の都城が営まれた地であり、木津の地域は物資の運搬・交易の中継地として交通網の要衝の地として重要な位置を占める。平城山丘陵の南側に平城京が営まれた奈良時代には、東部丘陵地の南部に市坂瓦窯跡・五領池東瓦窯跡・瀬後谷瓦窯跡・歌姫瓦窯跡など平城宮・平城京に供給した瓦窯跡が分布する。沖積地平野部には条里関連地割が良好に残っており、木津川対岸の山城町と合わせ恭仁京右京域も当地に推定されている。内田山遺跡・内田山古墳群の西側沖積地には片山遺跡(10)があり、大型掘立柱建物跡や井戸、溝などが検出され、官衙的な性格が考えられている。このほか、奈良時代の平城京の外港である泉津関連の遺跡と考えられる上津遺跡(4)などがある。

(1) 内田山遺跡・内田山古墳群第6次

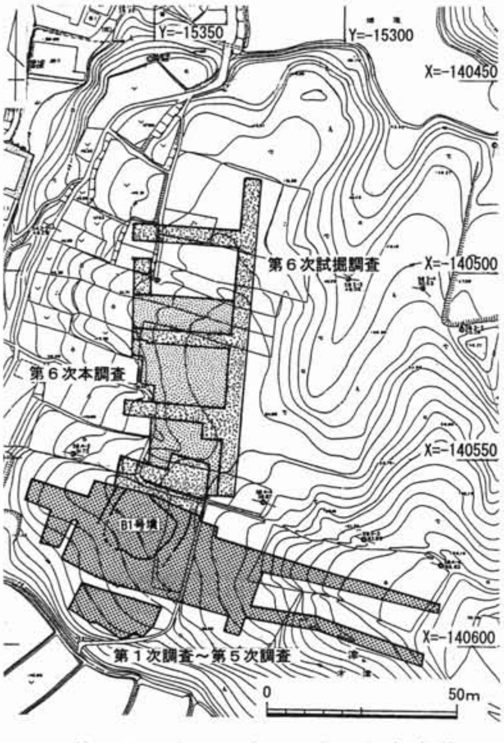
（内田山：うちだやま）

1．調査経過

調査前の丘陵は、近・現代には畑や果樹園として利用されており、尾根筋を横断する大規模な溝が連続し、斜面部では「コ」字に溝をめぐらせる耕作関連の地割(耕地区画溝)が確認できた。耕作に関連する地形の削平が著しく、丘陵尾根上には古墳の存在を示す墳丘の高まりは一切認められなかった。

試掘調査では、調査対象地に幅4mのトレンチを6か所(第1～6トレンチ)設定した。表土の掘削には、重機を使用した。その後の調査は人力による掘削作業を行い、遺構の検出に努めた。調査の結果、各トレンチから弥生～古墳時代を中心とする遺構を検出した。検出遺構には、竪穴式住居跡・柱穴・溝・古墳周溝・埴輪棺などがある。

本調査は、尾根の南部で実施した。本調査でも表土層の掘削には重機を使用した。尾根頂部付近は表土層直下で地山面を検出した。地山層は程良い固さの明るい黄灰色系粘質砂であるが、削平の著しい地点では、下層の白灰色・黄褐色・桃褐色の粘質土が現れる。表土掘削の後は、人力による尾根斜面堆積土の掘削、遺構検出・遺構内の調査を行った。本調査では、竪穴式住居跡と溝を検出した。また、内田山B2号墳は、埋葬施設SX12と周溝SD4について全面的な調査を実施した。



第54図　内田山遺跡・内田山古墳群
調査トレンチ配置図

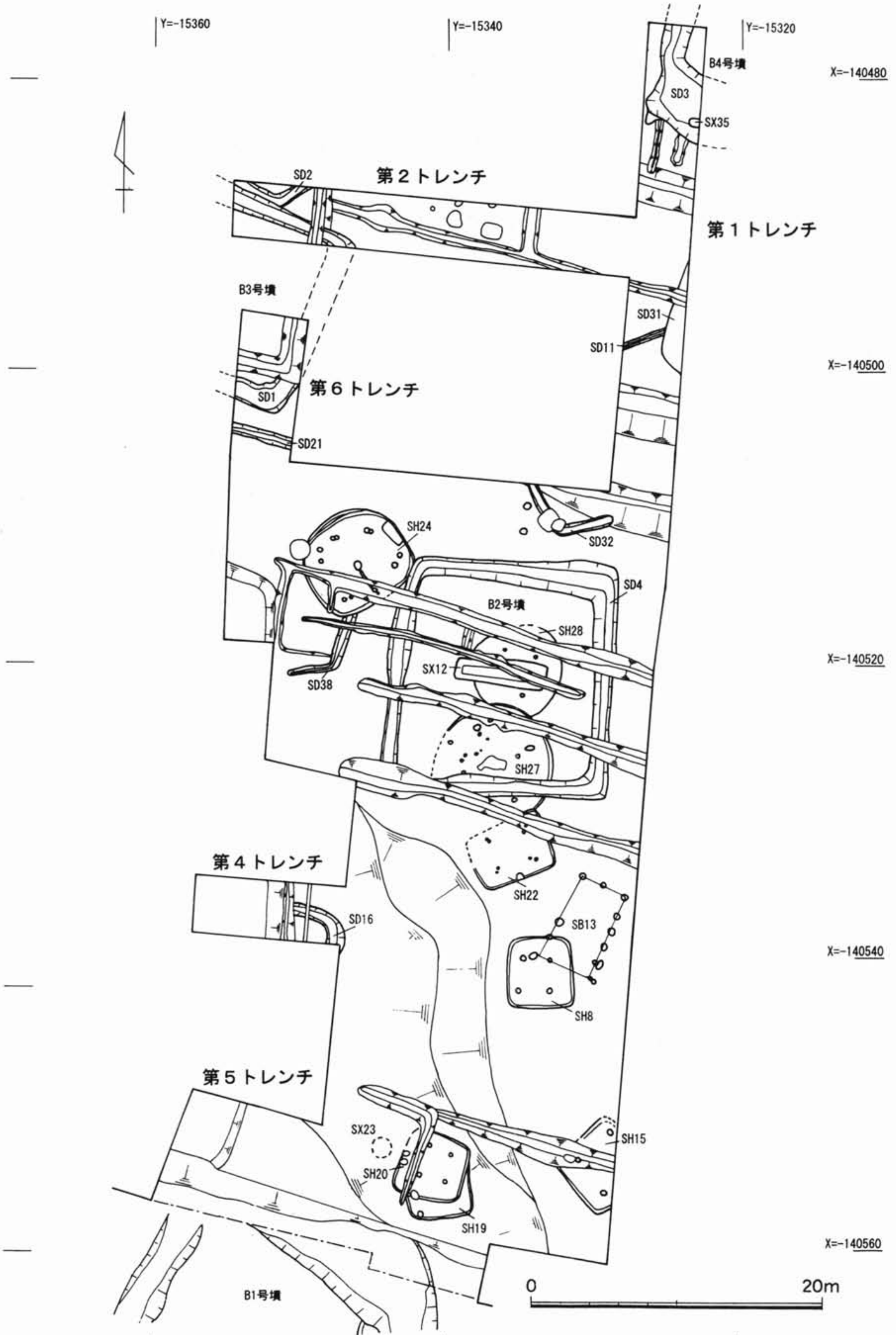
2．検出遺構

調査を進めた結果、地表下0.3m前後で地山(黄褐色系の粘性の強い砂質土)面を検出した。基本的に遺物包含層は存在しない。

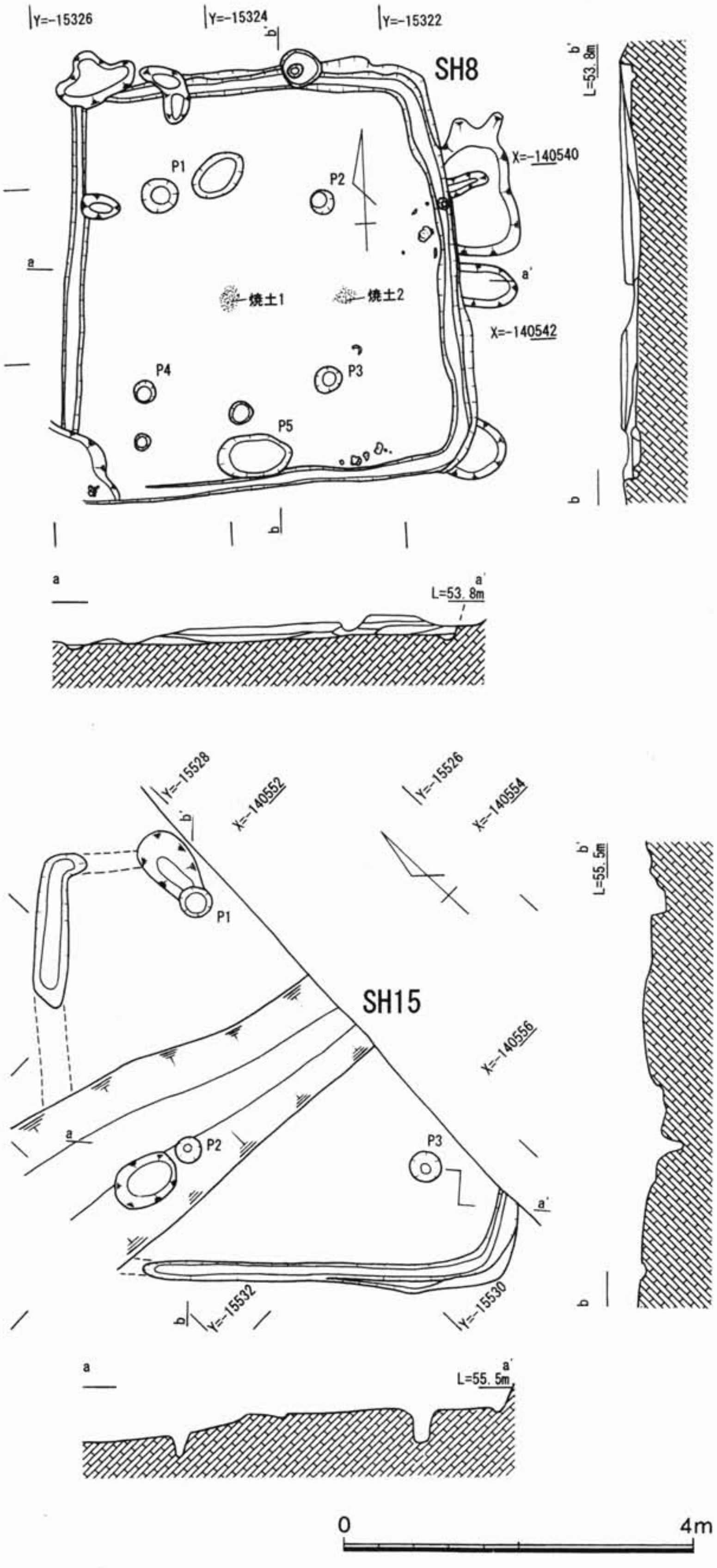
地山面での精査の結果、多くの遺構を検出した。試掘では、竪穴式住居跡SH7・SH8・SH15・SH19・SH20、溝SD2・SD11・SD16・SD31、古墳に伴う周溝SD1・SD3・SD4、埴輪棺SX35、掘立柱建物跡SB13などを検出した。また、本調査では、竪穴式住居跡SH22・SH24・SH27・SH28、溝SD32・SD38、集石遺構SX23などを検出した。また、内田山B2号墳の埋葬施設SX12を調査した。

(1) 弥生時代の遺構

竪穴式住居跡SH7　方形プランの住居跡と判断する。遺構の大半が調査地外である。



第55図　第6次調査地平面図



第56図　竪穴式住居跡ＳＨ8・ＳＨ15実測図

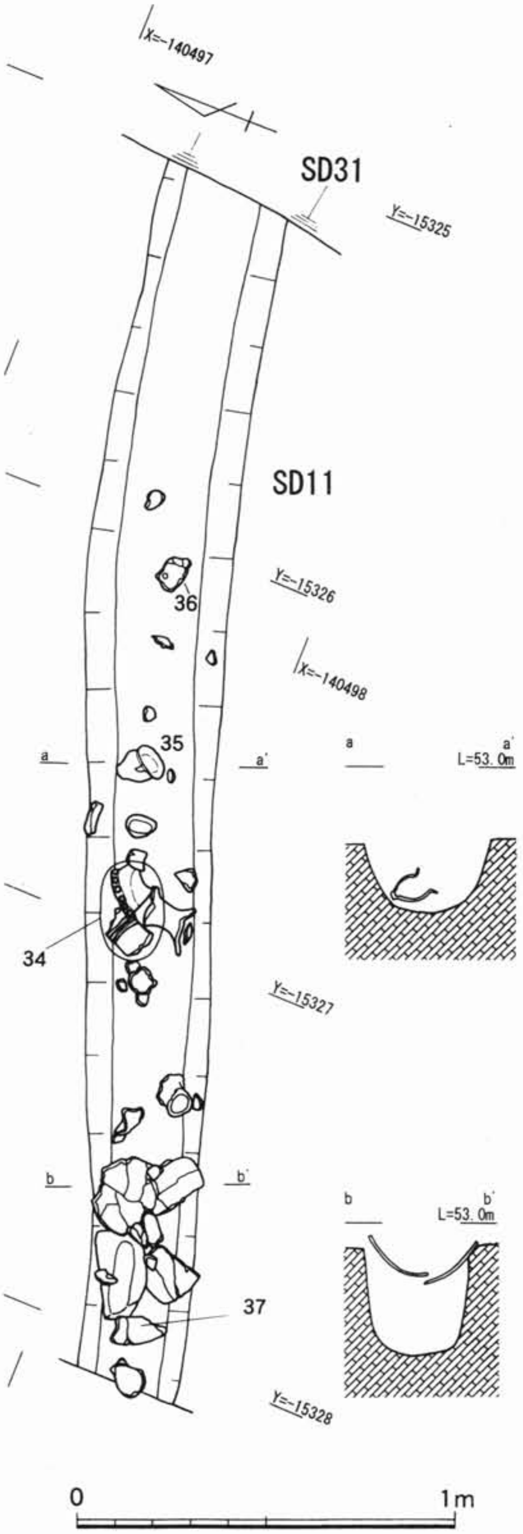
竪穴式住居跡ＳＨ８（第56図上）　尾根筋の南部、第１トレンチと第４トレンチとの接合部で検出した竪穴式住居跡である。住居は方形プランで、住居壁はほぼ正方位と一致する。住居跡は短辺4.6ｍ、長辺4.8ｍを測る。地山層を掘り下げた住居の壁高は、最もよく残る東壁で0.35ｍを測る。西壁側は著しい削平により壁面は残っておらず、周壁溝を検出した。

床面は、中央部が周囲より浅い皿状に僅かに窪む。主柱穴は４か所（Ｐ１～Ｐ４）で、床面からやや西に片寄った配置状況が認められる。主柱穴は直径0.3～0.4ｍの円形プランで、深さは概ね0.2ｍを測る。床面では２か所から炉跡と推測する焼土を検出した。２か所とも焼土範囲は直径約0.2ｍ、暗赤褐色の色調を呈している。焼成による炉跡の硬化状況は確認できない。焼土１は床面中央のやや西側、焼土２は焼土１と東壁間の中間位置にあり、ほぼ1.2ｍの間隔を測る。住居壁に沿って幅0.2ｍ、深さ５㎝の周壁溝をめぐらせる。床面では、主柱穴のほかに貯蔵穴

（Ｐ５）を検出した。貯蔵穴は、住居跡床面の南端に位置し、南壁中央部の周壁溝に接する。楕円形プランの貯蔵穴は長軸を壁面と同じく東西方向に取り、長軸長0.8m、短軸長0.5m、深さ0.5mを測る。住居跡床面上から弥生土器が出土した（第70図第41～48）。

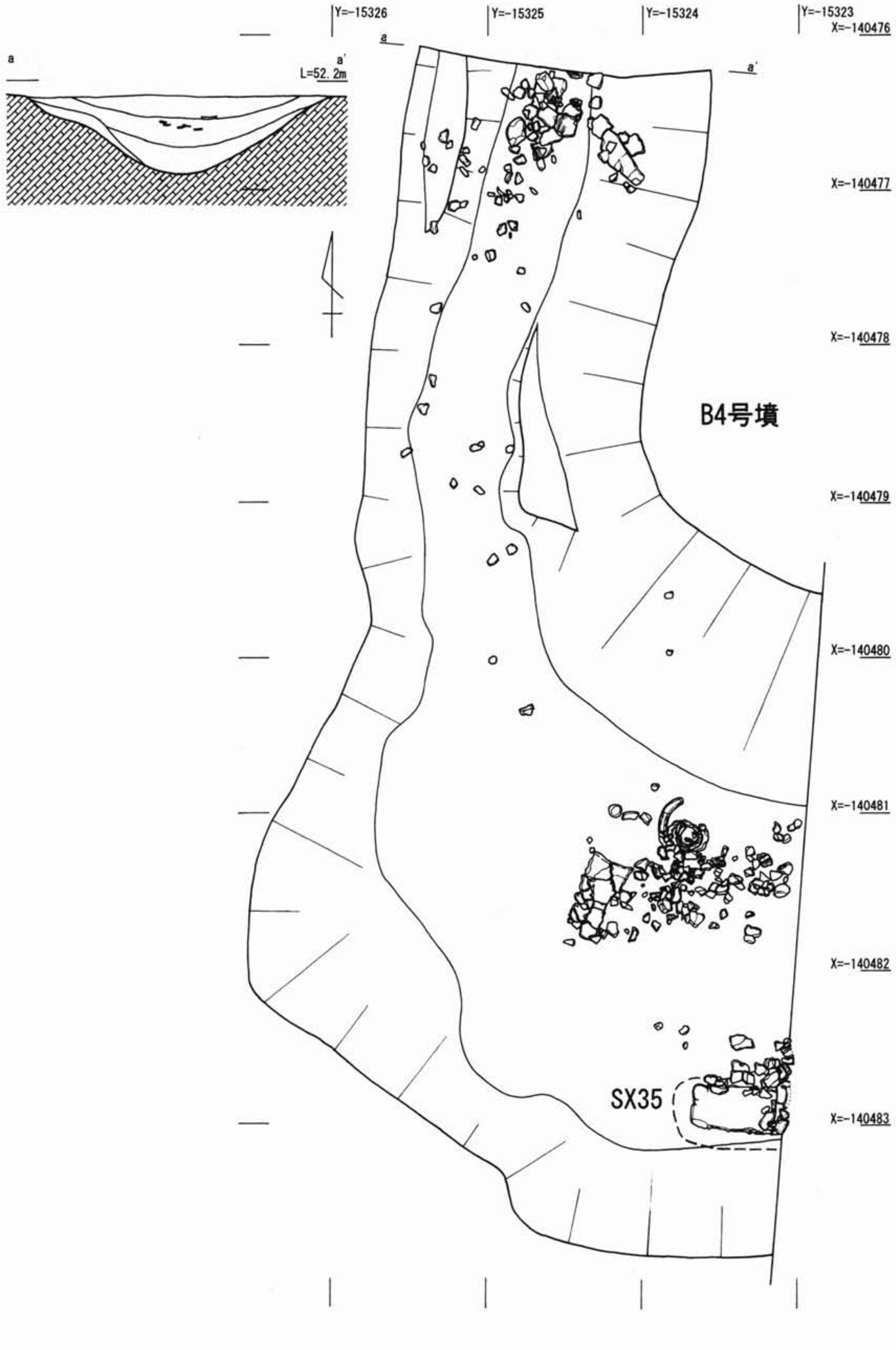
竪穴式住居跡ＳＨ15（第56図下）　第１トレンチの南端、尾根筋の幅が狭まる地点に位置する。住居跡は方形プランで、住居壁は北に対して約43°西に振る。調査地内で住居跡の約７割が検出できた。

住居跡は、中央部を後世の耕地区画溝が東西に横断し、溝底面が住居床面よりも深く掘り下げられている。また、北半部の床面も削平されているが、住居北隅で周壁溝の痕跡を部分的に検出することができた。周壁溝の深さは１～２cmであった。また、主柱穴のうち１基（Ｐ１）を検出した。Ｐ１は直径0.4m、深さ0.15mを測る。耕地区画溝以南は遺存状況が比較的良好で、東南隅部が残るトレンチ東壁面における壁高は0.4mを測る。南半部も後世の削平を強く受け、南西隅部は消滅している。住居跡は、直交する２か所の住居隅を検出したことから、かろうじて住居規模が判明した。住居跡の規模は、短辺4.9m、長辺5.4mを測る。住居の壁面に沿って周壁溝がめぐる。残りの良い東南隅の周壁溝は、幅0.2m、深さ６cmを測る。今回の調査では主柱穴３か所が検出できた。このうちＰ３では、直径0.4m、深さ0.4mを測る。住居跡埋土中から土器片が出土したが、詳細な時期は不明である（第70図49）。



第57図　溝ＳＤ11実測図

溝ＳＤ11（第57図）　第１トレンチの北部、第２トレンチ接合部のやや南で検出した素掘り溝である。溝は直線的な方向性をもち、東から北に僅かに振っている。幅0.35m前後、深さ0.3mを測る。溝底は西から東に向かって僅かに傾斜する。溝の東端部は溝ＳＤ31に切られる。溝からは甕・壺・器台などの弥生土器（第70図34～37）が多数出土した。

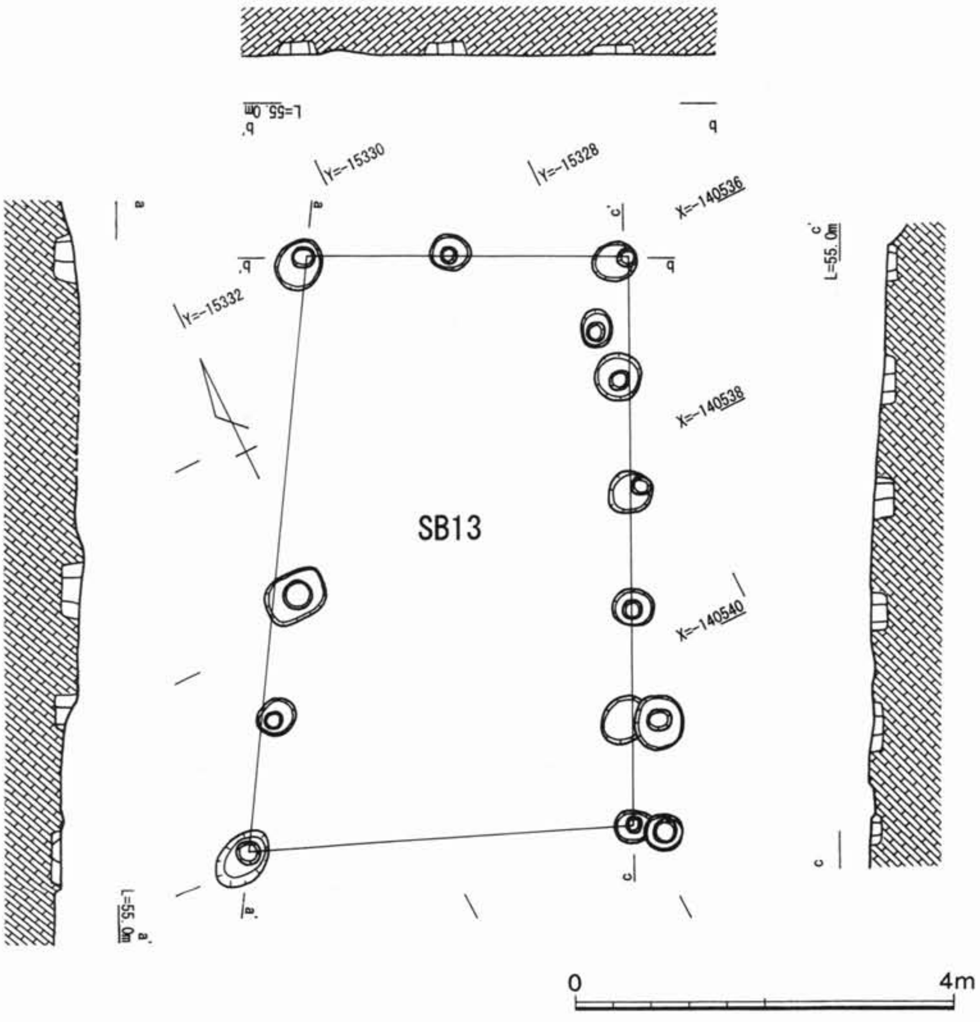


第58図　内田山Ｂ４号墳ＳＤ３埴輪出土状況図

溝ＳＤ31　溝ＳＤ11と切り合い関係にあり、ＳＤ31が新しい。遺構の性格を把握する目的で埋土の一部を断ち割った。当初は住居跡と推定していたが、遺構の底面が0.6ｍと深く、住居跡にみられる周壁溝が底面で確認できなかった。僅かな範囲での観察結果ではあるが、ＳＤ31は、古墳の周溝の可能性が高いと判断した。

内田山Ｂ４号墳周溝ＳＤ３(第58図)　第１トレンチ北端部で検出した古墳の周溝である。古墳の南西角のほか、周溝の西溝南部と南溝西端部を検出した。溝幅も広く、埋土中から多量の埴輪片が出土したことから、古墳の周溝と判断した。この古墳を新たにＢ４号墳と命名した。Ｂ４号墳は検出範囲が狭く不明な点が多いが、古墳の主軸は北から東に約11°振る。西側の周溝は幅約２ｍ、深さは0.5ｍを測る。南側の周溝は深さが0.5ｍで同じだが、幅は4.2ｍと大きく広がる。埴輪片の出土は周溝埋土の中間層にほぼ限られ、周溝西側に１か所、南側周溝に２か所密集する地点が認められる。出土した埴輪片には、円筒埴輪の形状を残すものもある。また、古墳の南西角から出土した埴輪には、壺形埴輪の破片も含まれている。南側周溝の南岸付近に埴輪片の密集があり、小さな破片群の下から埴輪棺(ＳＸ35)の一部を検出した。

埴輪棺ＳＸ35(第58図)　Ｂ４号墳周溝ＳＤ３の南西角、周溝南岸部で検出した。埴輪棺の主軸

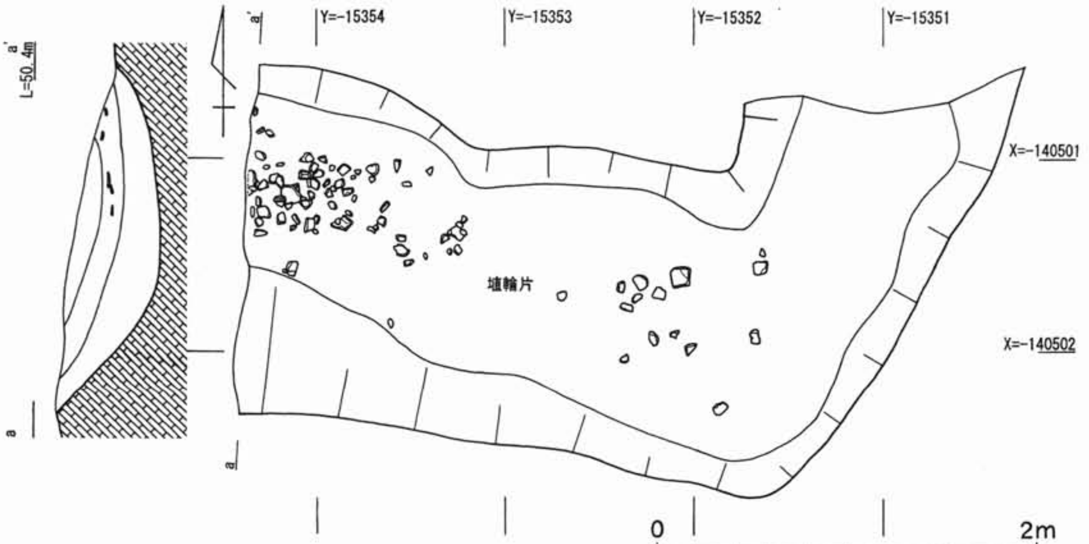


第59図　掘立柱建物跡ＳＢ13実測図

は東西方向であり、Ｂ４号墳の主軸と一致する。棺は２個の円筒埴輪を連結しており、東側の円筒埴輪は調査区外にのびるが、西側の円筒埴輪を調査地内で確認した。棺の上部は後世の攪乱によって破片化し、棺の上半部分のほか、西小口の閉塞部もすでに失われていた。棺に使用された西側円筒埴輪は、下半部が原位置を保っていた。埴輪棺の掘形は、棺より一回り大きく、Ｂ４号墳周溝の堆積土層を掘り下げている。この埴輪棺については、次年度以降に予定される調査を待って、合わせて報告していく予定である。

掘立柱建物跡ＳＢ13(第59図)　第１トレンチ南部、第４トレンチとの接合部付近で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の主軸は北から東に約26°振る。平面形はやや歪な長方形を呈し、桁行５間(6m)、梁間２間(北東3.6m、南西4.1m)を測る。梁間は、北側梁間に対し南側梁間が約0.5m広がる。柱穴掘形は円形で、直径はおよそ0.5m前後を測る。桁行方向柱穴で確認した柱痕は直線上には揃っていない。また、桁行柱穴はそれぞれの間隔が短く、1.1～1.4mとばらつきが認められる。柱穴からは遺物が出土せず、時期は不明であるが、柱穴が竪穴式住居跡ＳＨ８の埋土から掘り込まれていることから、弥生時代後期以降の建物跡と考えられる。

内田山Ｂ３号墳周溝ＳＤ１(第60図)　第２・６トレンチで検出した古墳に伴う周溝である。第２トレンチでは、古墳の北東角と北側周溝部分を検出した。第６トレンチでは、古墳の南西角と南側周溝を検出した。ＳＤ１の埋土から埴輪片が出土したことから、古墳の周溝と判断した。この古墳を新たにＢ３号墳と命名したＳＤ１は西側の調査地外にのびるが、第６トレンチの西側は階段状に大きく下がる地形を呈しており、Ｂ３号墳の西部はすでに失われた可能性が高い。周溝幅は北側周溝では1.4mを測り、周溝底は東から西にゆるやかに下がる。深さは、周溝が最も良く残る尾根上部側の古墳北西角で0.8mを測る。南側周溝は幅1.8m、深さ0.5mを測る。周溝の断面形は「Ｕ」字形を呈する。北側周溝は、埋土から家形埴輪と円筒埴輪の破片が出土した。南側周溝には、特に多くの埴輪片が存在した。埴輪片は、溝の中央部で、溝底から0.2mほど遊離



第60図　第６トレンチ平面図および溝ＳＤ１埴輪出土状況図

した堆積土の中間層から出土した。Ｂ３号墳は、北側と南側で周溝を検出したことから、南北の長さが11.2ｍであることが判明した。

溝ＳＤ２　周溝ＳＤ１と切り合い関係にあり、ＳＤ１より古い。幅0.6ｍ、深さ0.1ｍで、「Ｌ」字状に屈曲する。検出面で埴輪片が出土したことから、古墳の周溝の可能性もあるが、詳細は不明である。

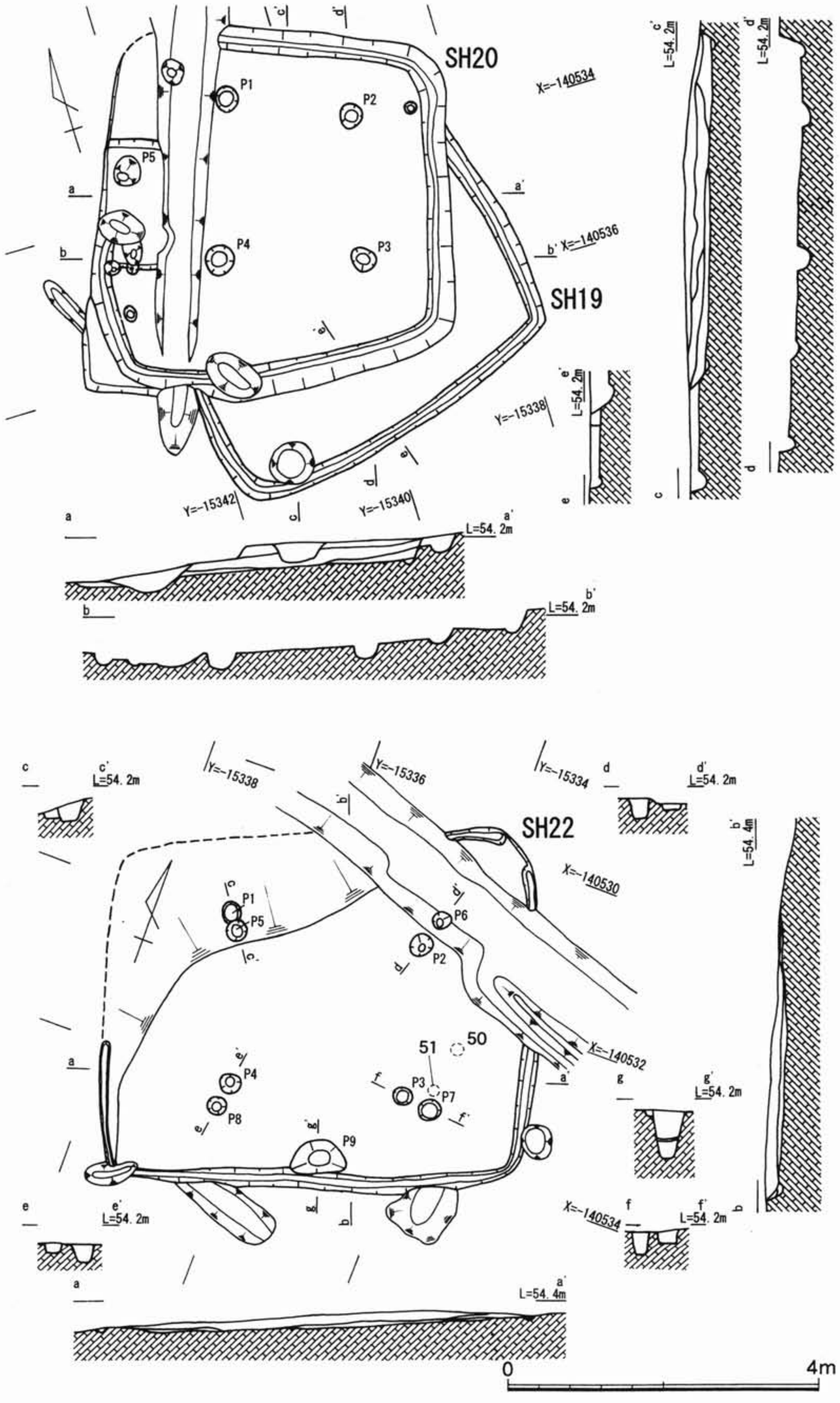
溝ＳＤ16　「Ｌ」字状に曲がり、幅0.8ｍ、深さ0.4ｍを測る。溝埋土から遺物の出土はない。

竪穴式住居跡ＳＨ19(第61図上)　第５トレンチ東部で検出した。谷地形堆積土の黄灰色系粘質砂を掘り下げた竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡ＳＨ20と切り合い関係にあってＳＨ19が古い。平面プランは方形で、南壁は全長4.5ｍを測る。中央部を含む北半部は、ＳＨ20によって壊されている。床面はほぼ水平で、壁面に接して周壁溝が存在する。この住居跡に伴う主柱穴は検出できなかった。住居跡埋土中から土器が出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ20(第61図上)　ＳＨ19より新しく、方形プランの竪穴式住居跡である。住居の中心はＳＨ19から北側に寄る。住居跡は東西の壁の長さに違いがあり、やや歪な方形を呈している。西壁の長さは約4.5ｍ、東壁の長さは3.8ｍを測る。対する南壁の長さは4.4ｍを測る。床面はほぼ水平で、主柱穴を４か所(Ｐ１～Ｐ４)確認した。主柱穴は床面のやや北東側に片寄る。主柱穴掘形は円形で、直径0.3～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。床面の周縁部には周壁溝がめぐる。周壁溝は幅0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。西壁のほぼ中央部、周壁溝に接して、貯蔵穴とみられる方形ピット(Ｐ５)を検出した。耕地区画溝に東側を壊されているが、南北の長さは1.6ｍ、深さは0.1ｍを測る。この貯蔵穴周辺から土師器甕の破片が出土した。

溝ＳＤ21　第６トレンチ南端付近、周溝ＳＤ１の南側から検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅は最大で0.8ｍを測る。深さは0.2ｍで浅い。土器の細片が出土するが、時期不明である。

竪穴式住居跡ＳＨ22(第61図下)　調査地の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ８の北側約４ｍのところで検出した竪穴式住居跡である。住居跡プランは長方形を呈し、長軸は北から東へ約70°振る。北西部は後世の削平で一部が失われたほか、北角付近も耕地区画溝によって部分的に壊されている。住居跡の３か所のコーナーを検出したので、住居跡の規模は長辺5.6ｍ、短辺4.6ｍを測る。住居壁の残りは悪く、南壁部分で僅か0.18ｍを測るにすぎない。住居床面には幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの周壁溝が存在する。床面はほぼ平坦であるが、北東から南西方向にやや下がる。南西角は削平されるが、周壁溝が僅かながらも検出できた。この西壁周壁溝とその東側床面は、床面が僅かに下がることから、住居の床面はやや窪んでいたとみられる。住居の主柱穴は、各住居角の内側４か所にあり、柱穴の直径は0.2ｍ前後である。主柱穴は、それぞれ近接する２個１対の形で検出した。この主柱穴の状況から、ＳＨ22は住居規模を変えないまま、建て替えが行われたと考える。柱穴の深さには差が認められ、深い掘形の一群と浅い掘形の一群に分けることができた。柱穴掘形の深いものがＰ５～Ｐ８、浅いものがＰ１～Ｐ４の柱穴である。西角側の主柱穴Ｐ１とＰ５は切り合い関係にあり、Ｐ５がＰ１より新しい。したがって浅い掘形の主柱穴Ｐ１～Ｐ４が当初の住居に伴う主柱穴、深い掘形のＰ５～Ｐ８が建て替えに伴う新たな主柱穴であることが判明



第61図　竪穴式住居跡ＳＨ19・20・22実測図

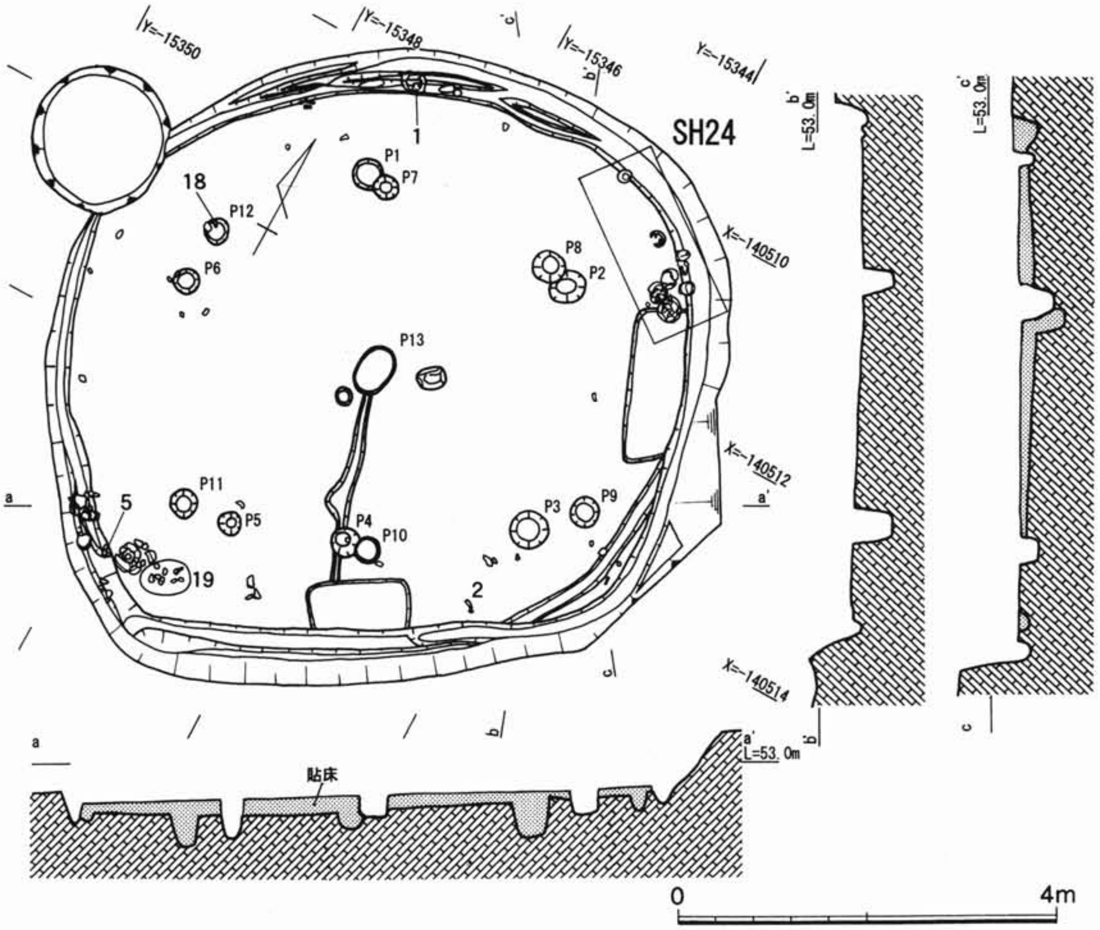
した。床面南端、南壁中央付近で、貯蔵穴とみられるピット（Ｐ９）を検出した。平面形は丸みの強い台形状を呈し、住居内側が上辺側となる。ピットの深さは約0.6mを測る。埋土は茶灰色粘質土であるが、中間層として薄い黄灰色粘質砂層がみられた。住居跡床面から弥生土器の破片が僅かに出土している(第61図50・51)。

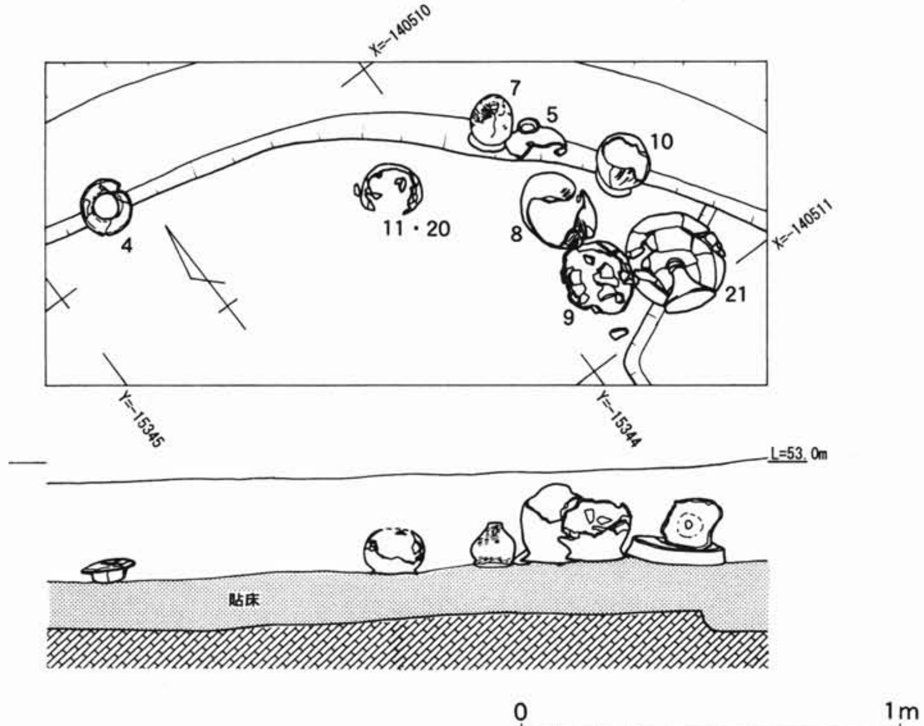
竪穴式住居跡ＳＨ24(第62図)　Ｂ２号墳北西角付近で検出した竪穴式住居跡である。調査の結果、住居跡は建て替えが行われたことが判明した。当初の住居跡は円形プランであったが、建て替え後は隅丸方形プランに変わっている。住居跡の規模は、建て替えの前後で変わることなく、ほぼ同規模のままである。

建て替え前の住居跡は、正円形ではなく、北東から南西方向にやや長い楕円形を呈している。長軸長7.2m、短軸長6.4mを測る。壁高は、残りの良い北東部で0.6m、南東側は0.2mを測る。床面外周には幅0.2m、深さ0.1mの周壁溝がめぐる。東側の壁面近くに貯蔵穴とみられる長方形の浅い窪みが存在する。この窪みは、長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。底面はほぼ水平である。主柱穴は６か所で、建て替えに伴う新たな柱穴も近接して認められる。新旧の主柱穴は切り合う例（Ｐ１とＰ７、Ｐ２とＰ８）があり、深い柱穴Ｐ１～Ｐ６が当初の住居に伴う。床面では、中央部に浅いピット（Ｐ13)が存在した。この中央ピットから南西方向に、周壁溝まで達する小規模な溝が認められた。Ｐ13は、窪みの埋土に灰が混入していることから炉跡と考えられる。また、炉跡から南西にのびる細い溝は、住居内の区画溝と判断される。

建て替え後の住居跡は、それまでの円形住居を同一場所で隅丸方形に作り替えている。もともと楕円形の平面形であったが、短軸側の住居北西と南東両端の周壁溝を住居内側に掘り直して、住居の幅を狭めている。周壁溝は、南東側が直線的に掘り直され、東北と南西側はやや弧状を保っている。北西部周壁溝は、当初の円形住居の名残を強く残している。住居跡の作り替えに際しては、当初の床面上に土を充填し貼り床を行っている。貼り床の厚さはおよそ0.15mである。主柱穴は６か所で、位置は当初の場所と大きく動いてはいない。

住居跡の北東隅と南西角付近を中心に、完形品を含む多くの土器が出土した(第69図１～24)。第62図下は北群の土器の出土状況図である。完形品の甕５点・壺１点・高杯１点が集中する。土器は遺存状態が悪く、周囲の土砂を取り除く過程で器表面の剝離と崩壊が進み、調査は困難を極めた。これらの土器は、すべて口縁側を下にして床面上に置かれた状況で出土した。壁面に向かって右端に高杯(21)、その左側に近接して甕が３点(8～10)、やや離れて甕(7)と鉢(11)、壺(5)は甕群の中にあって壁面側から出土した。この土器群の西側、約0.6m離れた床面上から壺の口縁部１点(4)が出土した。壺の体部は住居跡内に存在していない。さらに、2.4m離れた住居跡北壁に接する位置からも甕が出土した。この甕も口縁を下に向け、床面上に置かれている。土器の残りは悪い。南西側出土の土器群は、甕と高杯である。周囲の土砂とほぼ同質な状況にあり、検出時のままの取り上げは不可能であった。検出状況から、壁面に沿って中央に高杯、両横に甕を置く配列であったと判断する。高杯は口縁部を下にして置かれていた。甕については、破片が集中して出土したが、口縁部と底部の位置関係が不明のため詳細は明らかでない。この３点は形が

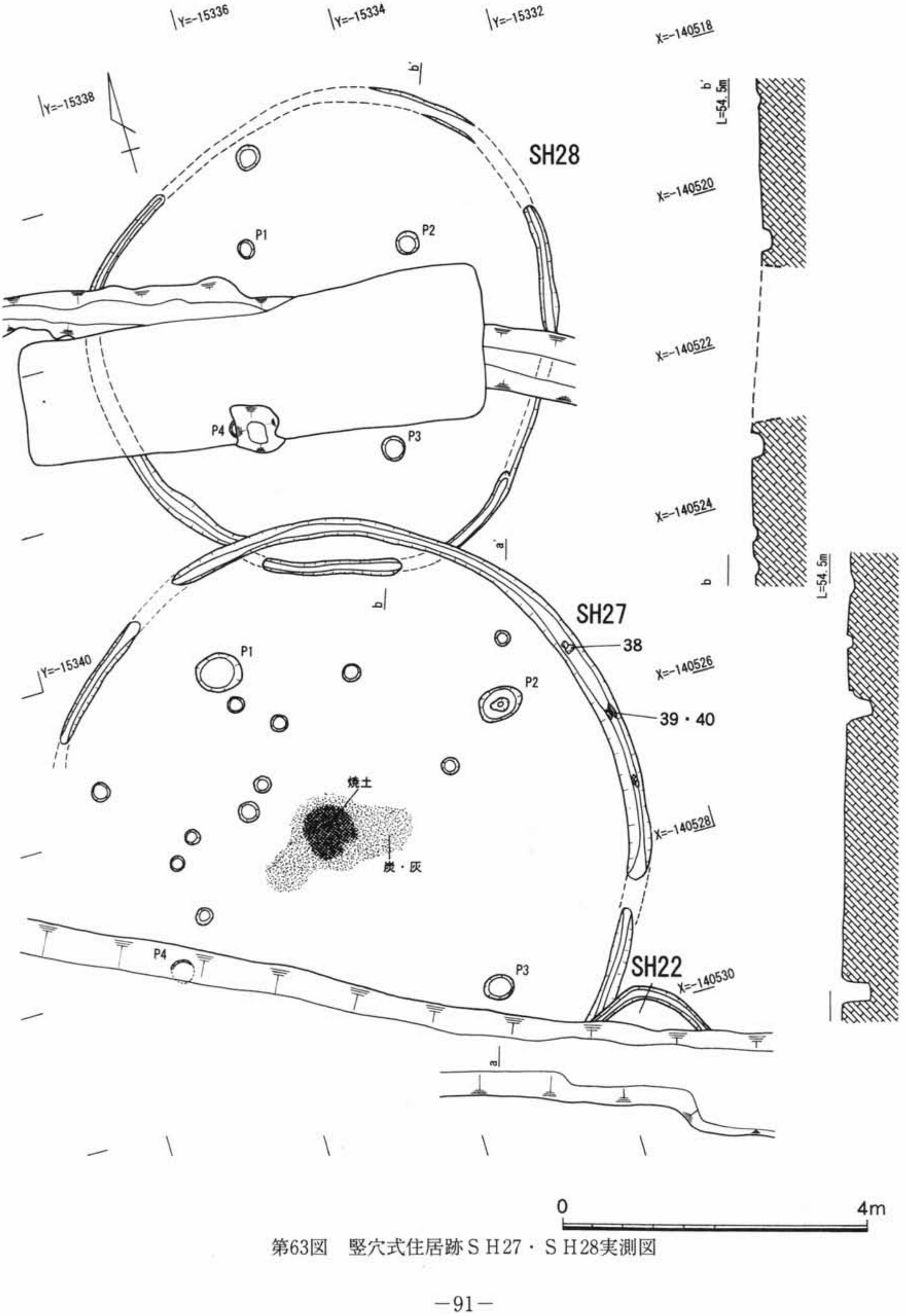




第62図　竪穴式住居跡ＳＨ24実測図

保てず、図化は不可能であった。住居跡中央部の床面では、土器のほかに台石と判断する川原石が出土した。石材は丸みを帯びたチャートで、大きさは一辺20cm×30cm、厚さ12cm前後である。石材上面は側面部と変わらず、滑らかではあるが不規則に波打っている。顕著な使用痕はみられない。

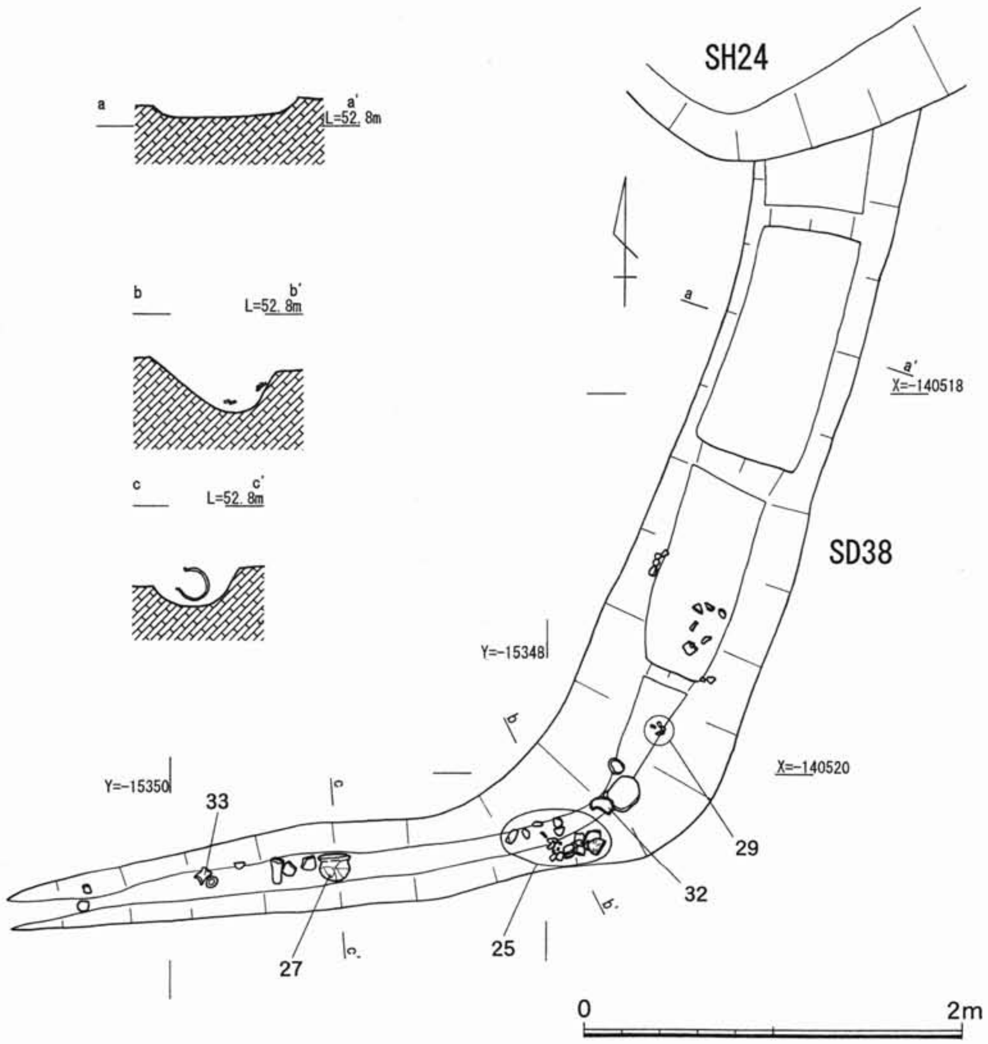
竪穴式住居跡ＳＨ27（第63図）　円形プランの竪穴式住居跡である。ＳＨ22の北側に位置し、Ｂ



第63図　竪穴式住居跡ＳＨ27・ＳＨ28実測図

２号墳の墳丘下となる。竪穴式住居跡ＳＨ22・ＳＨ28に重複する。ＳＨ22よりは古く、ＳＨ28よりも新しい。住居跡は著しく削平をされ、住居壁はすべて失われていたが、周壁溝の一部を検出することができた。住居跡の南部は、耕地区画溝によって削られている。規模は直径約８ｍを測る。床面の主柱穴は４か所である。住居跡中央の床面に炉跡が存在する。火床として、直径約0.6ｍの円形範囲で焼土が認められた。火床の周囲床面上には、炭化物混じりの灰層が堆積している。灰層は、東と南西の２方向に掻き出された状況が、灰層の広がりで確認できた。住居跡の東側周壁溝付近から土器が出土した(第70図38～40)。

竪穴式住居跡ＳＨ28(第63図)　ＳＨ27の北側に位置し、住居の南端がＳＨ27に切られる。また、住居跡の中央部は、Ｂ２号墳埋葬施設ＳＸ12と耕地区画溝によって、大きく壊されている。住居跡プランは円形で、ＳＨ27より規模は小さい。住居壁は削平によりすでに失われていたが、周壁溝を検出した。プランは正円形ではなく、北東から南西方向の長径は6.3ｍを測る。床面上から主柱穴４か所を検出した。柱穴は円形で、４か所とも直径0.3ｍ、深さ0.15ｍ前後を測る。遺物は出土はしなかった。



第64図　溝ＳＤ38実測図

溝ＳＤ32　ＳＨ28の北6.5ｍのところで検出した素掘り溝である。ほぼ直角に曲がる角部を検出した。溝は、幅約0.6～0.8ｍ、深さ0.3ｍを測る。西側溝の主軸は、北から西に約21°振る。溝の東部は耕地区画溝削平され、延長部は不明である。溝ＳＤ11は、ＳＤ32南溝とほぼ同じ方向性を示し、両溝の間隔は約10ｍを測る。両溝を同一の溝とすれば、東西方向にやや長い方形周溝墓の存在が予想される。

溝ＳＤ38(第64図)　竪穴式住居跡ＳＨ24の南で検出した、「Ｌ」字状に曲がる素掘り溝である。溝の北側はＳＨ24に切られることから、住居跡より古い。幅0.4～0.8ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測る。当初、ＳＨ24の排水溝と考えたが、切り合い関係が認められ、溝底が住居床面から約0.2ｍ上の壁面にあることから、住居跡とは別遺構と判断した。溝からは、完形品を含む多くの弥生土器が出土した(第70図25～33)。

集石遺構ＳＸ23(図版第64－(3))　Ｂ１号墳の北側、北西方向に下がる小規模な谷地形の堆積土(黄色微砂質土)から、サヌカイト剥片が集中して出土した。この黄色微砂質土は、竪穴式住居跡ＳＨ19・20の基盤土中でもある。出土地点は、竪穴式住居跡ＳＨ19の西側で、約1.5ｍの範囲に集中した。剥片は大小あわせて23点を数えた。小さなものは４cm前後で薄い剥片である。大きなものは一辺約10cm、厚さ１cm前後である。特に大型の剥片が多数を占める。剥片は、自然面を残し、接合資料も含まれる。石器製作途中の剥片群とみられるが、竪穴式住居跡や土坑などに伴う状況は確認できない。遺物は整理中であり、詳細な検討を行った上で、報告する予定である。

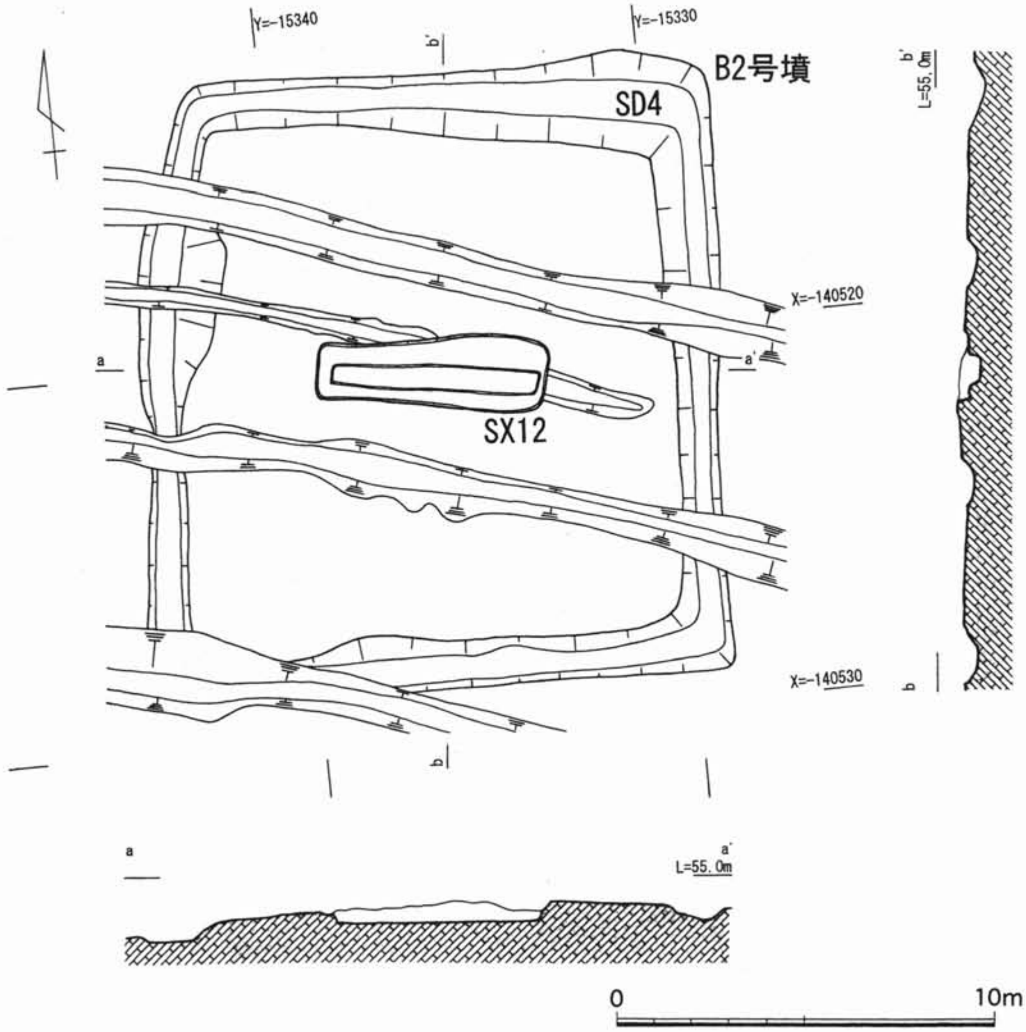
(2) 内田山Ｂ２号墳

Ｂ２号墳は、Ｂ１号墳が立地する尾根から北に派生した支尾根上で検出した方墳である。Ｂ２号墳は、Ｂ１号墳の北、約33ｍ離れたところに位置する。Ｂ２号墳のある支尾根は、Ｂ１号墳に近い南側分岐部付近の尾根は痩せているが、中央部から北側先端にかけて尾根幅は広がる。Ｂ２号墳は、この尾根の幅が広がる中央部の南端、支尾根の最高所に築かれている。

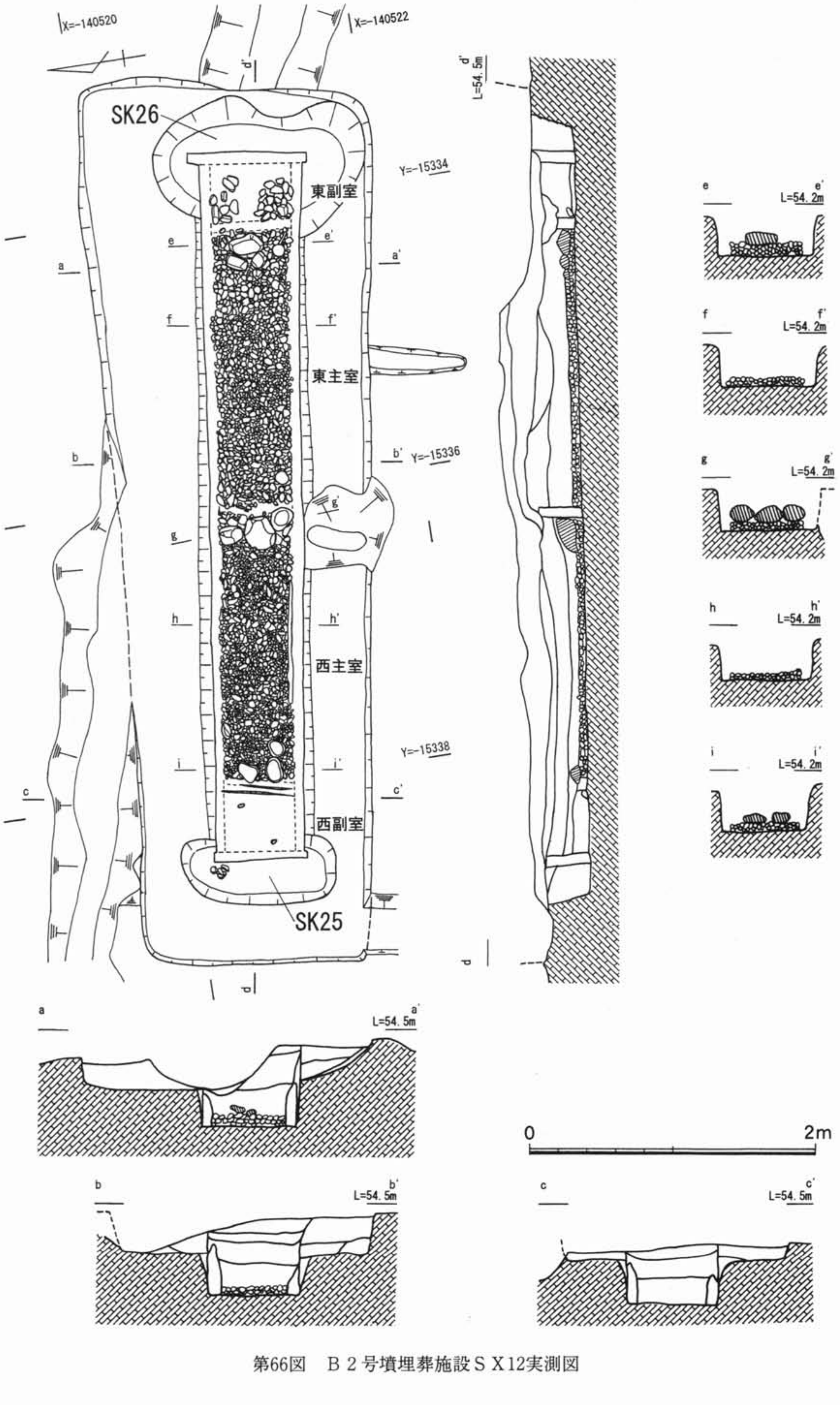
墳丘(第65図)　Ｂ２号墳は弥生時代の竪穴式住居跡ＳＨ27・28の上に築かれている。後世の削平が著しく、墳丘の高まりはほとんど確認できない。腐植土と旧耕作土の下には地山面が広がる。周溝ＳＤ４は、竪穴式住居跡の床面よりも深く掘り込まれている。周溝底は水平ではなく、南東コーナー付近の溝底が最も高く、北西コーナー側が低くなる。ＳＤ４は幅２ｍ、深さ0.4ｍを測る。周溝底南東コーナーの標高は約54ｍ、北西コーナーでは約53.3ｍを測る。周溝の四辺は、東側周溝が高く西側周溝が低い。最も低い西側周溝底と墳丘の残存高は、最大で約１ｍを測る。周溝内中層から、布留式甕の破片と少量の埴輪片が出土した。墳丘裾でみる古墳の規模は、南北14.5ｍ、東西13.5ｍである。墳丘部分には若干の盛土が存在したと推測されるが、築造時の墳丘高は削平を受けて不明である。墳丘は、地山を大きく掘り込んだ埋葬施設ＳＸ12の状況などから、さほど高くない低墳丘とみられる。Ｂ２号墳の東辺と南辺の方位は、ほぼ正方位に一致する。

埋葬施設(第66図)　古墳の中央部から、木棺直葬の埋葬施設(ＳＸ12)１基を検出した。ＳＸ12のほかに埋葬施設は確認できない。ＳＸ12の主軸は東西方向で、東に対して南に約９°振っている。墓壙は、地山を階段状に２段に掘り下げる、いわゆる２段墓壙である。１段目の墓壙の形状

は長方形を呈するが、東小口側が幅広となり、西小口方向にかけて幅が減少していく。１段目墓壙は全長約６ｍ、東小口幅約２ｍ、西小口幅約1.6ｍを測る。深さは、最大で約0.2ｍを測る。２段目は木棺の設置を目的としており、１段目墓壙底の中央からやや南に片寄って存在する。２段目墓壙の掘形は、東西両小口部分がそれぞれ主軸に直交する楕円形の土坑（ＳＫ25・26）が一連の作業で掘られている。西のＳＫ25は南北1.1ｍ、東西0.5ｍを測る。ＳＫ26は南北約1.5ｍ、東西約１ｍを測る。土坑ＳＫ25・26とも、底面は２段目墓壙底と同じくする。２段目墓壙の掘形は、土坑ＳＫ25・26を含め、全長約5.6ｍを測る。深さは１段目墓壙底から最大で0.3ｍを測る。土坑埋土上面での精査により、木棺の長側板と小口板との接合状況を窺える痕跡が確認できた。土坑内埋土は木棺の側面を取り巻く裏込め土である。木棺材は残っていないが、木棺痕跡が認められた。木棺の小口の形状は、側板の両端を２枚の小口板で挟み込む、いわゆる箱形木棺と呼称するものである。また小口板は側板幅よりやや長く、外側に飛び出している。土坑ＳＫ25・26は、木棺の側板が長大で重量物でもあったことから、側板と小口板の据え付けに伴う作業スペースとして設けられたと考えられる。



第65図　内田山Ｂ２号墳実測図



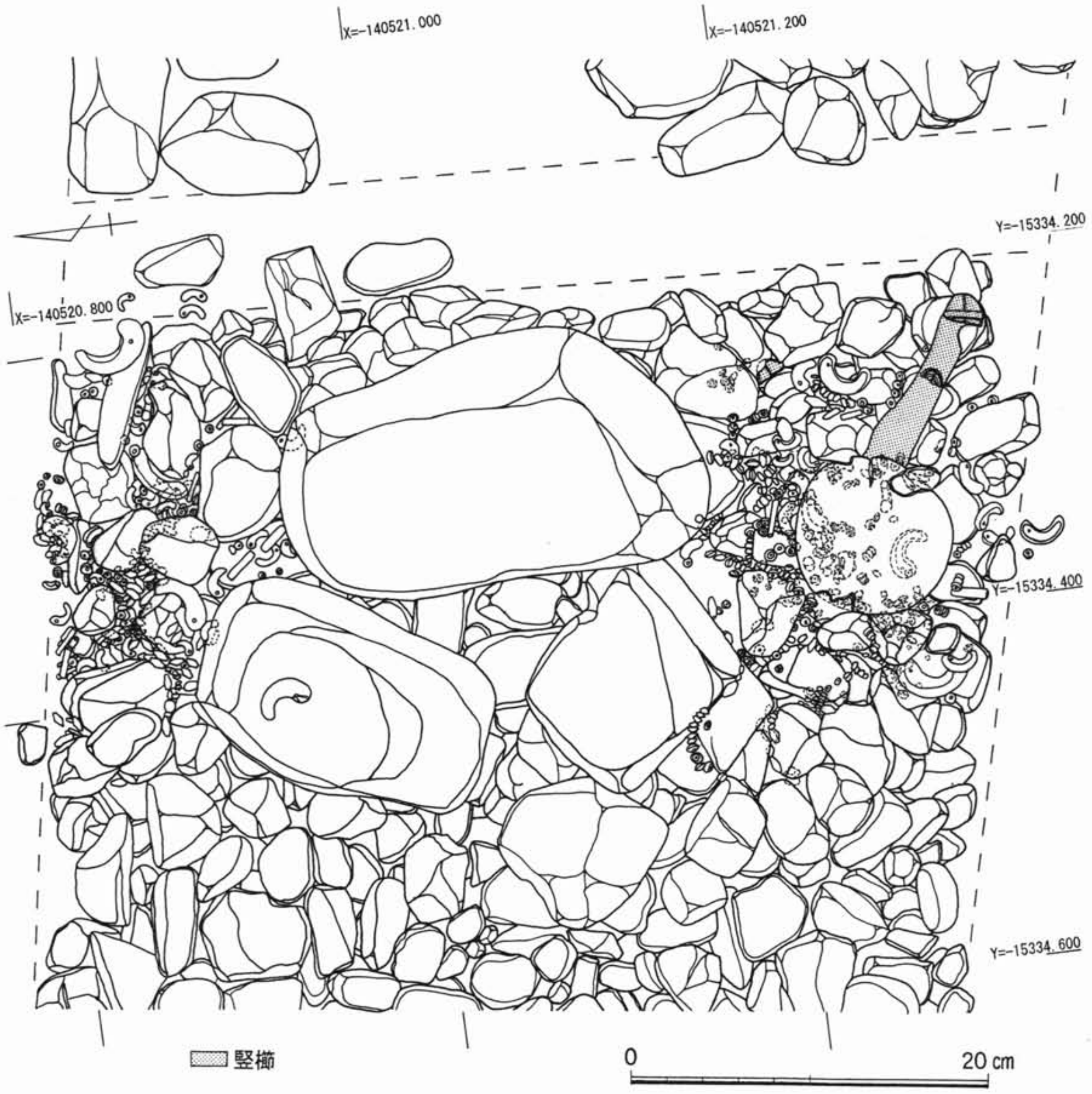
第66図　Ｂ２号墳埋葬施設ＳＸ12実測図

木棺　墓壙掘形の形状と小口の状況から、箱形木棺と判断している。棺材は腐って消滅しており、樹種などは不明である。木棺の規模は、東西両小口板の内法が側板の全長を示しており、長さは4.78ｍを測る。小口板の厚さを加えれば木棺の全長は外法で4.9ｍを測る。木棺幅は、掘形同様に東小口側が西小口側に対し幅が広い。東小口の幅は外法で0.7ｍを測る。西小口幅は0.6ｍを測る。木棺内法では、東小口が0.54ｍ、西小口で0.48ｍである。木棺の高さについては不明である。

全長4.78ｍを測る長大な木棺内には、礫床と呼ぶ小さな小石が底面に敷き詰められている。この礫床には、主軸に対して直交する方向に幅約６～８㎝の石の途切れる部分が３か所確認され、ここに仕切り板が存在したと考えられる。このことから木棺内は、仕切り板によって４区画に分割されていたことが明らかとなった。木棺内の区画は、棺中央の仕切り板で大きく東西に２分割される。東西それぞれの区画は、もう１か所の仕切り板によって、さらに２つの区画に分割される。木棺内の区画は、中央仕切り板を中心として、東西の２区画が対称的な配置状況を示す。中央部の２区画は、東側区画が内法長1.92ｍ、西側区画が内法長1.82ｍを測る。東西両端の区画はともに小規模で、東端区画は内法長0.4ｍ、西端区画は内法長0.5ｍを測る。この区画状況から、中央の２区画は被葬者を埋葬した主室であり、東西両端の区画はそれぞれの主室に伴う副室と考えられる。礫床は、東西の両主室部分に認められ、５㎝前後の厚さでていねいに小石が充填されている。また、礫床は木棺の側板と仕切り板に接する部分に大きめの小石を選ぶとともに、やや盛り上げる充填状況が認められた。横断面形では、中央部が浅く窪んでいる。東副室でも小石が、南北の棺側板側に寄った状況で検出された。この副室の小石は主室の礫床とは異なって、棺底面をすべて覆う状況にはない。また、７～10㎝と大ぶりな石が選別されているが、ていねいな配石状況ではない。ただ、石材は礫床に使用された石材と変わりない。

東主室　礫床範囲が主室の内法規模と一致し、全長1.92ｍ、東端部幅0.54ｍ、西端部幅0.5ｍを測る。礫床東端部には、花崗岩の川原石４石を配石した、枕施設(枕石)が存在した。枕石に使用された石は、角の取れた平たい方形の石が選ばれている。特に被葬者の後頭部下にあたる主たる枕石は、中央部の東端にあって、ほぼ仕切り板に接していたとみられる。この中央枕石は、長さ約24㎝、幅14㎝、最大厚７㎝を測る。石の上面は中央やや東側に稜線があって、棺の内側(西側)に下がる傾斜面を向ける。この中央枕石の棺内側(西側)には、やや小形で方柱状の川原石が配石される。中央枕石との位置関係から、この２石は、被葬者の下顎もしくは頸椎部分の固定を目的としたものとみられる。

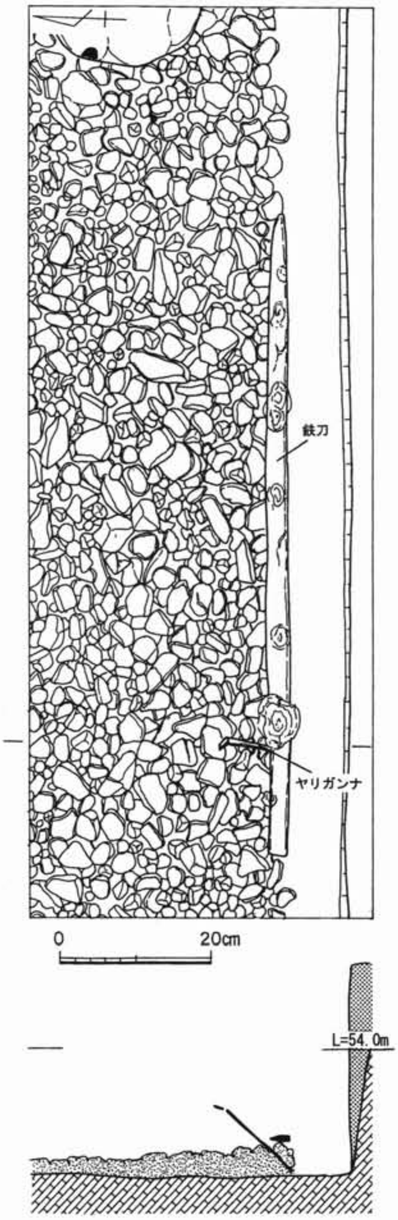
東主室では、枕石の周囲から銅鏡１面・多数の玉類・竪櫛数点が出土した。これら副葬品は第67図にみるように、中央枕石を挟んで北側と南側の２群に別れて出土している。北群は被用者頭部の右側、南群は頭部左側となる。副葬品の構成は、北群は勾玉・管玉・棗玉・算盤玉・臼玉など、玉類のみである。南群は、内行花文鏡１面と玉類・竪櫛で構成されている。玉類の出土総数は931点を数える。このうち北群は426点を占め、内訳は勾玉134点、管玉48点、棗玉93点、算盤玉150点、臼玉39点である。南群は総数505点で、内訳は勾玉30点、管玉8点、棗玉34点、算盤玉



第67図　ＳＸ12東主室枕石および副葬品出土状況図

145点、臼玉288点である。これらの玉類は、礫床の上面で小石間や隙間、棺側板や仕切り板の置換土から出土した。玉類は、数個単位ながら穿孔部分が密着し、かつ穴が通じる状況が多くのか所で確認できた。この状況から玉は、副葬時点では糸に通され、連結していたと判断する。糸の腐朽に伴い玉類の大部分は、原位置から礫床の隙間などに動いているが、一部の玉類は原位置を保っているとみられる。すべての玉類の配列状況は復原不可能である。ただ、小形の勾玉・棗玉・算盤玉・臼玉は、それぞれ同種の玉が連なっていたようである。算盤玉では10数点、臼玉では20数点が整然と連なる状況が確認できた。

内行花文鏡は、南群の副葬品の中央付近、中央石枕のやや南西側から出土した。鏡面を上に向け、鏡面上に玉類は存在しない。鏡面下には多数の玉類が存在した。この銅鏡は特に遺存状況が悪く、土圧や礫床の小石突起に応じて細かくひび割れるなど、錆が進行していた。出土時点では完全な姿を保っていた銅鏡も、現地での表面硬化処理の甲斐なく、粉体化の著しい部分は失われてしまった。この内行花文鏡の直径は９cmを測る。



第68図　ＳＸ12西主室遺物出土状況図

竪櫛は、南群の副葬品中の南東側、棺側板と仕切り板の接合部付近にみられた。頭部にのみ黒漆が塗布され、櫛歯は素材のままであったとみられる。竪櫛は４点が出土し、うち２点は頭部幅2.3cmの大型製品、ほかの２点は1.2cmの小型製品であった。大型品２点と小型品１点は、棺内南東隅に竪櫛頭部を置き、銅鏡方向に櫛歯を向けて出土した。残る小型の１点は北に離れて出土した。この竪櫛も、櫛歯を銅鏡方向に向けていたようである。

副葬品以外では、被葬者の左側、銅鏡の西端部から西側0.2m四方の範囲にかけて、礫床小石面に鮮やかな朱の痕跡が確認された。朱は塗布された状況にはなく、２～５㎜の円形もしくは楕円形の飛沫痕跡として認識される。

西主室　内法規模は、全長1.82m、東端部幅0.52m、西端部幅0.48mを測る。礫床東端部と西端部の２か所に枕施設が存在する。東端部の枕施設は、やや大きな花崗岩の川原石３石を使用し、横１列に配置する。西端部の枕施設は、小さい花崗岩の川原石３石を配石する。

東端部の枕石は、中央の１石が特に大きく、主たる枕石とみられる。この枕石の上面は、東主室枕石と同様、東から西方向の棺内側に下がる傾斜面をもつ。中央枕石は、縦24cm、幅22cm、高さ15cmを測る。両脇の２石はやや小ぶりの石が使用されるが、高さは中央枕石とほぼ揃えている。

西端部の枕石は、北側に１石、南側に２石を使用し、棺内側に「ハ」の字に配置される。南側の枕石は東西に２石が連なる。枕石は、西端の２石で被葬者頭部を固定していたとみられる。また、この２石の西端部は仕切り板相当部分まではみ出す。西端の枕石２石は、仕切り板に立て掛けて設置され、西東方向の棺内側に傾斜面を向けていたとみられる。

副葬品としては、南側棺側板に接する礫床上から鉄刀１点と鉇１点、東側枕石付近で竪櫛２点が出土した(第68図)。鉄刀は切先を東に、刃部を棺内側に向ける。鉇は鉄刀刃部側、関部付近から出土した。鉇の出土状況には、特異性が認められた。鉇は基部側を鉄刀下に深く沈め、刃部を北側斜め上方に向ける状態で出土した。鉇の基部の上に鉄刀が横たわり、下端は礫床下の墓壙底に達している。土圧などの影響は考えにくく、礫床の隙間に意識的に差し込まれた可能性が高い。竪櫛は、櫛頭部に塗布された黒漆皮膜のみが出土した。出土位置は東側枕石の中央枕石西側であり、２点の竪櫛はやや離れて出土した。

西副室　東側仕切り板と西小口板間の内法は0.46m、幅は0.48mを測る。底面に礫床や小石は

みられない。東側仕切り板に接する底面では、ほぼ棺幅相当部分で幅約５cm、最大高約２cmの範囲で、固さのある土手状の土盛りが存在した。土手状の高まりは中央付近が最も高く、棺側板に近づくにつれ低くなっていく。検出状況から、この土手状の高まりは、仕切り板下端部の固定を目的としたものとみられる。副室内から副葬品とみられる石製紡錘車２点が出土した。２点とも側面を上に向けた状態で出土した。この出土状況から、紡錘車は中心の孔に軸棒が通されて、副葬されたと判断される。

土坑ＳＫ25は、木棺西小口部分に設けられた土坑である。東小口側土坑ＳＫ26と対になる土坑であり、木棺の側板設置に伴う作業坑とみられる。ＳＫ26は無遺物であったが、ＳＫ25では木棺西小口北端部付近の土坑底から小石４点と臼玉11点が出土した。

３．出土遺物

弥生時代と古墳時代の遺物が大多数を占め、僅かではあるが奈良時代～平安時代の土器が出土してた。今回は、弥生時代の竪穴式住居跡と溝、内田山Ｂ２号墳埋葬施設ＳＸ12から出土した遺物について報告する。内田山Ｂ３号墳・Ｂ４号墳の周溝から出土した埴輪については次年度以降に予定される調査を待って、合わせて報告していく予定である。

（竹原一彦）

(1)弥生時代の遺物

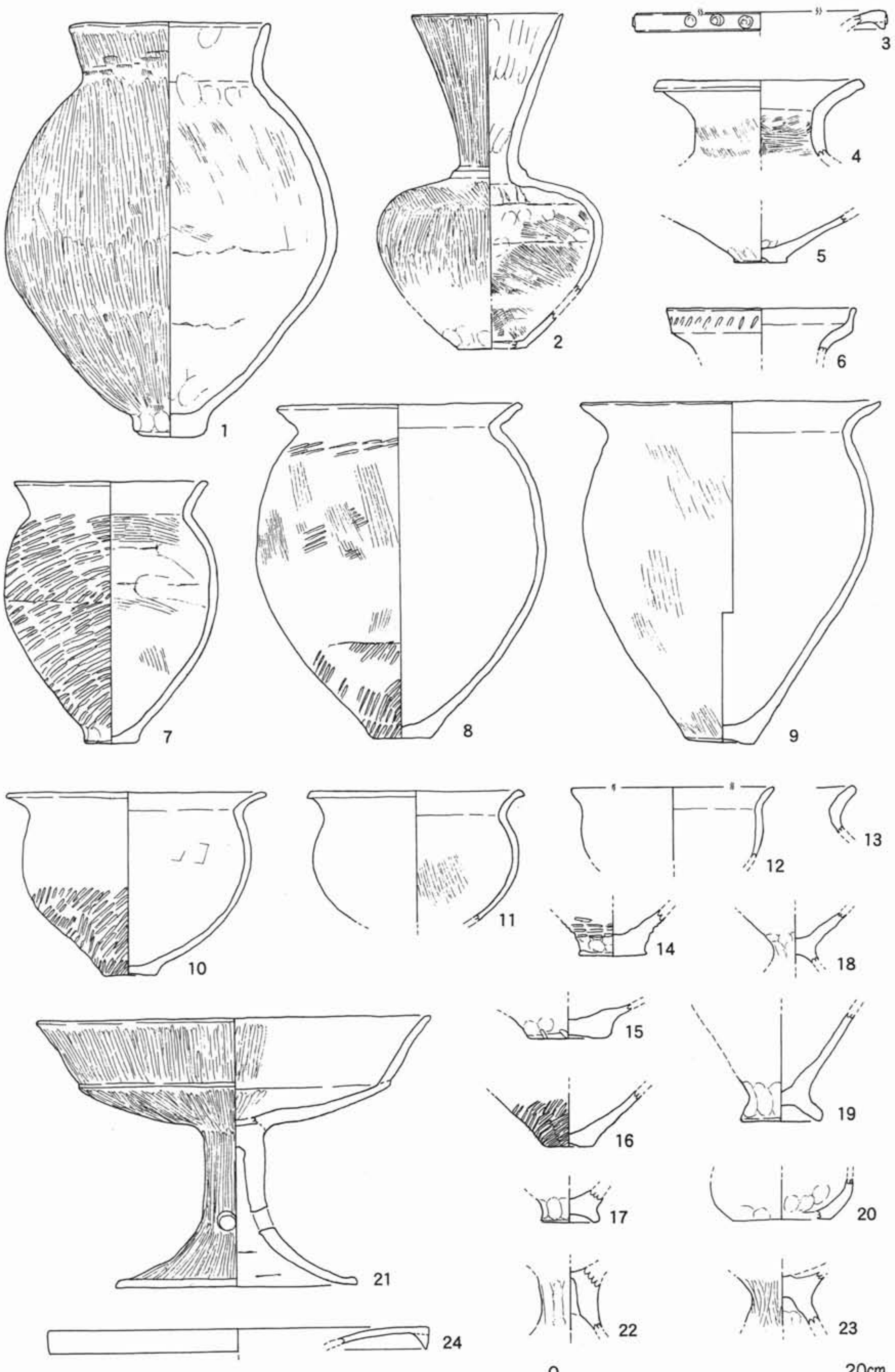
弥生時代の遺物は、整理箱にして約７箱出土した。その大半は竪穴式住居跡と溝から出土したものである。

1）弥生土器

竪穴式住居跡ＳＨ24出土遺物（第69図１～24）　ＳＨ24からは多数の弥生土器が出土した。これら中には出土状況から、住居内に放置されたと考えられるものも多く認められる（7～11・21など）。なお、６・12・17は立て替え前の周壁溝から出土した。１は大型の直口壺である。口径13.1cm、器高27.1cmである。口縁部の形状はややいびつである。体部下半に器壁がいびつに屈曲する箇所がある。底部から体部の成形に伴い、一時休止した箇所を示すものであろう。いわゆる分割成形の痕跡と判断される。口縁部外面にはヘラミガキ調整を施す。体部外面は全体にハケ調整を施した後、ヘラミガキ調整を施す。体部内面は縦方向のハケ調整の後、ナデ調整を施す。内面には接合痕が残る。ほぼ完形である。２は長頸壺である。口径10.0cm、器高22.0cmである。体部最大径が体部中位よりも上に位置するため、大きく肩が張り出した形状を呈する。外面全体にミガキ調整を施す。また、頸部に刻み目を施した突帯を貼り付ける。口縁部内面にはナデ調整を、体部内面には全面にハケ調整を施す。肩部内面には体部成形時に生じたシボリ痕が認められる。３は広口壺の口縁部と思われる小破片である。口縁部外面に竹管を施した円形浮文を貼り付ける。４も広口壺の口縁部である。口縁部にはヨコナデ調整を、頸部の内外面にはハケ調整を施す。口径13.4cm、残存高5.0cmである。５は壺の底部である。底径3.6cmである。底部はドーナツ状を呈する。内外面ともナデ調整を施す。６は甕の口縁部と考えられる。口径はあくまでも推定復原で

ある。口縁部全体にヨコナデ調整を施した後、口縁部外面に長さ0.8cm前後、幅0.2cm前後の刺突文を施す。口縁部外面にすすが部分的に付着する。7は中型の甕である。口径12.6cm、器高17.3cmである。口縁部はヨコナデ調整を施す。外面にタタキ調整を施す、内面はハケ調整の後、ナデ調整を施す。8・9はほぼ同形同大の甕である。8は口径16.0cm、器高22.0cmである。口縁部はいわゆる「く」の字状を呈する。体部は倒卵形に近いが、やや丸みを帯びる。体部下半にタタキ調整が途切れるところがある。7と同様に、底部から体部の成形に伴い一時休止した箇所を示すのであろう。いわゆる分割成形であることがわかる。口縁部はヨコナデ調整を施す。体部外面はタタキ調整を施した後、ハケ調整を施す。体部内面は丁寧なナデ調整が施される。9は口径19.9cm、器高22.6cmである。倒卵形の体部を呈する。全体に磨滅が著しいが、体部外面にわずかにハケ調整の痕跡が認められる。内面は磨滅気味であるが、ナデ調整を施す。ほぼ完形である。体部中位より上半はすすが付着するが、下半には見られない。甕の使用方法を考える上で注意すべき個体である。10～12は鉢である。10は口径16.8cm、器高12.0cmである。体部外面は体部最大径付近までタタキ調整を施すが、それより上位は全体にすすが付着しているため不明である。口縁部はヨコナデ調整を施す。体部内面はナデ調整を施す。ただ、工具痕も見られ注意される。11は口径14.1cm、残存高8.5cmである。口縁部はヨコナデ調整を施す。体部外面はすすが付着するため調整は不明である。体部内面はハケ調整の後、ナデ調整を施す。12は小破片であるが、10・11に比べて肩部が張らない。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。13は甕の口縁部の小破片である。14～16は甕の底部である。14はやや突出気味の底部で、底径4.6cmである。外面はタタキ調整を施す。また、突出部はユビオサエを施して形状を整える。内面は中心から外方へ向かってナデ調整を施す。15も突出気味の底部であるが、14ほど突出しない。底径4.9cmである。内外面ともナデ調整を施す。底端部に棒状工具による圧痕が見られる。16はほとんど突出しない底部で、底面中央がわずかに窪む。底径3.0cmである。外面はタタキ調整で、タタキ痕はほかの例に比べてやや細い。内面はナデ調整である。17は鉢の底部で、底径3.8cmである。外面はユビオサエで整形する。内面はナデ調整である。18・19は脚台付鉢である。18は脚台外面に成形時のユビオサエ痕が残る。内外面ともナデ調整である。19は底径5.3cm、残存高7.0cmである。脚台外面には成形時のユビオサエ痕が明瞭に残る。脚台内面や体部内面はナデ調整を施す。20は壺もしくは鉢の底部である。底部は広い平底状を呈し、底径6.6cmである。内外面とも磨滅気味であるが、ナデ調整を施す。21は高杯である。口径25.9cm、器高17.8cm、底径16.0cmである。外面全体にヘラミガキ調整を施す。脚部には透かし孔を3か所穿つ。杯部内面は磨滅のため調整が不明瞭であるが、ヘラミガキ調整が一部に見られる。脚柱部内面はナデ調整、脚端部はヨコナデ調整を施す。22は高杯の脚部である。外面は磨滅しているが、ヘラミガキ調整である。内面はナデ調整である。23は高杯の杯部と脚部の接合部である。外面はヘラミガキ調整を施す。脚部内面はナデ調整やユビオサエを施す。24は器台である。口径25.2cmである。磨滅が著しく、調整は不明である。

竪穴式住居跡ＳＨ24から出土した弥生土器は、出土状況から良好な一括資料ということができ、近年、木津町を中心に増加しつつある南山城地域の弥生時代後期の土器資料に、新たな資料を加



第69図　内田山遺跡出土弥生土器実測図(1)

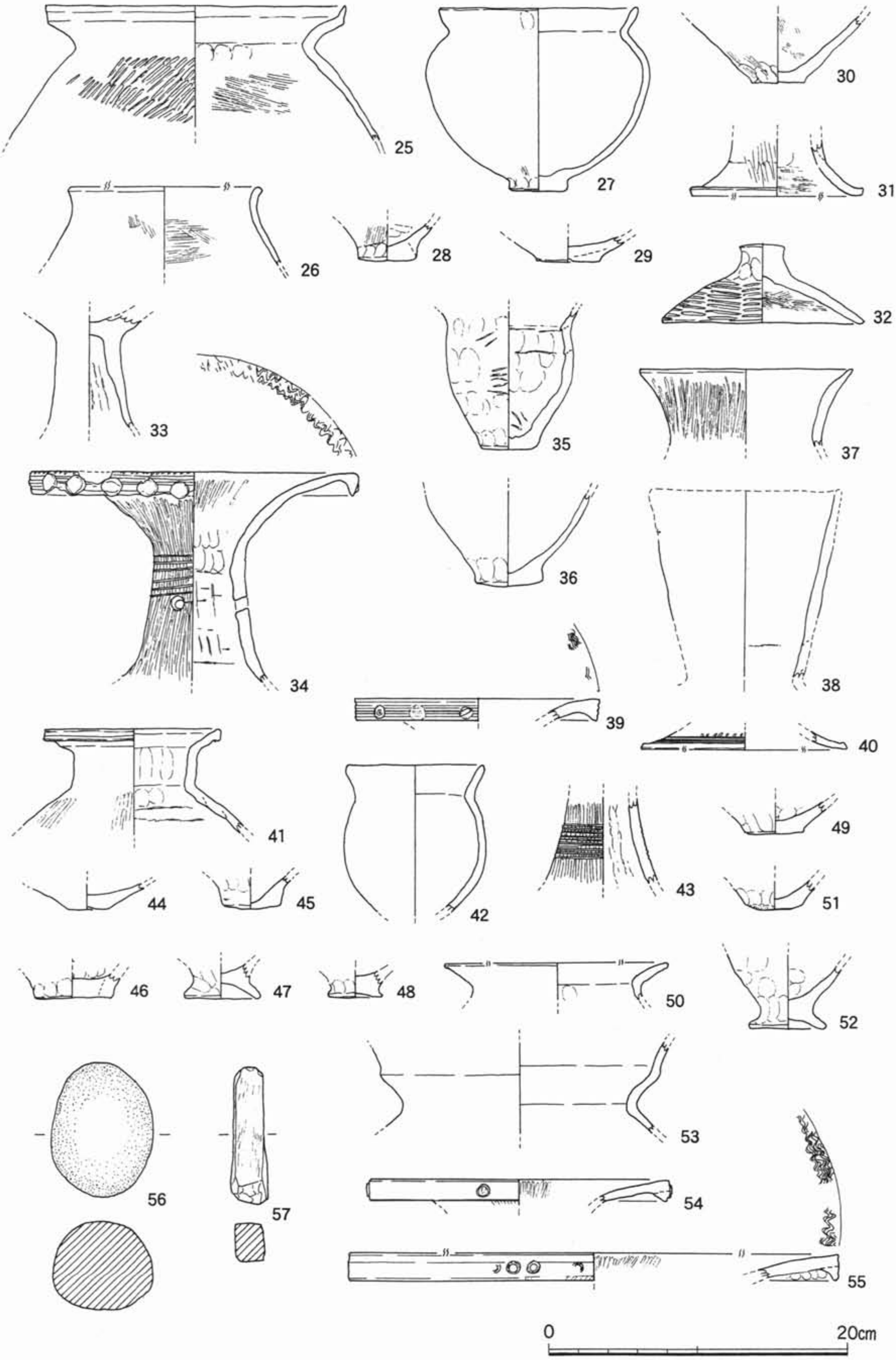
えることとなった。出土資料はタタキ調整の甕が認められる一方で、高杯の杯部が外反しない点などから、弥生時代後期中葉に位置づけられると考えられる。

溝ＳＤ38出土遺物(第70図25～33)　25は受け口状口縁を呈する甕である。口径20.0cmである。口縁部はヨコナデ調整を施す。体部外面は磨滅気味であるが、タタキ調整を施す。体部内面は摩滅が著しいが、かすかにハケ調整が施されていたことがわかる。外面全体にすすが付着する。26は口縁部が短く外反する甕で、ほかの甕とは若干異なった器形を呈する。また小破片のため、口径などはあくまでも推定復原である。口縁部はヨコナデ調整を、体部内面にハケ調整を施す。体部外面の調整は磨滅のため不明である。体部外面にすすがわずかに付着する。27は鉢である。底部は明瞭な突出が認められる。口径13.2cm、器高12.1cmである。全体的に磨滅しており、調整は不明である。28～30は甕または壺の底部である。28は突出気味の底部で、底径4.0cmである。外面は、磨滅のため不明瞭であるが、ナデ調整またはハケ調整を施す。内面はナデ調整を施す。29は底径4.4cmである。内外面ともナデ調整である。30は底径3.6cmである。外面はハケ調整の後、ナデ調整を施す。内面はハケ調整を施す。34は器台の脚端部である。小破片のため、底径は推定復原である。脚端部はヨコナデを施す。外面にヘラミガキ調整を、脚部内面はハケ調整を施す。32は蓋である。口径13.5cm、器高5.3cmである。つまみはユビオサエとナデ調整で整形する。体部外面にはタタキ調整を、体部内面にはハケ調整を施す。内面中央にユビを強く押し付けている。33は高杯の脚部で、脚端部を欠損する。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。

溝ＳＤ11出土土器(第70図34～37)　34は脚端部を欠損するが、器台である。口径21.8cm、残存高13.8cmである。口縁部はヨコナデ調整を施した後、円形浮文を均等に配置する。口縁部外面、筒部外面は全体に細かいヘラミガキ調整を施す。また、筒部にはヘラがき直線文を螺旋状に７条施す。また、透かし孔を３か所穿つ。口縁部内面にヘラミガキ調整を施した後、口縁部上面に波状文を施す。筒部内面は上半部にナデ調整を施し、下半部にケズリ調整を施す。35は口縁端部を欠損する土器で、残存高9.0cmである。内外面ともナデ調整やユビオサエを多用して成形・整形することから手づくね土器と考えられる。内外面ともにヘラ状工具による圧痕がみられる。36は壺の体部下半と考えられる。底径4.6cmである。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。37は広口壺の口縁部である。口径14.2cmである。口縁部はやや外反する。口縁端部にヨコナデ調整を施す。口縁部外面はヨコナデ調整を施した後、緻密なヘラミガキ調整を縦方向に施す。

竪穴式住居跡ＳＨ27出土遺物(第70図38～40)　38は長頸壺である。口径12.6cm、残存高12.3cmである。内外面とも磨滅、器表面の剝離が著しいため調整は不明である。39は広口壺である。口径16.5cmである。口縁部にはヨコナデ調整を施した後、３条の擬凹線文を施す。さらに竹管を施した円形浮文を貼り付ける。口縁部外面はヘラミガキ調整を施す。口縁部内面には波状文を施す。40は高杯の脚端部である。細片のため底径はあくまでも推定復原である。脚端部外面に上から刺突文と櫛描き直線文を７条施す。内面には横方向にナデ調整を施す。

竪穴式住居跡ＳＨ８出土遺物(第70図41～48)　41は広口壺である。口径11.7cmである。口縁部はヨコナデ調整を施し、口縁端部に２条の擬凹線文を施す。体部外面にはヘラミガキ調整を施す。



第70図　内田山遺跡弥生土器実測図(2)

頸部外面と内面はナデ調整を施す。体部内面には接合痕が明瞭に残る。42は小型の甕である。口径9.2cm、残存高9.7cmである。全体に磨滅気味であるが、内外面ともナデ調整で仕上げる。43は器台または高杯の脚部と考えられる。ただ、小破片のため、径などは推定の域を出ない。外面にヘラミガキ調整を施した後、櫛状工具による直線文を10条施す。内面は脚部成形時のシボリ痕が明瞭に残る。44～46は甕の底部である。44は底径2.6cmである。外面は磨滅が著しく調整不明である。内面は磨滅が著しいが、ハケ調整らしい痕跡を確認できる。45は底径4.0cmである。内外面ともナデ調整を施す。46は底径5.3cmで、やや径の大きい底部である。外面はユビオサエを施す。内面はナデ調整で平滑に仕上げる。47・48は鉢の底部である。47は脚台付鉢の底部である。底径4.9cmである。外面はユビオサエで整形する。内面はナデ調整を施す。48は底径3.7cmである。内外面ともナデ調整やユビオサエを施す。

竪穴式住居跡ＳＨ15出土遺物(第70図49)　49は壺または甕の底部である。底径3.9cmである。内外面ともナデ調整を施す。

竪穴式住居跡ＳＨ22出土遺物(第70図50・51)　50は甕の口縁部で、頸部から大きく外方に開く。口径は推定の域を出ない。口縁部はヨコナデ調整を施す。51は甕または壺の底部である。底径3.8cmである。内外面ともナデ調整を施す。

集石遺構ＳＸ23周辺出土遺物(第70図52)　52は脚台を有する鉢である。底径4.9cm、残存高5.0cmである。内外面とも、ナデ調整、ユビオサエを施す。特に外面はユビオサエの痕跡がよく残る。

溝ＳＤ16出土遺物(第70図55)　55は器台の口縁部である。細片のため口径の復原は推定の域を出ない。口縁下垂部はヨコナデ調整を施した後、上半に擬凹線文を１条、下端部に列点文を施す。口縁部外面にはミガキ調整を施す。口縁端部内面はミガキ調整を施した後、波状文を施す。

包含層出土遺物(第70図53・54)　53は壺または甕の口縁部である。口縁端部を欠損する。外面はヨコナデ調整を施すが、内面は磨滅が著しく調整は不明である。54は器台の口縁部である。口径20.0cmである。口縁下垂部はヨコナデ調整を施した後、竹管を施した円形浮文を施す。内外面ともミガキ調整を施す。　(筒井崇史)

2）石器

56は磨石と思われる。57は砥石である。57は４面のうち２面に擦痕を観察でき、使用痕が確認できる。　(坂下　実)

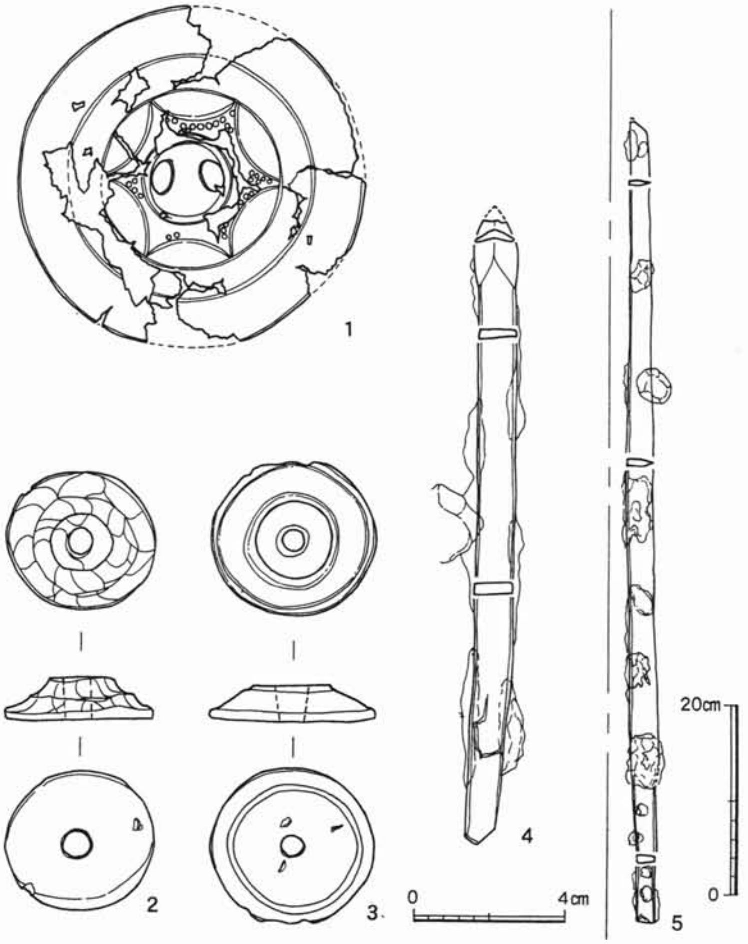
(2)古墳時代の遺物

内田山Ｂ２号墳関連の遺物であり、埋葬施設ＳＸ12から出土した副葬品である。

銅鏡(第71図１)　東主室東端の枕石の南側から出土した、小型の仿製内行花文鏡である。面径は９cmを測る。鋳上がりと遺存状況が悪く、肉眼観察では詳細について不明な点が多い。鏡は鈕の外側に圏線を配する。内区は６個の花文を置き、余白を小さな珠文で埋める。内区外側には文様帯が存在するが、文様は定かでない。外縁は広く平縁である。銅鏡は脆弱であり、図化については写真とＸ線写真をもとに作成した。

鉄刀(第71図5) 西主室から出土した。全長84.4cm、刃部の長さ約70cm、刃部幅約3cm、刃部の厚さ1.1cmを測る。関部の形状は、錆膨れのため不明である。茎部は刃部側が峰側に比べ厚みが薄い。

鉇(第71図4) 西主室で鉄刀の関付近から出土した、鉄製の鉇である。刃部先端を欠いている。残存長16.5cm、残存する刃部の長さ1.8cm、刃部幅は1.3cmを測る。茎部は幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。茎の厚さは、中央部から刃部側にかけてやや薄く仕上げる。茎端部は三角形状にカットして終わる。



第71図 埋葬施設ＳＸ12出土遺物実測図

石製紡錘車(第71図2・3) 2点とも西副室から出土した、滑石製の紡錘車である。2は断面台形状を呈し、側面は中央に稜線を残し上下2段を匙面取りする。面取りにていねいさは認められず、小さな単位の面取り面が全周にわたって残る。上辺の直径は1.5〜1.6cm、下辺の直径は3.8〜3.9cm、高さ1.2cmを測る。体部中央を直径0.8cmの円孔が貫く。3は断面台形状で、上辺の直径は2.1cm、下辺直径は4.3cm、高さは1cmを測る。側面は、上下両端部を残し、内側を削って側面にアクセントをつける。最大直径をもつ下端面は平滑に仕上げられ、外縁に沿うように内側で2条の細い線刻がみられる。外側の線刻は外縁0.4cm内側に入った位置にあり、内側の線刻はさらに0.2cm内側にある。2条の線刻は正円でないことから、線刻はフリーハンドで行われている。心棒を通す中央の円孔は、直径は上辺側が0.8cm、下辺側で0.6cmを測る。

(竹原一彦)

玉類(第72〜78図、付表2) Ｂ2号墳の埋葬施設ＳＸ12東主室の枕石周辺から多量の玉類が出土した。玉類は枕石を境に北側(北群)と南側(南群)に分かれて出土しており、合計931点を数える。その内訳は勾玉134点、管玉48点、棗玉127点、算盤玉295点、臼玉327点である。北群の玉類は、勾玉104点、管玉40点、棗玉93点、算盤玉150点、臼玉39点である。南群の玉類は、勾玉30点、管玉8点、棗玉34点、算盤玉145点、臼玉288点である。

勾玉(１～134)は硬玉製(14)と緑色凝灰岩製(25)の２点を除き、ほかはすべて滑石製である。勾玉には大・中・小の３種が認められる。大型の勾玉(1～11)は、長さ28.5～35.5mm、厚さ７～12mmであり、丁字頭勾玉２点(１・２)が含まれる。大型品は体部が丸く厚味もあり、優美な形のものが多い。長さ18～22mm、厚さ3.5～6.5mmの勾玉を中型勾玉(12～36)とした。長さ10～17.5mm、厚さ２～６mmの勾玉(37～134)を小型勾玉とした。勾玉の色調は、オリーブ灰色のものが約７割を占め、残る３割は灰色や緑灰色など暗色系の色調である。丁字頭勾玉はいずれも緑灰色を呈する。勾玉の穿孔には両面穿孔と片面穿孔があり、両面穿孔は全体の約３割、片面穿孔は約７割である。大・中・小それぞれの勾玉に穿孔方法の傾向は現れず、両面と片面の穿孔が混在する。丁字頭勾玉の１は両面穿孔であり、２は片面穿孔である。

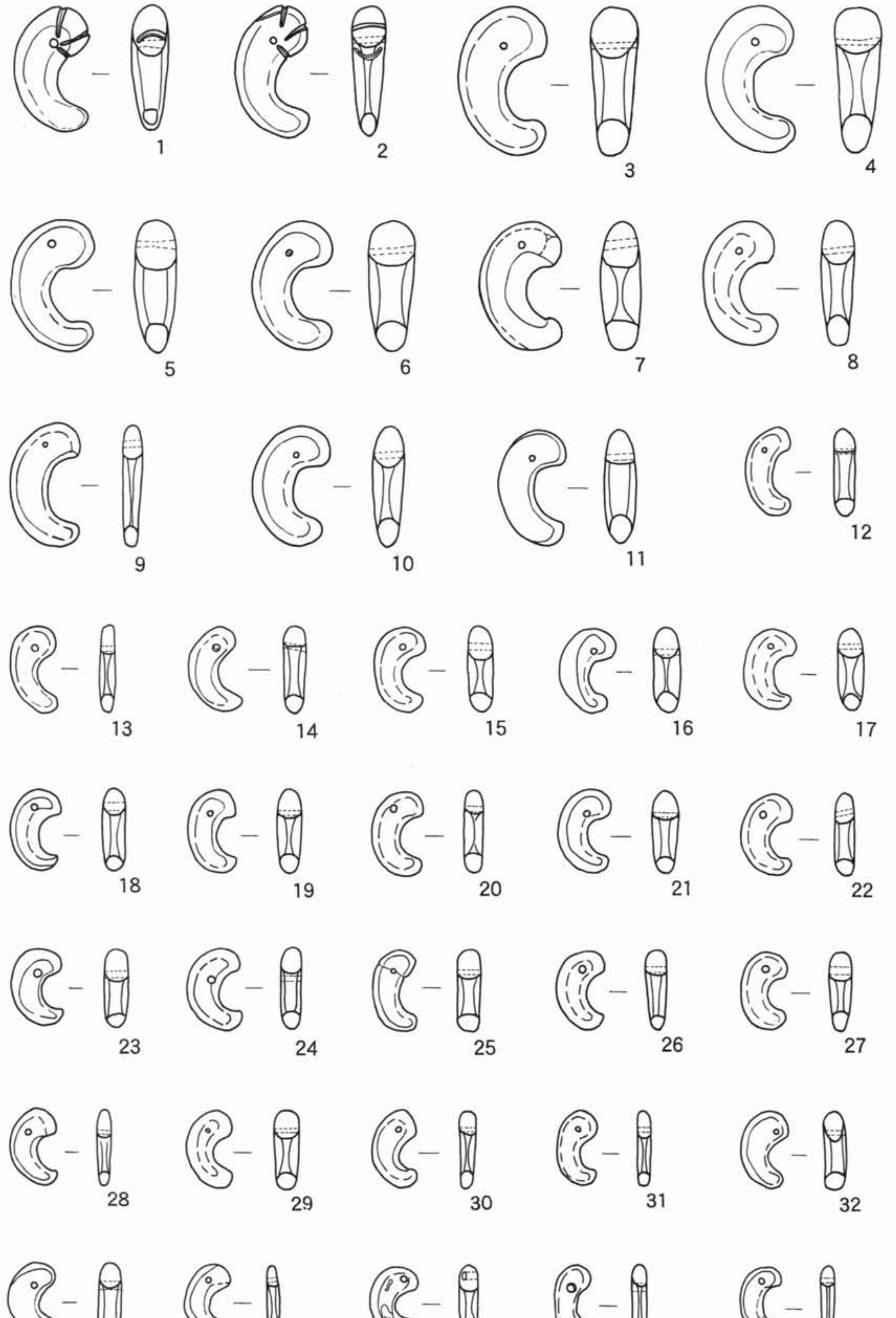
管玉(135～179)は、材質で緑色凝灰岩製と滑石製の２種がある。直径は３～５mmの細身であるが、長さに大・中・小の３種がある。大型の管玉は２点あり、178は長さ23.5mm、179は長さ24.5mmを測る。中型管玉(162～177)は、16.4～20mmの長さを測る。小形管玉(135～161)は10.5～14.5mmの長さを測る。色調は、多数を占める緑色凝灰岩製管玉が明オリーブ灰色、滑石製管玉(142・145・149)は灰白色である。穿孔方法は片側穿孔のものが約７割を占める。

棗玉(180～299)は、長さ14～18.5mm、最大幅５～７mmの大型の棗玉(180～187)と、長さ８～12mm、最大幅4.2～6.5mmの小型の棗玉(188～299)がある。大型の棗玉には、琥珀製とみられる黒褐色で軟質のもの(180～185・187)が存在する。ほかの大多数の棗玉は、滑石製である。穿孔方法は、棗玉の約８割が両側穿孔である。このうち10点(290～299)は、片側からの穿孔が２回行われている。ほかに類をみない穿孔として、296では直径約１mmの小円孔が側面に１か所穿たれている。290～299の10点の棗玉は、すべて北群から出土している。

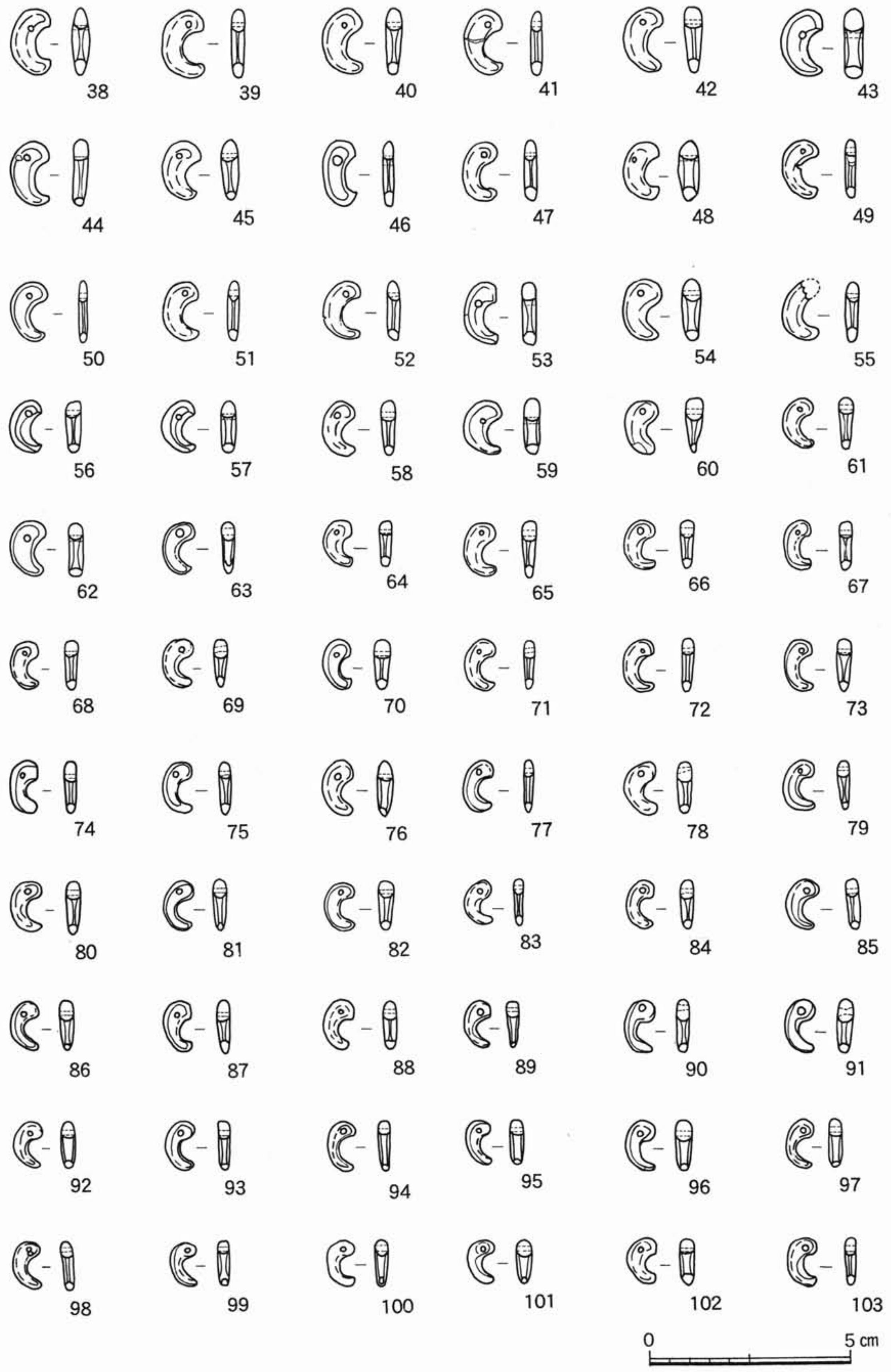
算盤玉(300～479)は、すべて滑石製である。今回は総数295点のうち180点を図示した。算盤玉は、オリーブ灰色と暗青灰色を呈すものが８割を占める。算盤玉も大・中・小の３種が認められる。最大径6.5～８mm・厚さ３～５mmの算盤玉を大型品(300～348)、最大径５～６mm・厚さ２～４mmの算盤玉を中型品(349～479)、最大径３～４mm・厚さ２～４mmの算盤玉を小型品とした。ただし、小型品については、実測図を割愛した。このうち、多数を占める算盤玉は中型品である。穿孔方法は、すべて片面穿孔である。このうち52点には端面の片面、９点には上下両面に断面「V」字状(ロート状)の窪みをもつ例がある。ロート状窪みの代表例として374・435などがある。また、穿孔は窪みの中心で行っている。

臼玉(480～598)は、すべて滑石製である。今回は総数327点のうち119点を図示した。直径５mm、厚さ２～4.1mmのものを中心に、径3.8～6.6mm、厚さ１～５mmの範囲のものが出土している。臼玉の側面は側面中央付近に稜をもつものが大多数を占め、整った円柱状に仕上げるものは僅かである。暗青灰色を呈すものが半数を占め、次にオリーブ色系のものが多い。穿孔方法は、すべて片側穿孔である。

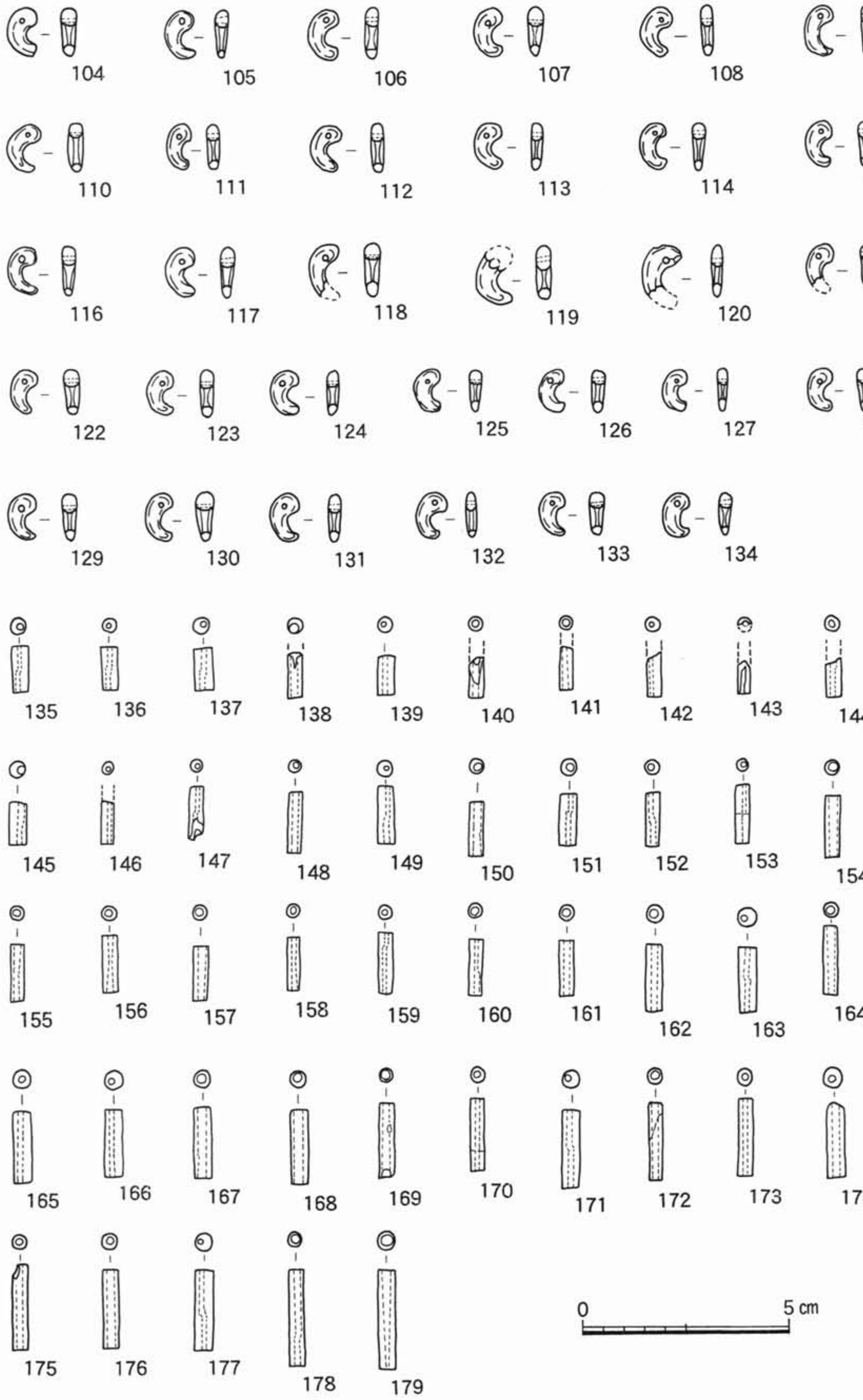
次に玉類の出土傾向についてみていくことにする。まず、玉類の分布状況を、玉の種類別にみていく。なお、ここで使用する法量分布図(第79・80図)や総延長などの数値は、完形品のみを対



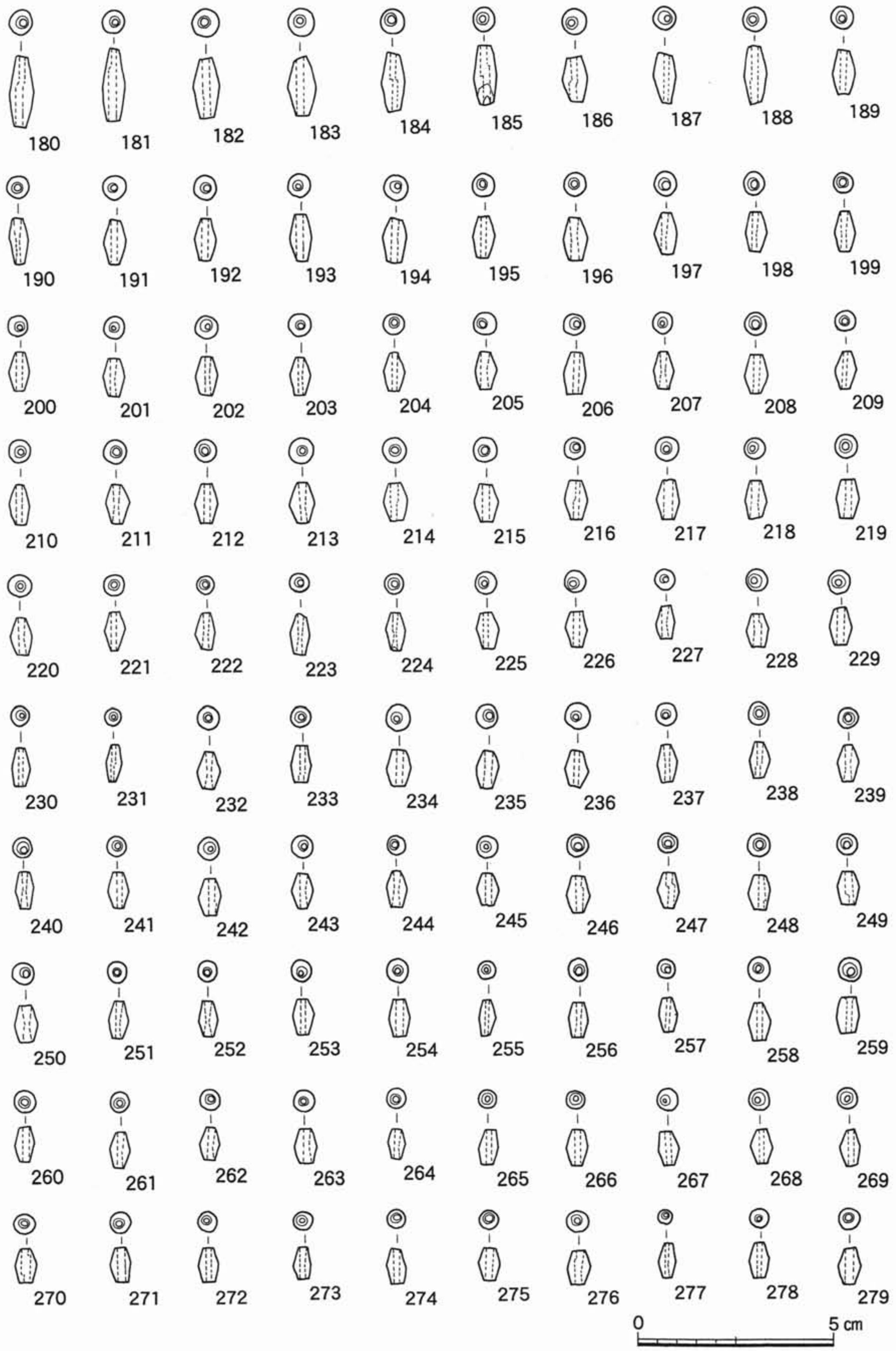
第72図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(1)



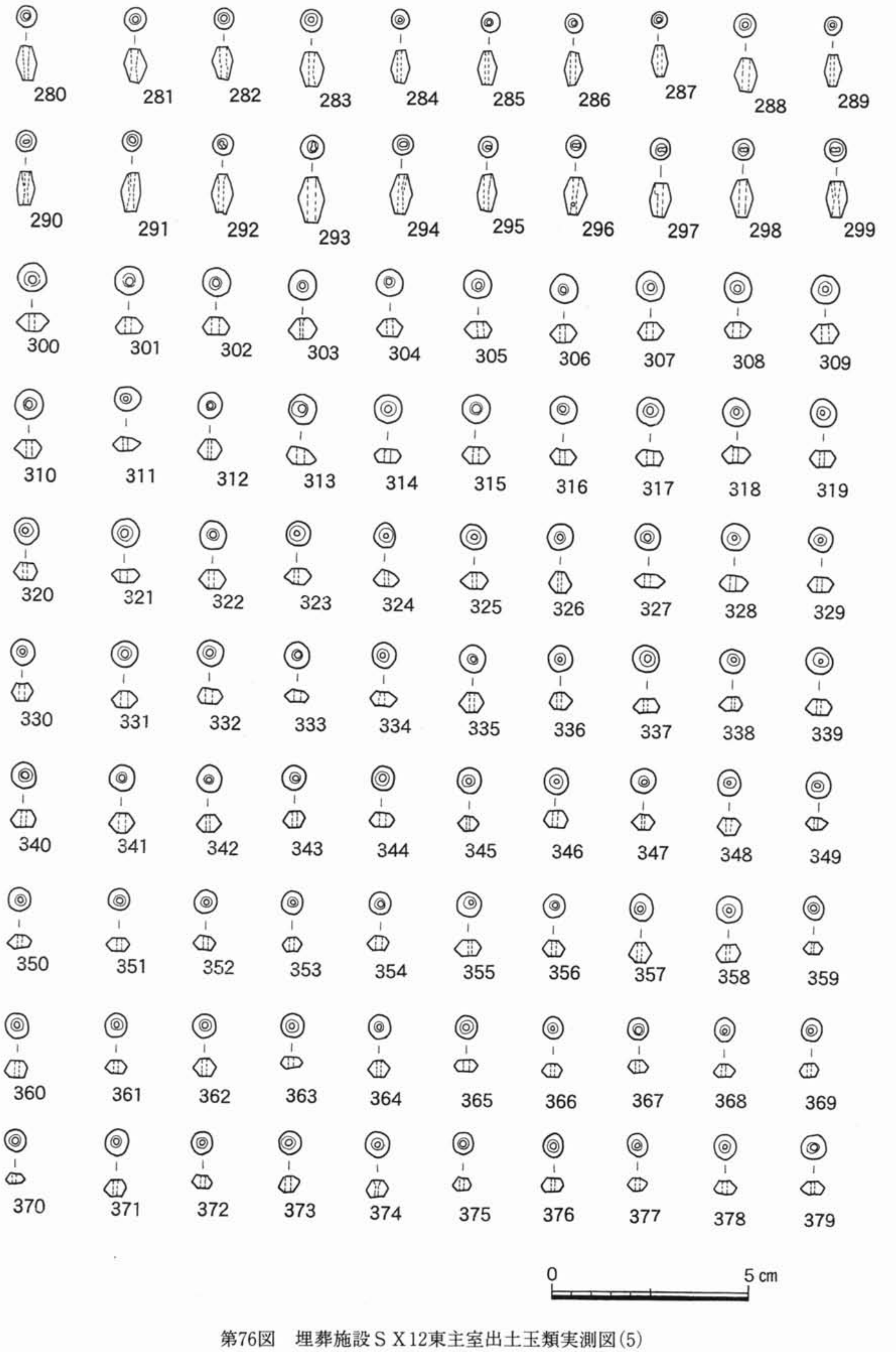
第73図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(2)



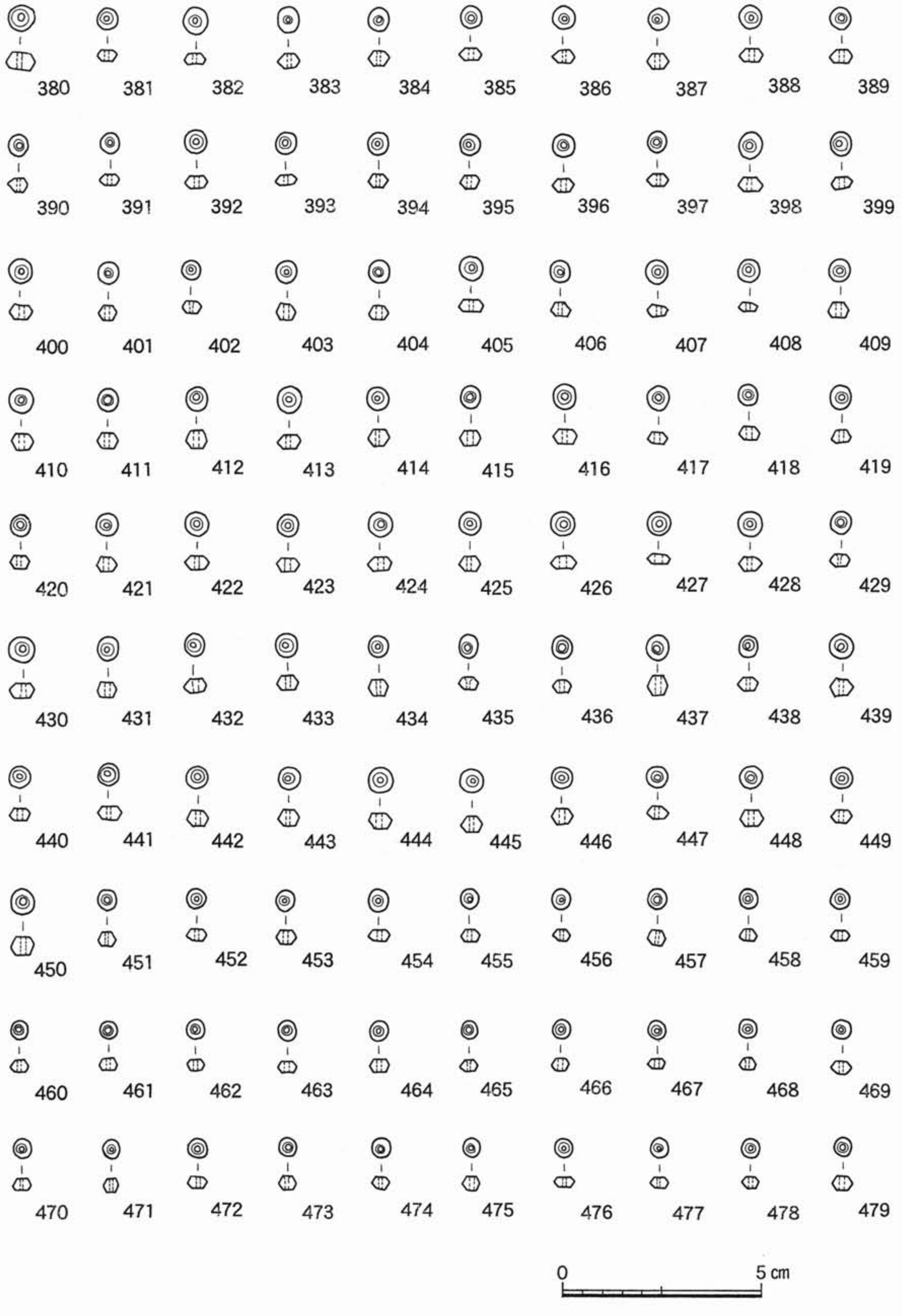
第74図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(3)



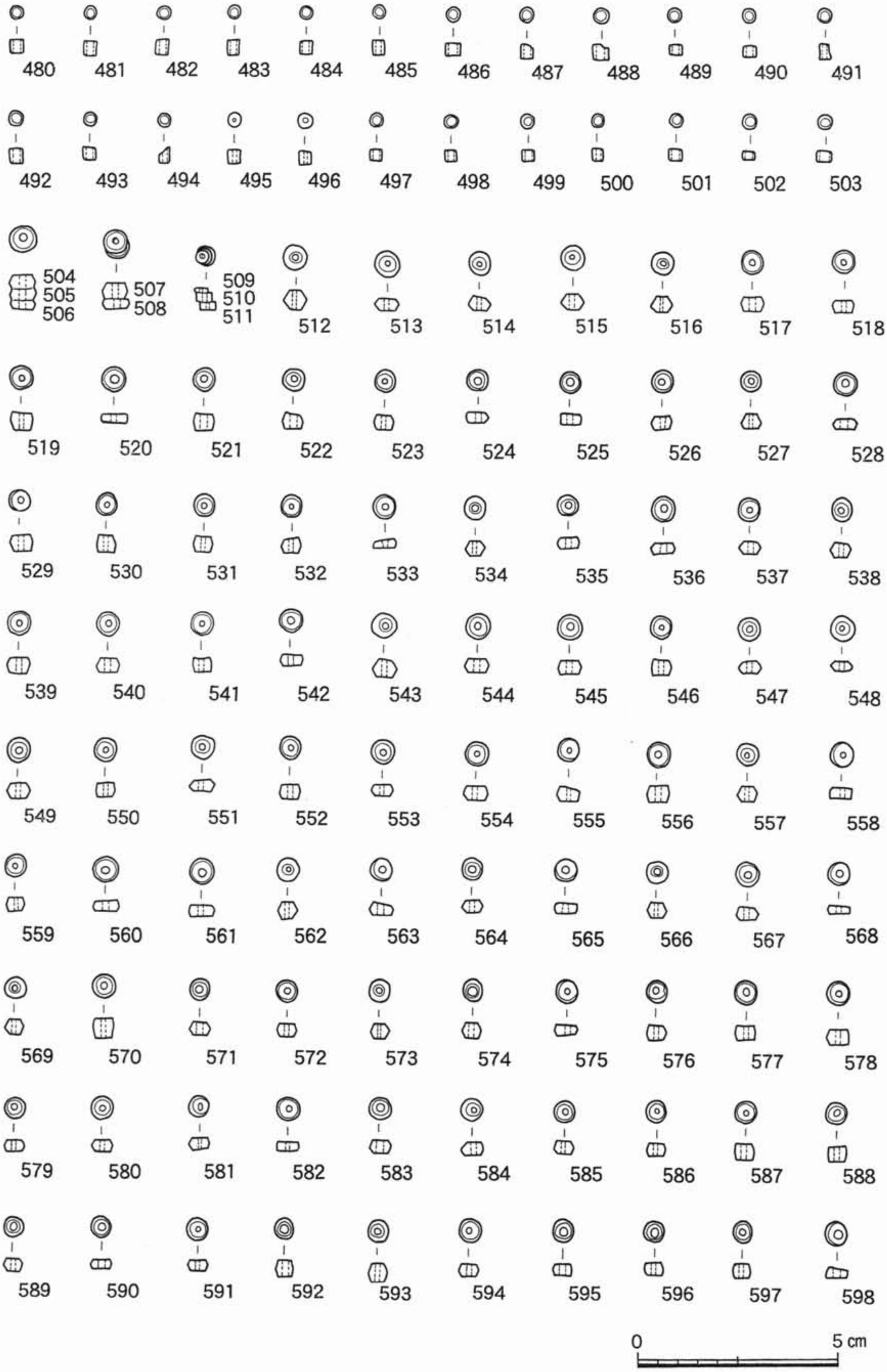
第75図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(4)



第76図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(5)



第77図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(6)



第78図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類実測図(7)

象とした。また、紙面の都合で省いた算盤玉・臼玉の数値も、ここでは含めている。

勾玉は、総数134点のうち約８割が北群から出土した。大型の勾玉は、大多数が北群から出土した。北群の小型勾玉は、長さ10～18㎜、厚さ３～４㎜のものが多数を占め、法量の統一が計られている。色調は、北群の大多数がオリーブ灰色で統一されるが、南群は暗灰色・緑灰色の濃色系の色調でばらつく。

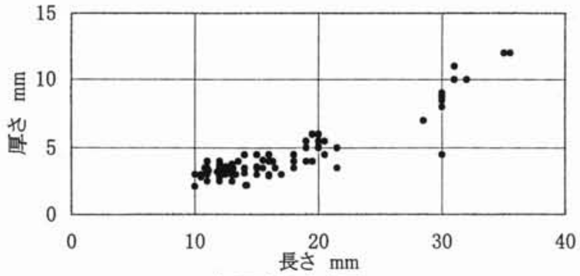
管玉は、総数48点のうち約８割が北群から出土した。少数ではあるが大型の管玉は、すべて南群から出土している。

棗玉は、総数127点のうち約７割が北群から出土した。北群の棗玉は、長さ10㎜、最大幅５～６㎜前後の個体が選ばれた傾向が強い。南群には、大小２種の棗玉が認められる。大型品は長さ14～18.5㎜、最大幅５～７㎜で、にぶい黒褐色の色調をもつ。この大型の棗玉は、北群には１点も含まれていない。

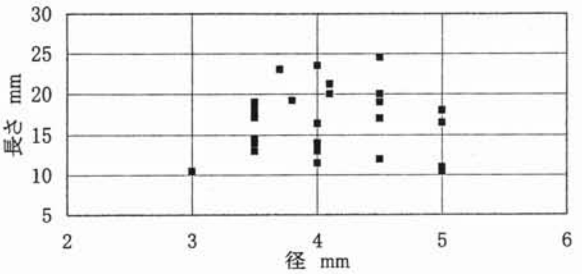
算盤玉は、南北でほぼ同数が出土した。北群では径４～５㎜、厚さ２～３㎜の算盤玉が総数150点のうち約８割を占め、法量の統一が計られている。南群では、この範囲外にある大型の算盤玉が多く存在する。色調は、勾玉と同様に北群はオリーブ灰色の算盤玉が多数を占める。南群は、暗青灰色の算盤玉が多い傾向にある。

臼玉は、総数327点のうち約９割が南群から出土した。北群は、径６㎜の大型品が多数を占める。南群は、径５㎜の臼玉を中心に、径４～６㎜の範囲に広く分布している。色調は、北群はオリーブ色系の臼玉が多い傾向にある。南群では暗青灰色の臼玉が半数を占める。

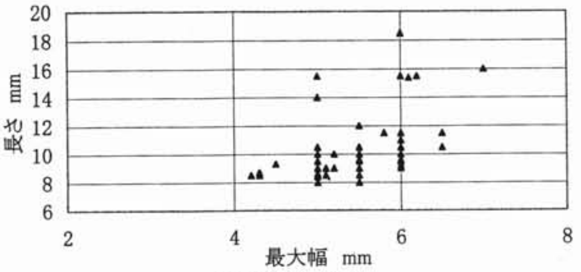
以上、Ｂ２号墳埋葬施設ＳＸ12東主室出土の玉類についてみてきた。その結果、枕石を挟んだ北群と南群の間で、それぞれ異なる玉類の出土傾向が確認できた。玉類の傾向は、



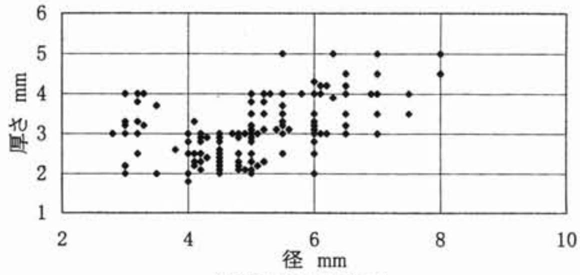
勾玉法量分布図



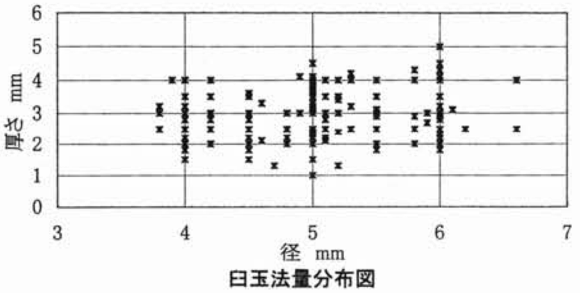
管玉法量分布図



棗玉法量分布図

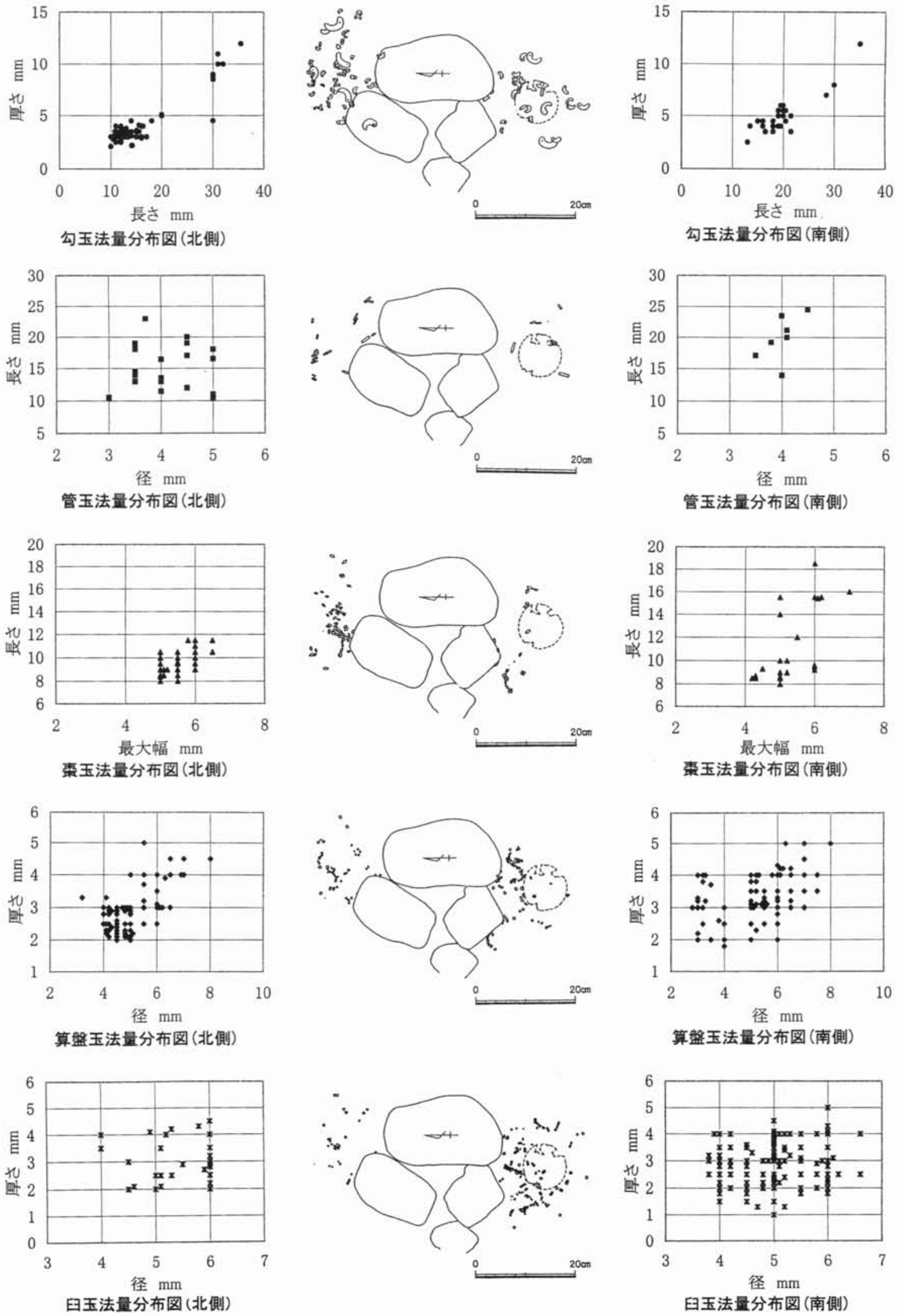


算盤玉法量分布図



臼玉法量分布図

第79図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類法量分布図



第80図　埋葬施設ＳＸ12東主室出土玉類種別法量分布図

以下のとおりである。

① 玉類の中でも、主要な位置を占める勾玉と管玉は、約８割が北群から出土している。

② 勾玉の中でも、特別な位置を占めたとみられる丁字頭勾玉は、北群に含まれる。

③ 北群出土の勾玉・棗玉・算盤玉は、法量の統一性が顕著に現れる。

④ 色調は、北群はオリーブ灰色を中心に、明緑色系の玉類で構成される傾向が強い。

⑤ ４とは対称的に南群は、暗青灰色を中心に、濃色系の玉類で構成される傾向が強い。

また、それぞれの玉類を長さや厚さの総延長でみた場合、北群と南群間で興味深い結果が得られた。玉類を種類別に糸を通した状態で連ねれば、北群の勾玉は全長36.21cmを測った。同様に、管玉が42.57cm、棗玉が81.09cm、算盤玉が41.82cm、臼玉が10.83cmを測った。南群では、勾玉が15.5cm、管玉が13.95cm、棗玉が36.48cm、算盤玉が49.5cm、臼玉が77.33cmを測る。北群と南群で一連の玉として合計した場合、北群が212.52cm、南群が192.76cmで、概ね同じような数値が得られた。南群から大量に出土した臼玉は、北群と南群の玉の長さを調整した玉とみることもできよう。

（永野宏樹）

４．まとめ

内田山遺跡・内田山古墳群第６次調査では、丘陵尾根上から多数の遺構・遺物を検出した。内田山遺跡としては、弥生時代後期中頃の竪穴式住居跡８基と溝、時期不明の掘立柱建物跡１棟を検出した。出土遺物では、弥生時代の土器と石器が遺物の大半を占めている。僅かながら奈良～平安時代の土師器・須恵器も出土したことから、ＳＢ13はこの時期に属する可能性もある。

弥生時代の内田山遺跡は高地性集落である。遺跡の立地する木津町東部の丘陵には、燈籠寺遺跡・白口遺跡・赤ヶ平遺跡・木津城山遺跡など、弥生時代後期の高地性集落が多く存在する[注4]。出土土器の検討から、これらの高地性集落は、赤ヶ平遺跡・木津城山遺跡(後期前葉)から燈籠寺遺跡(後期中葉)へと移る変遷が考えられる。内田山遺跡は、今回出土した弥生土器から燈籠寺遺跡とおおむね同時期に位置づけられる。当地の高地性集落は、木津城山遺跡以降、小規模単位で周辺丘陵に分散する状況にある。

内田山古墳群としては、新たにＢ２号墳～Ｂ４号墳を検出することができた。尾根上にはさらに数基の古墳が存在する可能性が高い。唯一、面的調査を行ったＢ２号墳では、墳丘中央から特色のある埋葬施設ＳＸ12を検出した。その特色とは以下のとおりである。

①埋葬施設は木棺直葬で、墓壙が２段墓壙である。

②棺は箱形木棺で、全長は約５ｍと長大な長さをもつ。

③木棺内は数区画に分割し、埋葬主室に礫床や石枕を伴う。

④１棺で複数埋葬を行う。

このような埋葬施設は、北部九州から丹後地域にかけて、日本海側の古墳に類例が多い。特に北部九州では博多湾周辺部、出雲半島から伯耆西部、但馬では和田山盆地に集中する傾向が認め

られる。また、古墳時代中期でも前半に属する小規模古墳に共通する。北部九州では萱葉1号墳に代表される福岡県の博多湾周辺地域に、出雲では奥才古墳群にみられる出雲半島に、但馬では茶すり山古墳に代表される和田山盆地周辺に、丹後では京丹後市に集中する。(注5)

（竹原一彦）

(2) 上人ヶ平（しょうにんがひら）5号墳

1．はじめに

上人ヶ平5号墳は、昭和13年に京都府によって造り出し部に相当する地点で発掘調査が行われ、葺石の存在を確認するとともに、円筒埴輪が「塚の裾に寄った部分から丁字形の位置に」配されていることが明らかとなり、「所謂、帆立貝式」の古墳の一例として注目された。「木津町市坂の一古墳」(注6)として報告されたこの調査では、埴輪列を確認した後に埋め戻し作業が行われて、その後、大きな改変もなく、長きにわたって保存されてきた。

しかし、昭和59年以降、住宅・都市整備公団(当時)による関西文化学術研究都市開発事業に伴う事前調査が、当調査研究センターで実施され、市坂地区においても上人ヶ平5号墳を中心に試掘および発掘調査が行われた。(注7)

この事前調査では、上人ヶ平5号墳関連としては、昭和61年度に墳丘の北西部分にトレンチを設定し、周溝部分の調査を実施し、周溝は2段に掘り込まれ周溝幅約5.0m、深さ約0.6mであることが明らかとなった。また、この調査では「市坂の一古墳」の立地する台地上には多くの古墳が存在することが明らかとなり、木津町教育委員会と調整の上、本古墳を上人ヶ平5号墳と命名して調査を進めた。

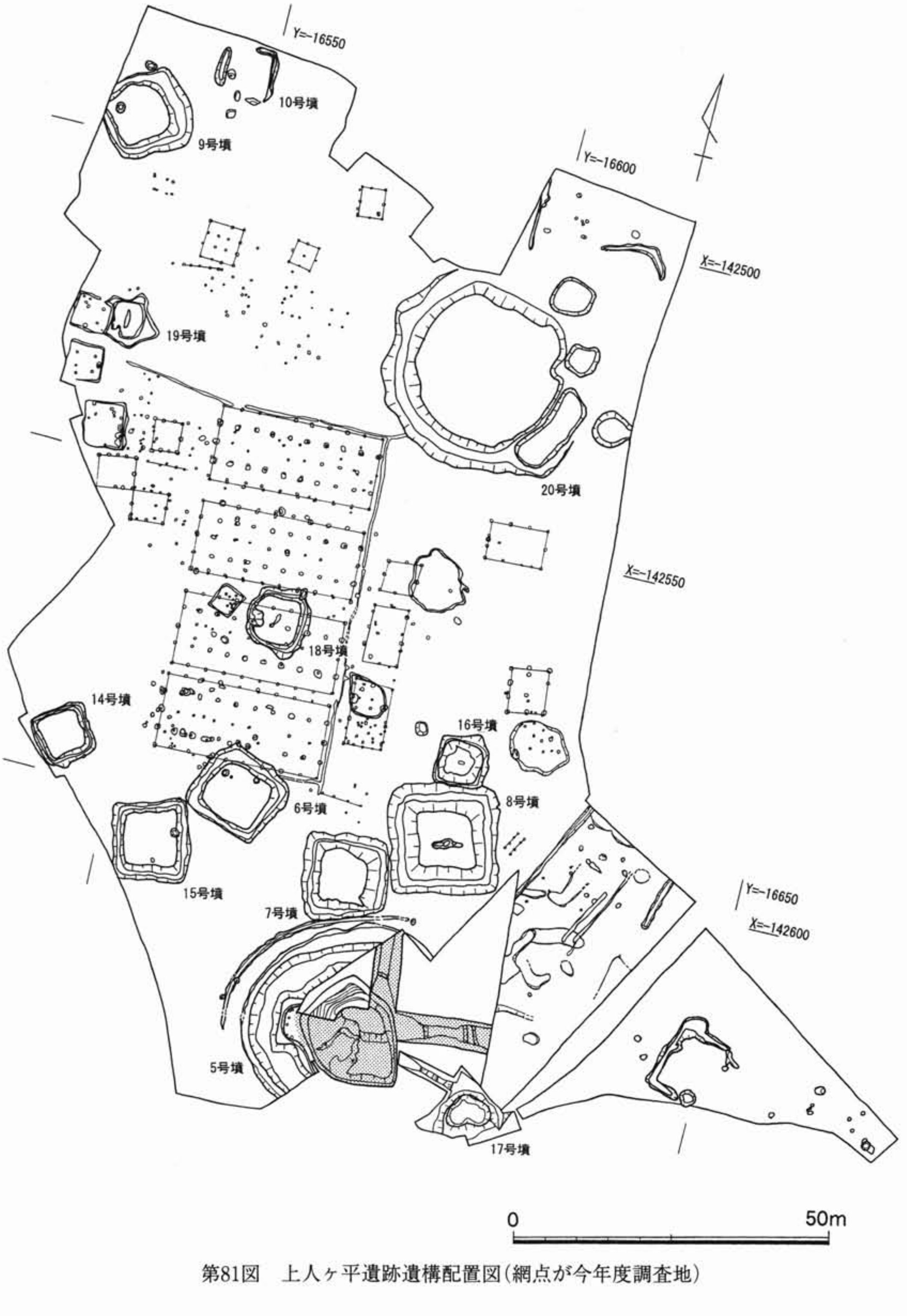
昭和62年度は前年度の調査トレンチを拡張して調査を進めた結果、周溝外堤部の外側を幅0.4m、深さ0.2mの溝で区画されていることが明らかとなった。また、昭和63年度・平成元年度には台地上全体を対象として全面的な調査を行い、上人ヶ平5号墳では墳丘の南東側と南西側で、周溝と墳丘の埴輪列の一部を確認した。

上人ヶ平5号墳を含めて上人ヶ平遺跡の調査は平成元年度でおおよその調査を終了し、古墳群は5号墳を含めた16基の古墳群からなること、奈良時代に平城宮へ瓦を供給した大規模な瓦工房であることが明らかとなり、その重要性から遺跡の保存が決定された。

今回の上人ケ平5号墳の調査は、その上人ヶ平5号墳を含めた上人ヶ平遺跡の保存決定を受けて、公園整備計画が策定されたことに伴い、現状保存されていた5号墳の埋葬施設の有無・古墳の墳丘と規模の確認を行うため、独立行政法人都市再生機構の依頼を受け、「相楽都市計画事業木津南特定土地改良区画整理事業」の一環として当調査研究センターが実施したものである。

2．調査の経過

調査は、平成17年9月27日に着手し、墳頂部の攪乱部分を中心に調査を行うとともに、墳丘斜面の一部確認と、北側と東側の周溝部分にトレンチを設定して周溝幅の確認調査を行った。今回の調査で出土した埴輪は、埴輪列として原位置を保つものは現状のまま埋め戻し、周溝内に転落したものや墳丘斜面に散乱したもののみを取り上げた。調査成果の明らかになった平成18年1月



第81図　上人ヶ平遺跡遺構配置図（網点が今年度調査地）

14日は現地説明会を開催し、約67名の参加があった。調査終了後は排土および土止めのための土のうによる埋め戻し作業を実施し、平成18年1月30日にすべての現地調査を終了した。

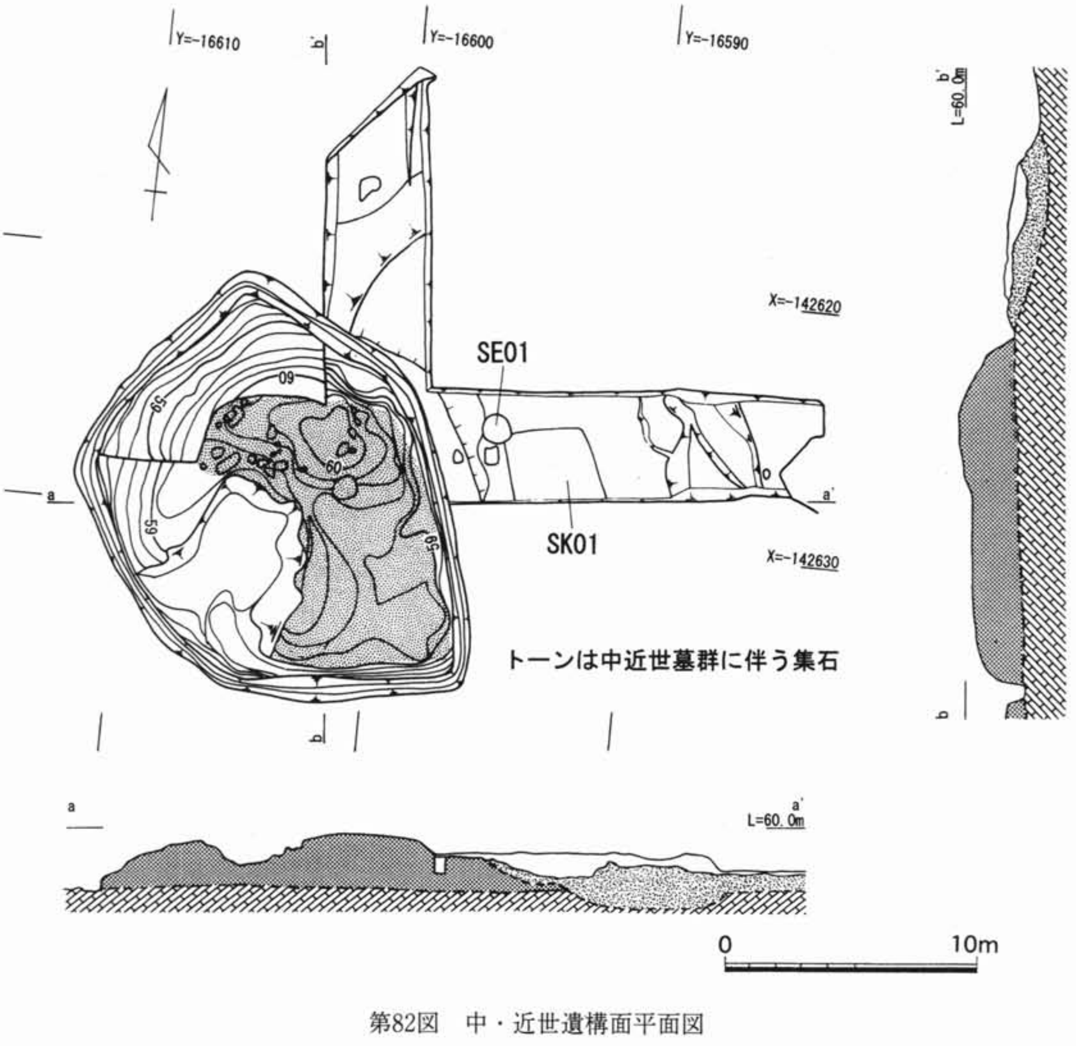
（石井清司）

3．検出遺構

（1）上人ヶ平遺跡

上人ヶ平5号墳の墳丘上では多数の中・近世の遺構を検出した。検出した遺構としては墳頂部平坦面上の中・近世墓群とそれに伴う集石群、東トレンチの大型土坑と野井戸がある（第82図）。

中・近世墓群　墳頂部の表土を掘削すると、ほぼ全面に拳大の川原石による集石が見られ、埴輪片がその間に混在していた。墳頂部が攪乱されていることは明らかであったが、集石が面をなしていること、また集石が凝集して分布する部分が点在すること、一部中世末期と思われる土器片が混じること、などから下部に埋葬施設をもち、上部を集石で覆う中世墓である可能性を考慮して、一部主体部の残存を確かめる目的を兼ねて断ち割り調査を行った。その結果、墳丘は約40cmも掘り窪められて一旦平坦に造成され、集石が凝集する部分の下部のみならず、無数の土坑

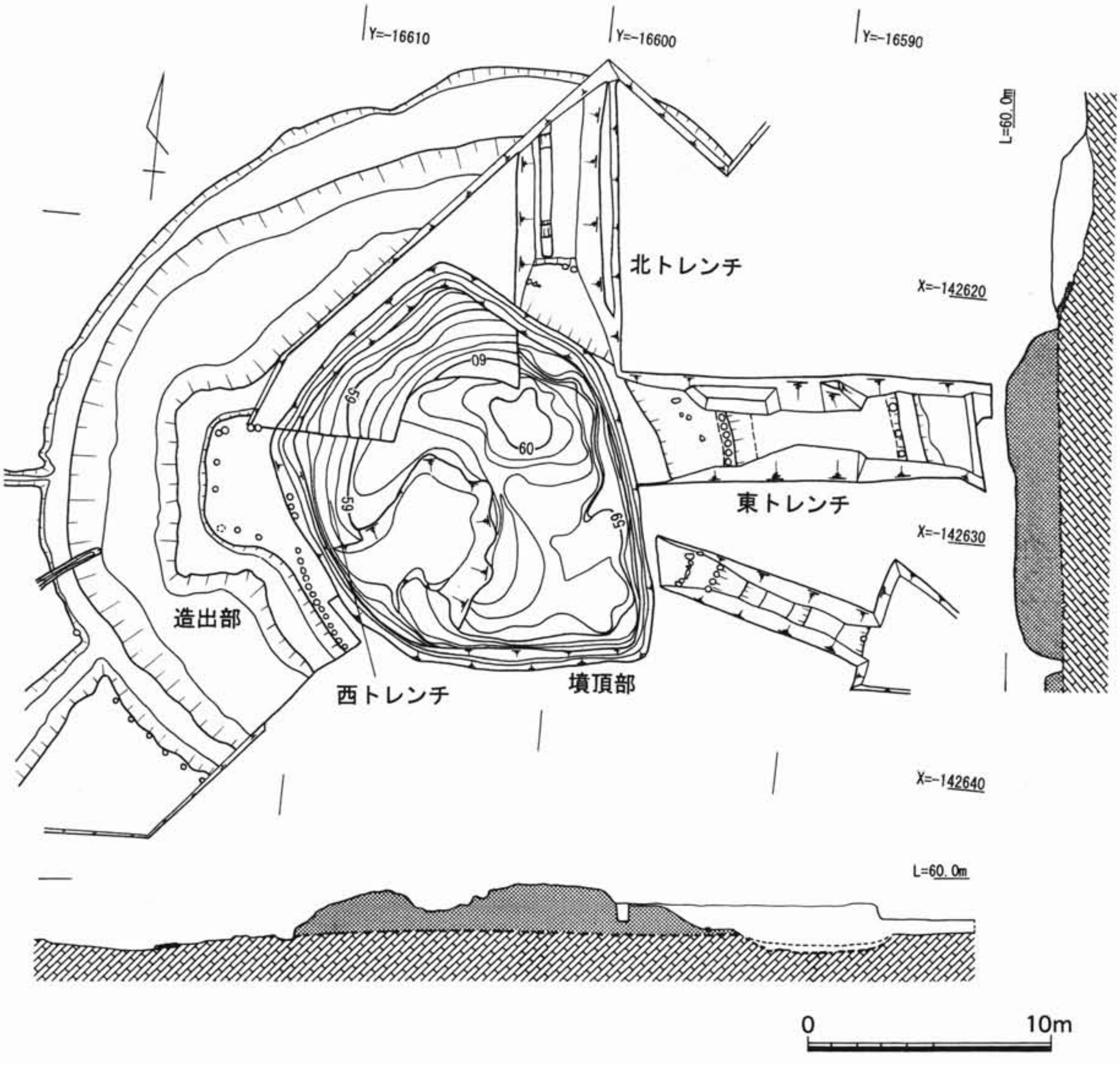


第82図　中・近世遺構面平面図

が穿たれており、それぞれが著しく切り合っている状況が確認された。また、墳頂部の攪乱坑壁面では土坑内部に埴輪片が何らかの陥没に伴って落ち込んだ様子が確認され、その土坑の下部に木棺の存在が予想された。以上の調査結果から、当初の予想通り、これらは中・近世墓群であることがほぼ明らかとなった。

不明土坑ＳＫ01　東トレンチ墳丘寄りで検出した大型の土坑である。トレンチ内での形状はほぼ方形に近いが、南側に位置する過去の調査トレンチに向かって続くと考えられ、墳丘に沿ってやや湾曲する長方形状の土坑であると予想される。この土坑の埋土は40層以上にわたって極細砂層とシルト層の互層が続き、各層の上面に酸化鉄の沈着が見られるため、一定時間滞水して堆積したものであると推測される。出土遺物が無く、遺構の時期は特定できない。

野井戸ＳＥ01　東トレンチ墳丘寄りで検出した円形の井戸状の遺構である。埋土が比較的新しく、最下層に腐食土層があるため、野井戸と判断した。なお、この野井戸によって、下層の古墳の葺石は一部攪乱を被っている。



第83図　上人ヶ平５号墳調査トレンチ配置図

(2) 上人ヶ平5号墳

上人ヶ平5号墳は、北トレンチ、東トレンチ、墳頂部トレンチおよび、西トレンチと造り出し部の調査を行った(第83図)。なお、この調査は史跡公園化に向けての資料を得るための調査であるため、原則として原位置を保つと判断される遺物については取り上げていない。後述する出土遺物の節において、円筒埴輪の基部が極端に少ないのはこのためである。また、西トレンチは墳丘の残存状況が良好であると推測されるため、本来の墳丘斜面の検出を取りやめ、埴輪・葺石の散乱状況の検出、散乱した埴輪の回収に止めた。以下、それぞれの調査区の状況について概略を述べる。

1) 北トレンチ(第84・85図)

上人ヶ平5号墳の墳丘のうち、改変が著しい北から東にかけての、墳丘の残存状況を確認する目的で設定したトレンチである。また、墳丘1段目テラスと周溝底面、周溝外周との関係を把握するため、周溝底までの断ち割りを実施した。

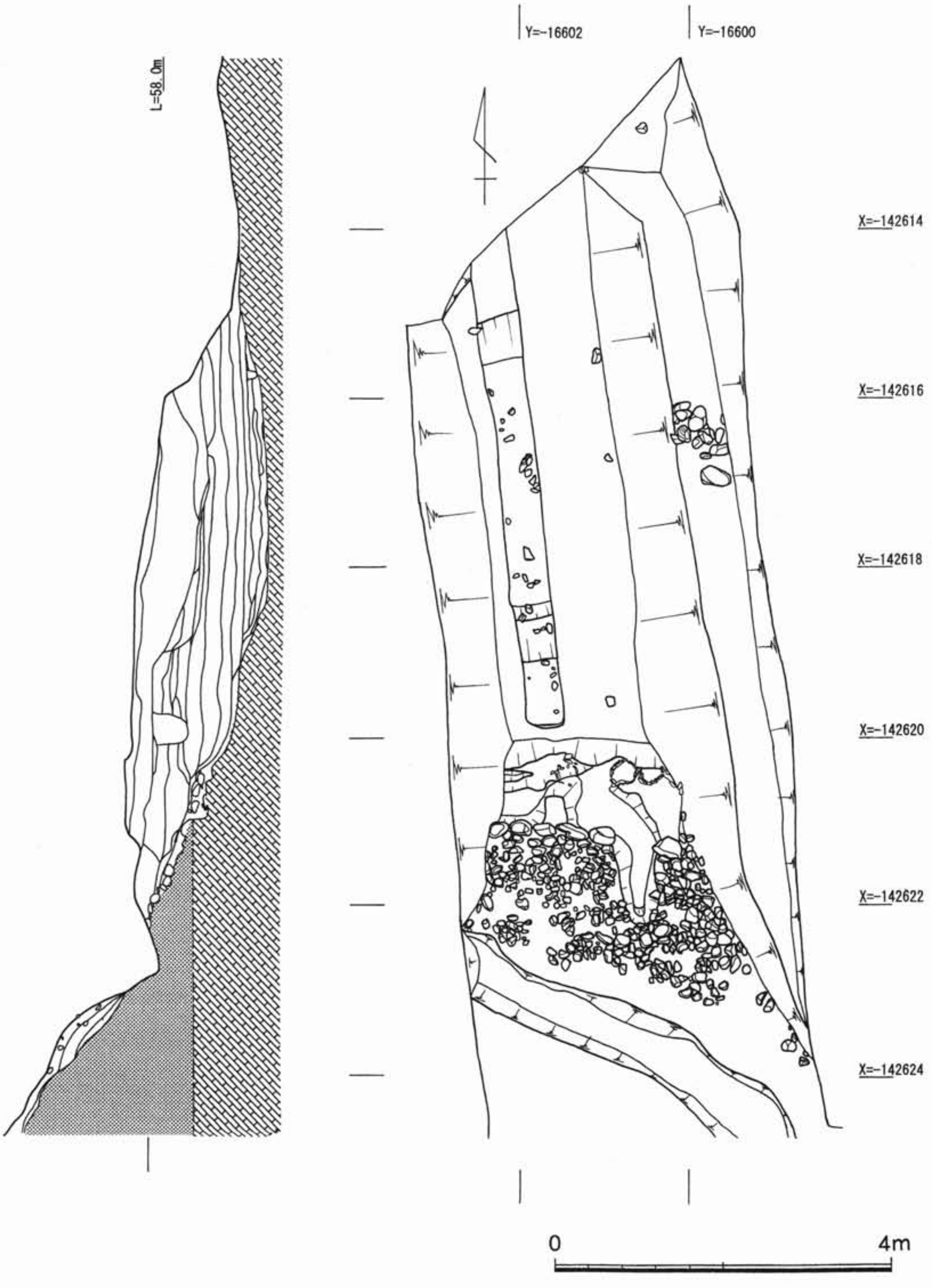
墳丘斜面　墳丘の北斜面は大きく抉れており、現地表に穿たれた地境溝は墳丘をかなり削平した上で墳丘中心部寄りを通っていると予想していた。しかし、表土を掘削して墳丘斜面を検出した結果、地表に露出している墳丘部と地下に埋没していた墳丘斜面とは、一連のものとなり、墳頂部近くの墳丘は埋没していた墳丘斜面よりも斜度が大きくなっていることが判明した。地上に露出していた墳丘部には原位置を保つ葺石は存在せず、墳丘盛土の自然流出や、前述の中・近世墓の造営による削平を考えると、現状以上に斜面の斜度は大きかったことが予想される。ちなみに埋没していた墳丘の斜面の斜度は約20°、地上に露出していた墳丘の斜度は25°前後を測る。墳丘第1段目の斜面は後世の削平によってかなり失われており、断ち割りの底で高さにして約30cm残っていたに過ぎない。断ち割りからは原位置を留めたものはおろか、墳丘第1段目の斜面から転落したと思われる葺石すら検出されず、墳丘第1段目の斜面には葺石が施されていなかったことが判明した。

葺石　葺石は墳丘2段目の斜面に葺かれていたが、後世に掘られた横穴によって大きく破壊を受けていた。したがって残存状況は必ずしも良好とはいえなかったが、斜面の下端部には比較的まとまって原位置を保つものが残存していた。葺石はまず墳丘2段目の下端部に長軸が25～30cm大の基底石を並べ、この上に拳大から小児人頭大までの川原石を、墳丘側が低くなるように葺き上げている。調査した範囲の中では墳丘斜面を縦に区画する区画列は認められなかった。

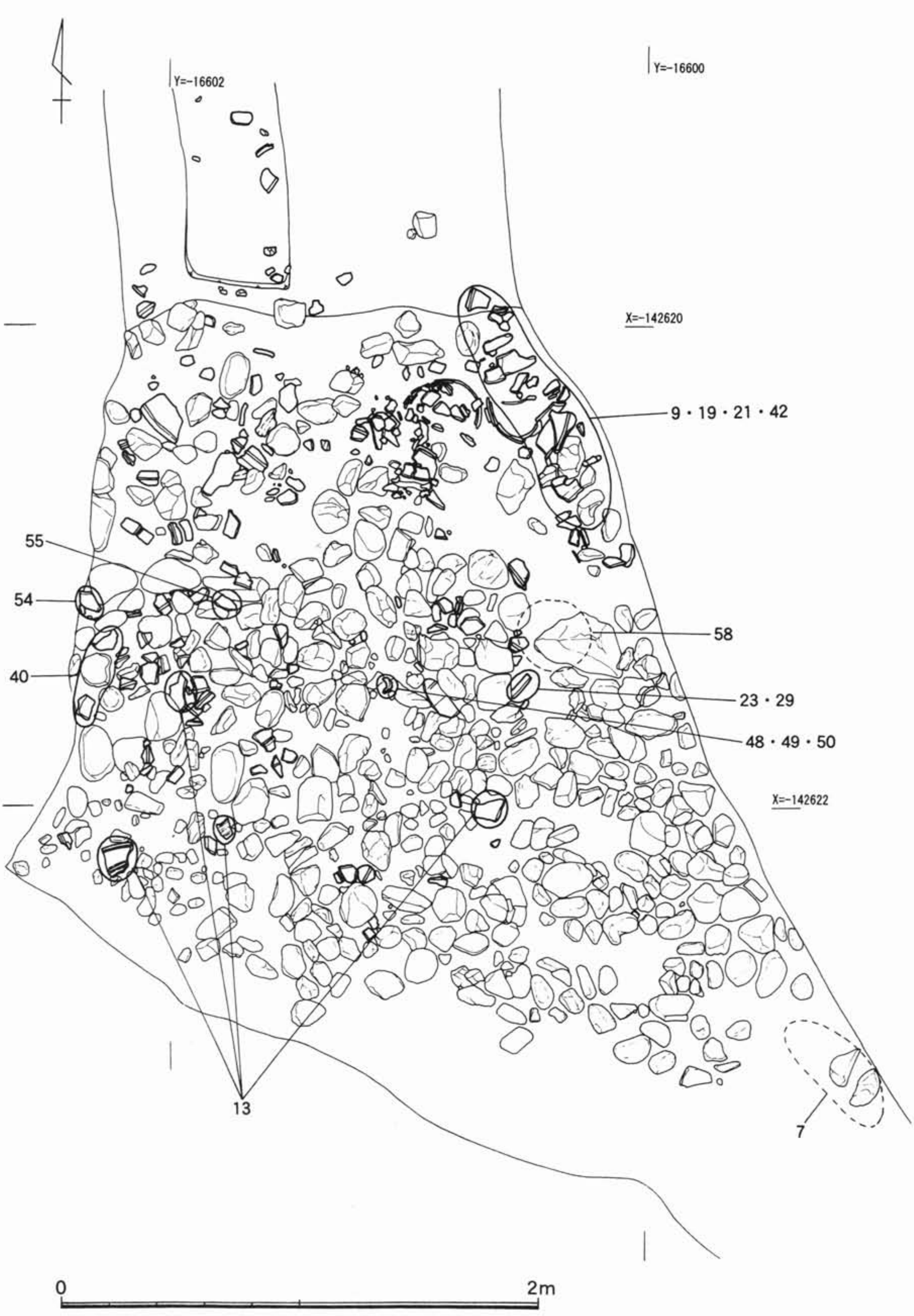
埴輪列　埴輪列は墳丘第1段目テラス上に葺石の基底列から約60cm外側で検出した。ただし、先述した横穴と、墳丘第1段目の削平によって埴輪はその多くを失っており、原位置を保つ基底部を確認できたのはわずかに4個体に過ぎない。これらの埴輪は据え付け溝を布掘りした上に基底部のみならず、2段目まで埋めて固定されていた。第92図21、第94図42は埴輪列東端から出土した個体である。42は朝顔形埴輪であるため、ここには朝顔形埴輪が樹立されていたことが判明した。転落石上で検出した埴輪片の中には長方形透かしをもつ円筒埴輪が含まれていた(第91図7・第92図13)これらは出土位置から、葺石が転落した時もしくは転落後にこの出土位置まで転

落してきたと考えられるため、墳頂部から転落した可能性が高い。また、後世の横穴には蓋形埴輪(第96図48～50)がまとめて投棄されていた。なお、北トレンチ周辺の円筒埴輪は硬質なものと軟質なものとが混在しており、明確な使い分けはなかったと推定される。

北トレンチ内および過去の調査における北トレンチの延長上では周溝外周の円筒埴輪列は見つかっていない。しかし、トレンチ北端部や断ち割りにおいて、周溝外周の円筒埴輪列のものと思われる埴輪片が出土した。中でも断ち割り中央部で出土した埴輪片には帆船と想われる船の線刻



第84図　北トレンチ平面図および土層断面図(転落葺石除去後)



第85図　北トレンチ葺石・埴輪検出状況図(転落葺石除去前)

があるものがある(第91図4)。これは淀川・木津川水運との関連が指摘されているものであり、当古墳の被葬者像の推定に興味深い資料を提供することとなった。(注8)

墳丘第1段目の削平　前述したように、墳丘第1段目は埋没する以前に削平を受けている。第84図を見れば明らかなように、墳丘第1段目テラスは埴輪列の前面から削り込まれ、削り込んだ底面から水平に面が形成されている。この水平面は過去の調査で明らかとなっている周溝内のテラスと同一の高さを保っている。(注9)このことは周溝外縁部のテラスが、古墳築造時の遺構ではないことを示している可能性がある。詳しくは後述する他の調査地点の状況を踏まえて述べる。

墳丘の埋没　トレンチの断面観察により、先述の削平部分は白色の粘土によって埋没している。これは過去の調査時に指摘された上人ヶ平遺跡や市坂瓦窯で行われた粘土の水簸作業などによって沈殿した粘土である可能性もある。(注10)しかしその上層に堆積したものはほとんどが粗砂・細砂の薄い互層であり、一見して洪水堆積と分かるものである。また、部分的にこの洪水層を切って走る流路もあり、複数回の洪水によって堆積したものであることが分かった。

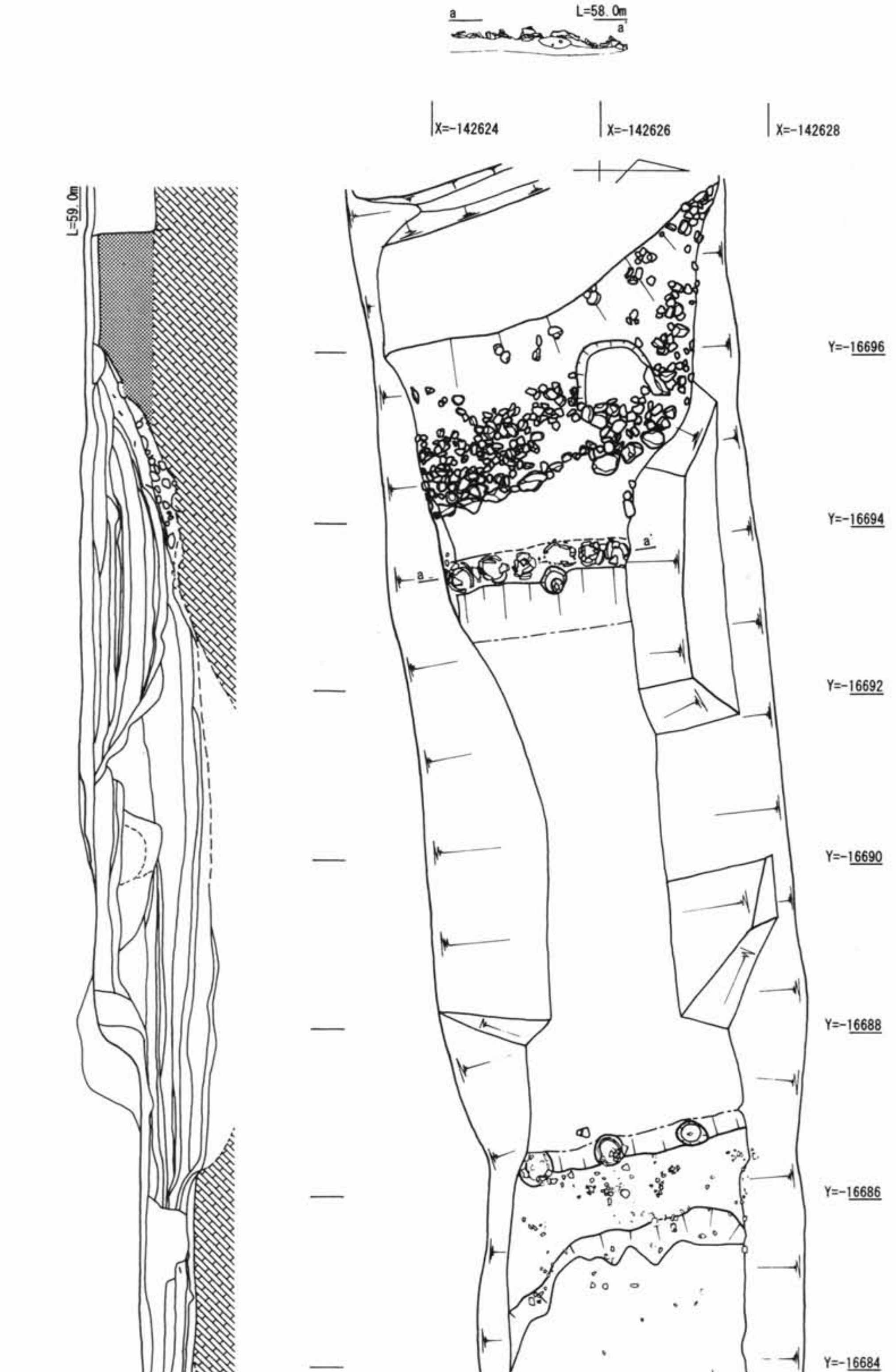
2) **東トレンチ**(第86・87図)

東トレンチも北トレンチと同様、改変の著しい東半部の残存状況を把握するために設定した。

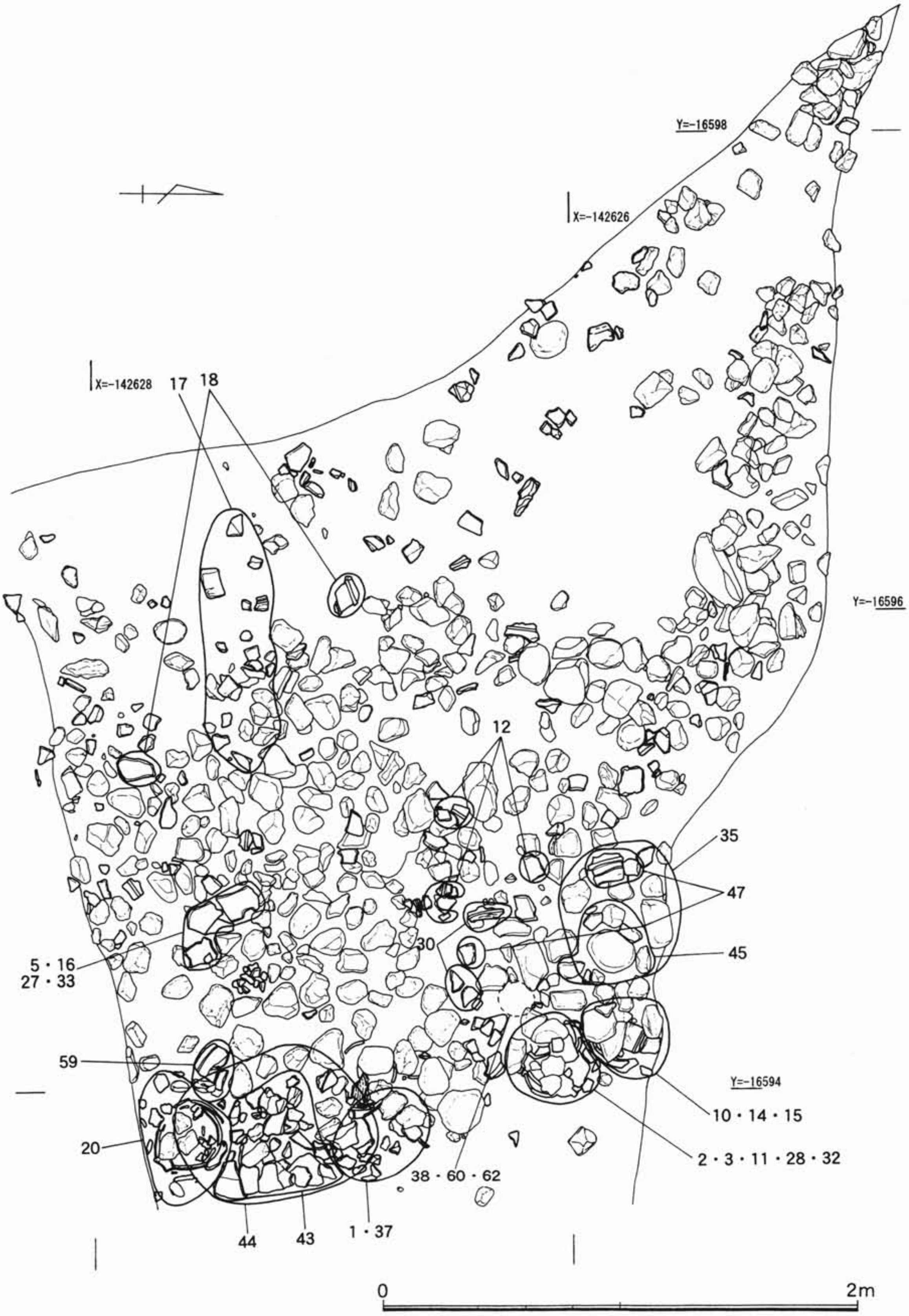
墳丘斜面　東トレンチでは地境溝から1m以上も離れた地点から東側に残存する墳丘第2段目斜面上端を検出した。ここではトレンチ内において、墳丘第2段目斜面の途中から斜度が大きくなる状況が確認された。地上に露出していた墳丘部の斜面は地境溝による削平が著しく、何ら知見を得ることはできなかった。

葺石　東トレンチでは葺石の絶対量が北トレンチと比較するとやや少ないように思える。第86図の転落石を外した状況においても、第87図の転落石の出土状況図を見比べても、北トレンチの2～3割は少ないように思える。基底列は北トレンチを同様、長軸25～35cmの川原石を墳丘第2段目の下端部にめぐらしているが、1石分抜けている箇所があり、その周辺も、原位置を保つ葺石が存在しなかった。

埴輪列　埴輪列は墳丘第1段目テラス上および周溝外周平坦面上で検出した。墳丘第1段目テラス上で検出した埴輪列は原位置を保つものが6個体あり、やはり2段目まで埋め込んでいた。それぞれの円筒埴輪は直径が約30cm前後のもので、隙間無く並べられていた。葺石の基底列からは南端の個体が約60cm、北端の個体が約80cm離れていた。このことは円筒埴輪列は葺石の描く円弧とは必ずしも完全な同心円とはならないこと示している。この6個体の円筒埴輪は須恵質のものもあれば、今にも土に帰りそうなほど軟質なものまで含まれており、やはり、焼成の違いによる使い分けは見られない。第92図14・15は埴輪列北から1本目の個体、第91図2・3は北から2本目の埴輪、第91図1は北から4個体目の埴輪、第94図43・44は北から5個体目の埴輪、第92図20は最も南の個体である。43・44は朝顔形埴輪であるため、ここには朝顔形埴輪が樹立されていたことがわかる。また14・15の北に接して45・47の朝顔形埴輪が出土している。14・15は普通円筒形埴輪であることが確実であるため、この北に隣接して樹立していた埴輪が朝顔形埴輪であったのであろう。そうすると朝顔形埴輪は5本に1本の割合で樹立されていたことが推定される。



第86図　東トレンチ平面図および土層断面図(転落葺石除去後)



第87図　東トレンチ葺石・埴輪検出状況図(転落葺石除去前)

周溝外周平坦面上の埴輪列は平坦面の最も墳丘側に埴輪の中心間で約１ｍ、器壁間で約60cmの間隔を空けながら、それぞれに樹立用の円形の土坑を穿ち、２段目まで埋め込んでいる。１基の円坑には円筒埴輪の基部は残存していなかったが、埋土から埴輪片が出土したため、当初樹立していた埴輪が引き抜かれたものと判断される。

墳丘第１段目の削平　北トレンチと同様に墳丘第１段目のテラスでは埴輪列の前面まで削平が及んでいたと考えられる。また、周溝外周は一部埴輪列にまで削平の上端が及んでいる。

墳丘の埋没　東トレンチでも削平の及んだ第１段目テラスの上面まで白色の粘土が堆積し、その上層は洪水砂層で覆われていた。瓦窯に伴う工房として機能し終えた以降は度重なる洪水によって墳丘東半が埋没したことが再確認された。中・近世墓群はその後、形成されたことが判明した。地境溝、野井戸などは埋土の新しさから推測してそれ以降、かなり新しい時期に耕地化される際に掘られたものだろう。

3）西トレンチ（第88図）

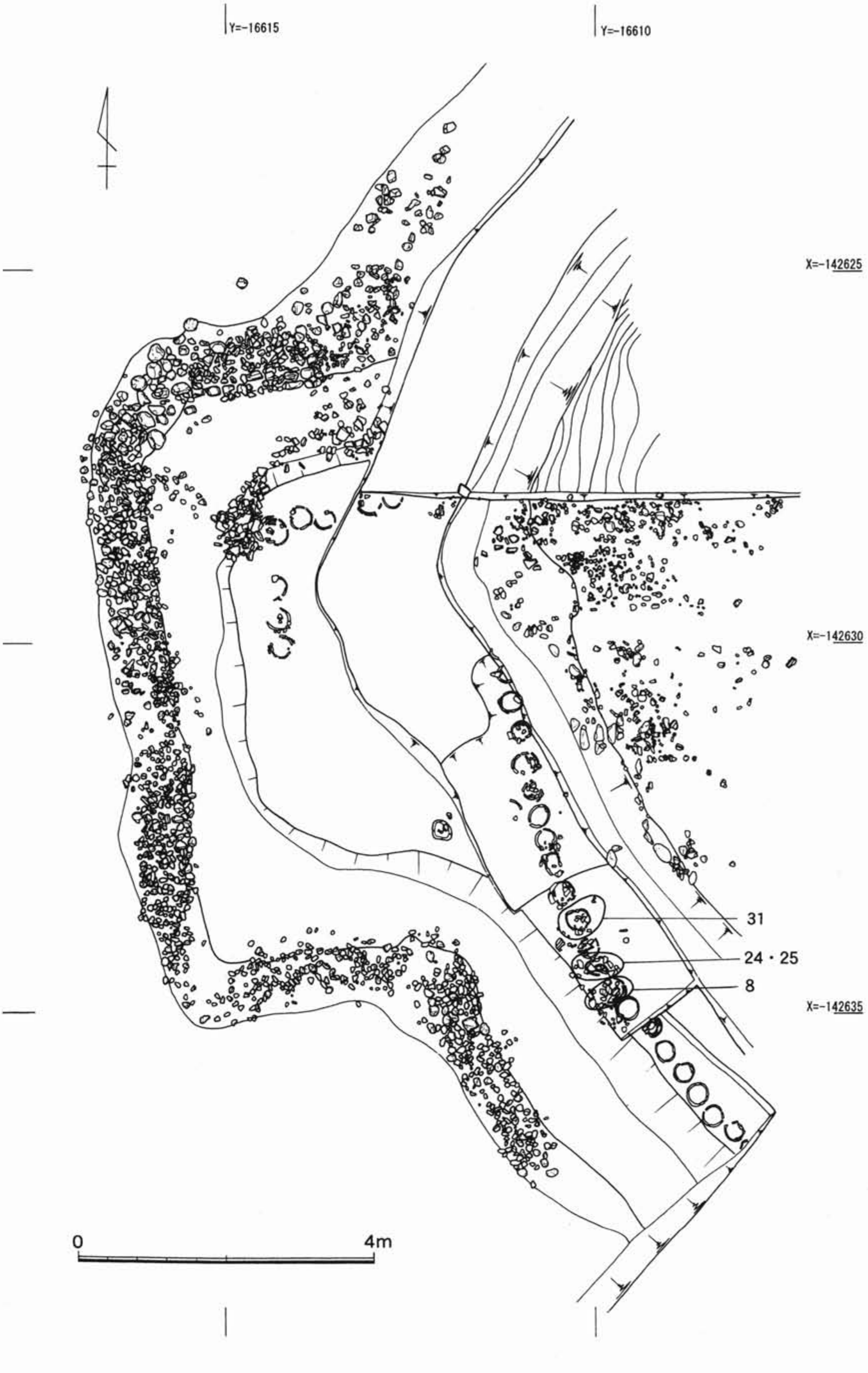
西トレンチも墳丘の残存状況を把握するために設定したトレンチであるが、調査中に埴輪の散乱状況が著しいことと、その下部に後世の盛り土が厚く堆積していることが判明し、墳丘が良好な状況で残存していることが推測された。そこであえて墳丘斜面の検出は行わず、埴輪の散乱状況の図化に止め、墳丘の保全を図った。西トレンチでは地境溝などの掘削に伴う排土が葺石の上に盛り上げられており、この上に埴輪片が無数に散乱していた。また、これに混じって原位置を動かされた葺石も認められた。さらに明治以降の陶磁器片も少量認められたため、この埴輪片は梅原末治氏の調査時以前の盗掘と関連があると思われる[(注11)]。また、地境溝に削られた墳丘斜面下部の崖面では葺石の基底列が露出していた。したがって、造り出し部に面した部分では地境溝は墳丘第１段目テラスと墳丘第２段目との屈曲点をねらって掘削されたものであることが判明した。

4）造り出し部（第88図）

造り出し部はすでに調査されていたが、梅原氏の調査した墳丘部分の埴輪列と当調査研究センターが調査した造り出し部の埴輪列との連接の状況は不明確であった。今回の調査では、残る未調査部分の残存状況とともに、この埴輪列の関係を明らかにするための調査を行った。その結果、南から円弧を描きながら並んできた埴輪列が、第88図31あたりから直線的に葺石の基底列に近づく様子が観察され、地境溝によって断ち切られるまで続くことが判明した。この状況は、梅原氏の報告にある平面図（第89図）とほぼ完全に整合した。余談であるが、このことが判明したのは、梅原氏が調査したときに、みだりに埴輪を抜き取らず、原位置に止めておいてあったことによる。後世に残る古墳を調査する際の氏の姿勢が伺える。さらに、過去の当調査研究センターの調査時に造り出し部上の埴輪列の抜き取り痕として報告した円形の土坑の底に、今回の調査において、円筒埴輪の底部片が原位置を保って残されていることが判明した[(注12)]。これらの結果、造り出し部の埴輪列は東西3.0ｍ、南北4.4ｍのほぼ長方形を呈することが判明した。

5）墳頂部

墳頂部は、既述したように後世の中・近世墓や盗掘、大きく掘られた攪乱坑によって荒らされ

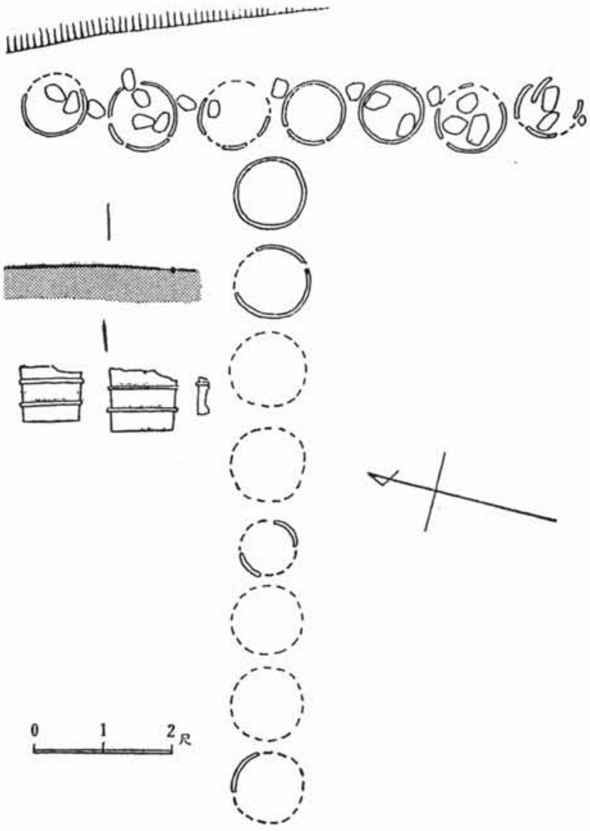


第88図　西トレンチ・造り出し部葺石・埴輪検出状況図(過去の調査成果と合成)

ており、古墳本来の墳頂部平坦面は全く残っていなかった。それでも一縷の望みを託して精査した結果、主体部状の落込みを検出した(第90図)。しかし、これも断ち割りの底から何も副葬品らしきものが出土せず、全体の形状も不安定であることから、古墳の埋葬施設であると断定することは難しい。

墳頂部からは中・近世墓に伴う集石群とともに、多数の埴輪片が出土した。埴輪片は集石下部の土壙埋土中にも含まれていた。また、西トレンチで出土した埴輪片が本来墳頂部にあったものとすると、墳頂部にあった埴輪片はかなりの量に上る。このことから墳頂部にも本来は埴輪列が存在した可能性が高いと考えられる。

(福島孝行)

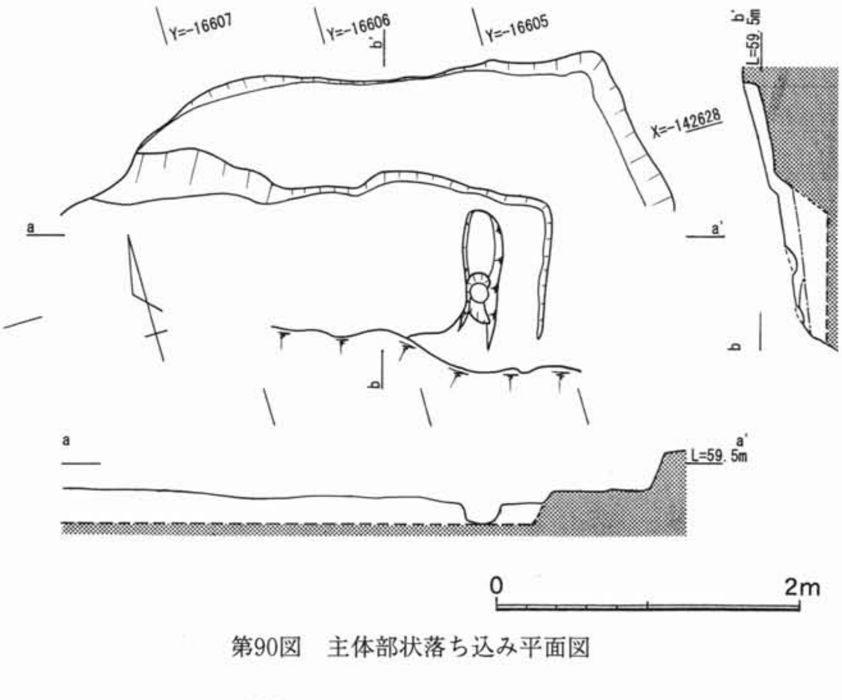


第89図　昭和13年検出埴輪列平面図(注6梅原文献より)

4．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、上人ヶ平5号墳に伴う埴輪類のほか、墳丘上に営まれた中・近世墓や攪乱などに伴う土器片がある。出土遺物の大半は、埴輪であるため、ここでは埴輪類に限って報告する。

今回の調査で出土した埴輪の数量はコンテナ数にして33箱分を数える。東トレンチ、北トレンチ造り出し部の周溝、墳頂部から出土した。出土埴輪は、円筒埴輪が大半を占めるが、朝顔形埴輪や形象埴輪(蓋形埴輪・盾形埴輪・家形埴輪など)も一定量認められ、そのうち図化できたもの62点について報告する。全体



第90図　主体部状落ち込み平面図

的に焼成が良好で硬質のものが多く、土師質と須恵質のものが見られるが、いずれも黒斑は認められないことから、本古墳の埴輪はすべて窖窯焼成の所産である。出土トレンチと遺物の対応関係は、東トレンチから１～３、５、10～12、14～18、20、22、27、28、30、32、33、35、37、38、43、44、45～47、59、60、62が、北トレンチから４、６、７、９、13、19、21、23、29、34、40、48～50、54、55、58が、造り出し部から8、24～26、31、36、39、41、42、61が、墳頂部から51～53、56、57が出土した。

(1)円筒埴輪

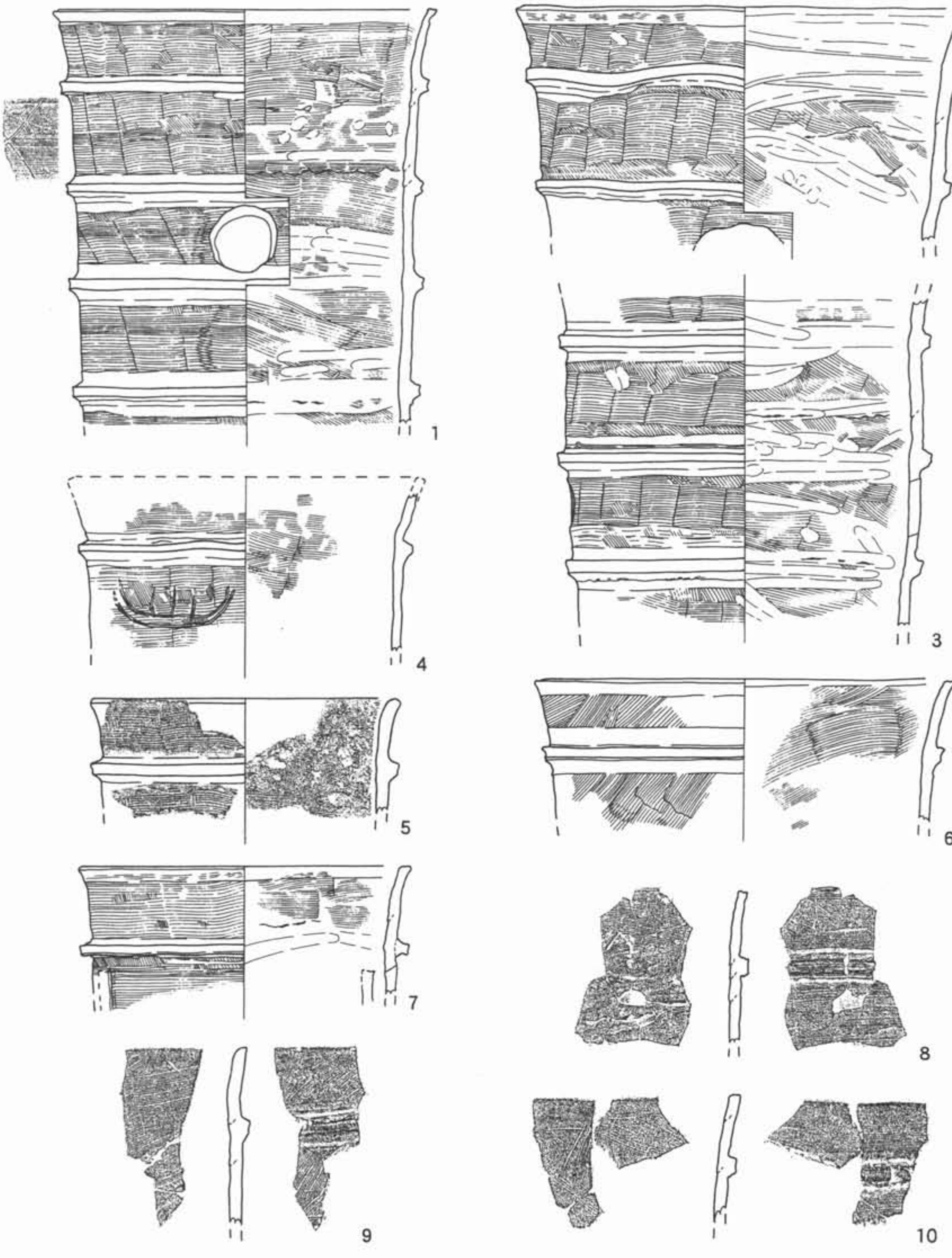
今回報告する資料は、破片資料が大半で、残存状況の良い個体でも最大で４～５段分に復原できたにすぎない。段数復原には、過去の報告をもとに５号墳出土円筒埴輪の全体形態を参考にした。それによれば、上人ヶ平５号墳の円筒埴輪は、器高60～70cm、口径30～35cm前後、底径25～30cm前後におさまる法量であり、段数構成はすべて６条７段構成となっている。透孔は円形と方形の２種類が認められ、円形透孔は、原則として３段目と５段目に直交して穿孔を行う。方形透孔は、６段目に、５段目の円形透孔と直交する方向に穿たれる。これは、上人ヶ平古墳群出土埴輪の類型設定でいうＡ類に該当する。(注13)

以下、この穿孔方式に従って遺物の段数を復原し記述を行う。その際、最下段を底部とし、その上段を２段目、その上段を３段目というように数えることとする。ちなみに、対象資料の突帯は、いずれも器壁から約１～1.5cm突出し、突帯形態が台形状もしくは「Ｍ」字状を呈するという傾向が共通して認められる。突帯については、説明が煩雑になるため割愛し、全体傾向としてのみ留めておく。

１～15までは口縁部の残存する資料である。口縁部の形態によって、普通口縁(１～10)と折り曲げ口縁(11～15)の二者に分けられる。

１は、３段目上半部から口縁部まで残存する資料で、５段目に透孔が認められる。口径35cm、口縁部高6.0cm、突帯間隔は上から順に8.7cm、8.5cm、9.1cmを測る。口縁端部は、端部外面のナデが強いために外方にやや突出した形態を呈する。外面はいずれの段もＢｃ種ヨコハケ(注14)を施し、５段目では静止痕がやや左に傾く。内面調整は、３～４段目ではナナメハケ後突帯内面をナデ調整し、５段目中位から上段は、下段のナナメハケの上からヨコハケが施される。なお、５条目突帯の内面の接合痕に５段目までのヨコハケ調整が潜り込む状況が観察でき、接合痕より上にあたる６段目と口縁部では改めてヨコハケが施される。こうした状況から、５段目と６段目の境にあたる５条目突帯付近で積み上げ行為が休止されたことがうかがえる。

２・３は色調と焼成の程度が異なるが、突帯形状や調整方法、ハケメが類似することから同一個体と考えられる。２は５段目上半から口縁部までの資料で、３は２段目上半から５段目下半部までの資料に該当する。５段目において両者に接点は認められなかった。２は口径31.7cm、口縁部高5.3cm、突帯間隔10cmを測る。外面調整は、静止痕が明瞭なＢ種ヨコハケ調整であるが、突帯間の中位に施すのみで終わり、上下には一次調整のタテハケが広範囲に残存するのが特徴である。内面はナデとナナメハケを併用しており、口縁部のみ板ナデ状のナデが施される。３は体部



第91図　出土埴輪実測図(1)　円筒埴輪

径が32.4cmに復原でき、突帯間隔は上から9.7cm、10cmを測る。３段目には円形透孔が認められ、外面調整は２と同様の様相を示す。内面調整は２段目上半部から４段目にかけてヨコハケもしくはナナメハケを施し、突帯の内面は再度ヨコナデがなされる。４段目中位の接合痕に２段目からの調整が潜り込んでおり、ここで積み上げが休止されたと思われる。

４は端部を欠損しているが、下段に線刻があることや外反する形態から口縁部に復原できる。体部径は27.6cmで、想定される口径は32.5cm前後である。内面はヨコハケ調整を施し、外面はＢ種ヨコハケを行い、一次調整のタテハケが一部に残存する。船を表したと思われる線刻は、２本弧線を配し、それに短い３本の直線を交叉させたもので、舟体と櫂を表現したものとみられる。

５は、口径28cm、口縁部高5.2cmを測り、ほかの資料に比べ器壁が厚いのが特徴である。口縁端部は丸みを帯びた形状を呈する。内面は磨滅により調整が不明瞭であるが、わずかにヨコハケが確認できる。外面調整にはヨコハケを用いる。

６は口径38cm、口縁部高6.8cmである。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部はやや外方に突出するようにつまみナデを施す。内面調整はヨコハケで、外面は右上がりのナナメハケを施す。通有のナナメハケとは施行方向が逆になることから左利き工人による製作であると思われる。同様の特徴は９にも認められ、両者は焼成・色調・突帯形状が類似することから、同一個体もしくは同一工人による製作である可能性が考えられる。

７は長方形透孔を有する個体で、口径30.1cm、口縁部高6.4cmに復原できる。内面はナデ調整の後、口縁部のみヨコハケを施す。外面はヨコハケ調整であり、左に傾く静止痕がかすかに確認できる。８は、口縁部高5.7cmを測り、口縁部は直立する形態を有する。内面はナデの後、口縁部のみヨコハケを行う。外面はヨコハケ調整である。

９は口縁部高6.1cmで、内面にナナメハケ、外面に右上がりのナナメハケを施した資料である。６と同様に、ハケ調整が右上がりに施される例である。

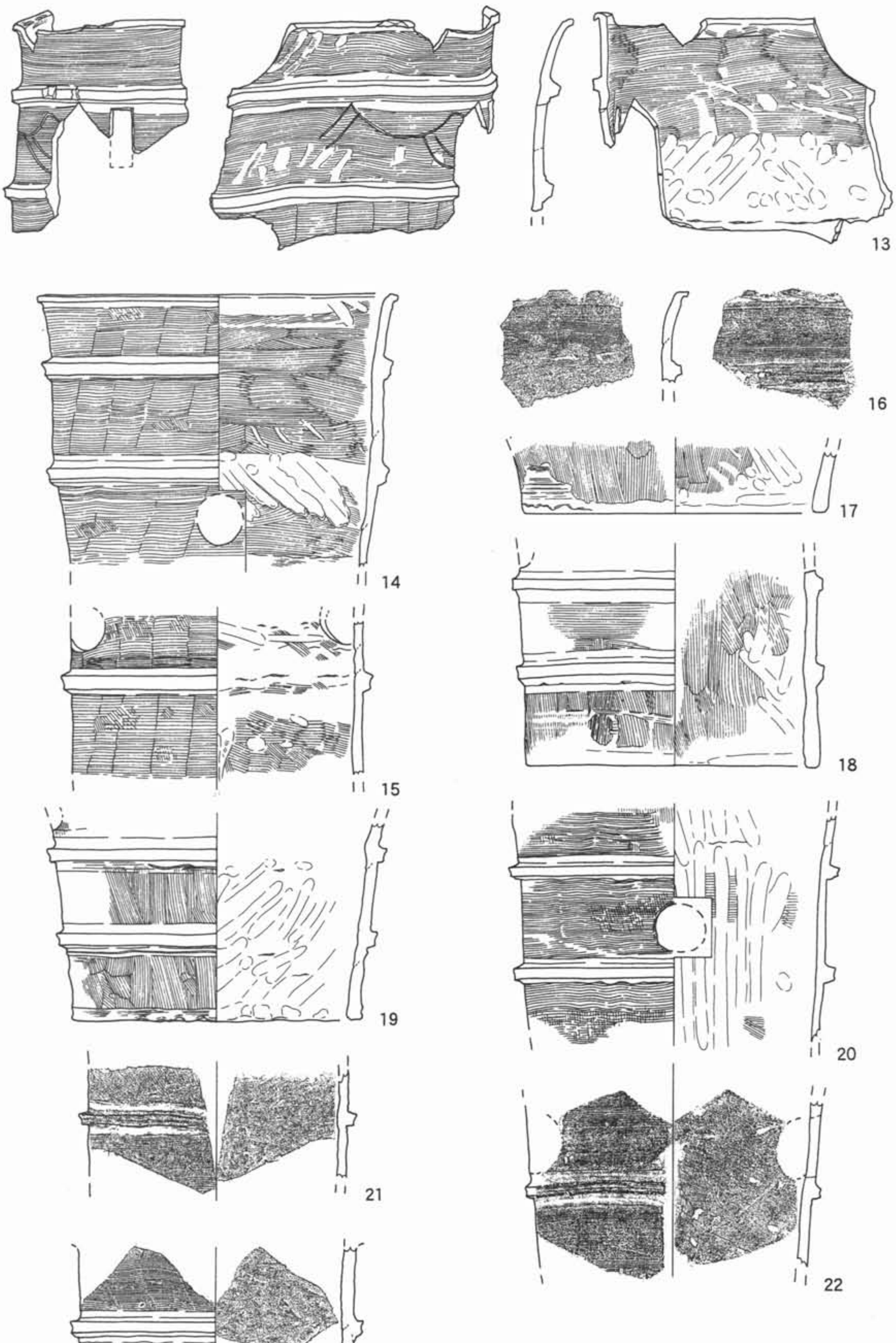
10は、口縁部高5.3cmを測る。内面調整にナナメナデ、外面調整にヨコハケを用いる。内面には線刻が認められ、横方向の直線を線刻後、それに直交するように平行する３本線を線刻する。

一方、折り曲げ口縁の資料群には、ナデによって口縁端部を屈曲させるもの(11・13・14・15)と、粘土紐貼り付けによって口縁端部を肥厚させるもの(12)との２種類が認められる。

12は、口縁部高7.2cmを測り、外面はヨコハケ、内面はタテハケ調整後ユビオサエを施す。外面のヨコハケには薄く静止痕が確認できる。

11・13～15はいずれも内外面ヨコハケ調整を施す個体である。そのうち、13は高温焼成によって焼き歪んだ資料で楕円形を呈し、口縁部高6.0cm、突帯間隔9.5cmを測る。口縁部直下の段(６段目)に長方形透孔、その下段(５段目)に円形透孔が直交して穿たれている。外面には、4本足の動物のような線刻が見られる。外面調整は一次調整ナナメナデ後、Ｂｃ種ヨコハケを施すが静止痕は明瞭ではない。内面調整は、下半部がナデ調整で６段目の中程から断続的なヨコハケ調整に変化する。

14は５段目から口縁部まで残存し、口径36cm、口縁部高6.1cm、突帯間隔10.2cmに復原できる。



第92図　出土埴輪実測図(2)　円筒埴輪

外面調整は静止痕がやや不明瞭であるがＢｄ種ヨコハケを施し、突帯間隔の中位に一次調整のタテハケが顕著に認められる。内面調整は、５段目の中位付近まで成形してヨコハケを施した後、その上の段を積み上げてナデ調整を行い、さらに６段目以上には密なヨコハケ調整が施されている。また、この14と同一個体と考えられる資料に15があり、透孔の配置から15は２・３段目に該当すると思われる。体部径は28.8cmで、14と同様の外面調整を施す。内面調整はヨコハケとナデが認められ、下半部のヨコハケ調整の上から、突帯内面の接合痕付近にヨコナデが施される。

16はほかの資料よりも口縁端部の突出度が高いのが特徴であり、口縁部高は6.9cmを測る。

17～19は底部の資料である。17は底径30cmで一次調整に横方向の板ナデもしくはユビナデを施した後、二次調整にタテハケを行う。内面はタテハケとユビナデを併用し、底端部にはヨコナデを施す。18は底部から３段目下半部まで残存し、３段目には透孔が確認される。底径29.4cm、突帯間隔8.6cmである。外面調整は、底部から２段目まで連続するタテハケを行っており、その後2段目にはヨコハケを施す。底端部にはタテハケを切る横方向の擦痕が顕著に認められ、突帯間隔設定時の工具痕跡と考えられる。内面調整は、底端部から２段目にかけてタテハケを施す。

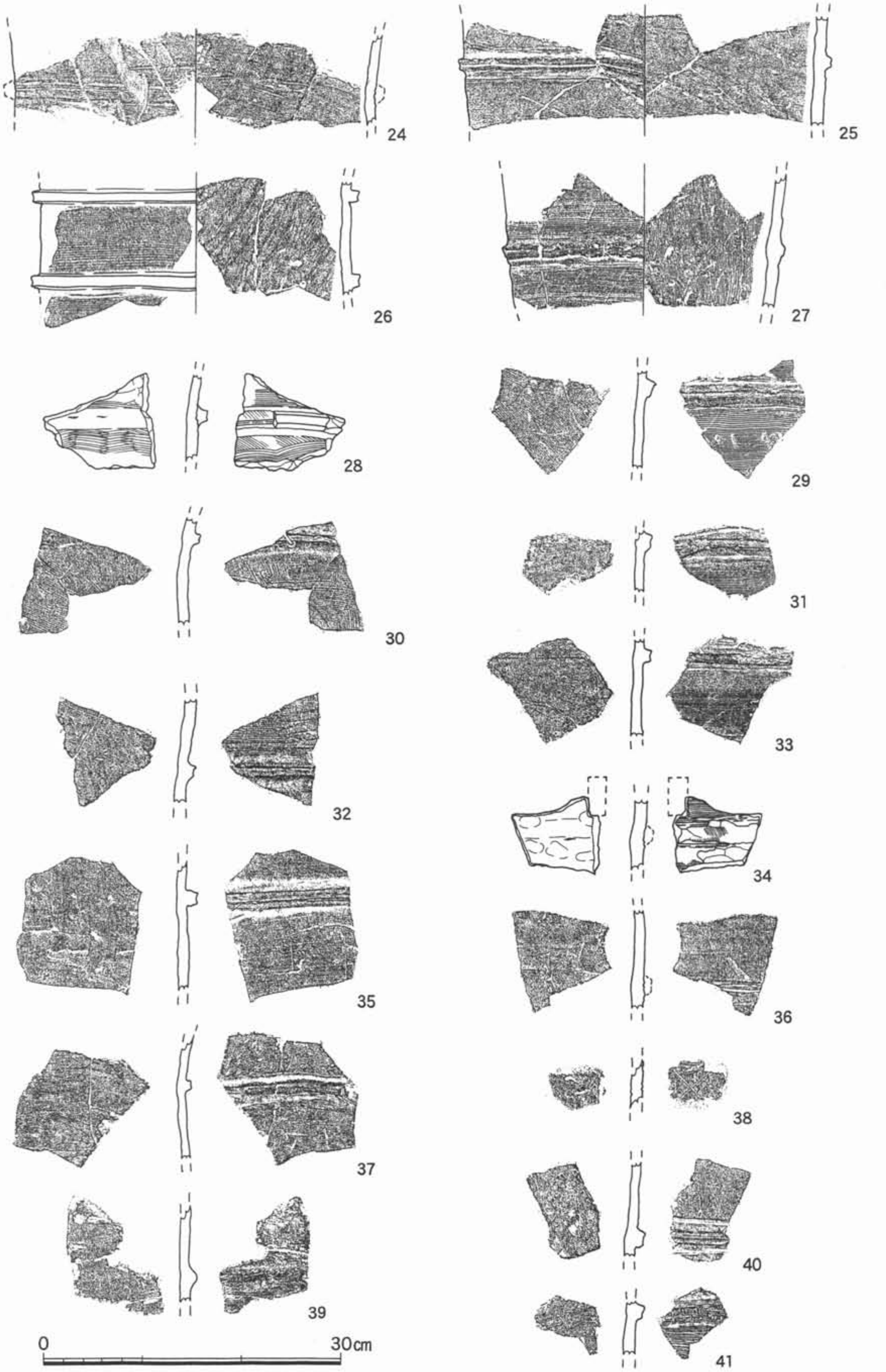
19は底部から３段目までの資料で，底径28.8cm、底部高8.7cm、突帯間隔8.2cmを測る。３段目に円形透孔を有し、内面調整はナデ、外面は全段ともタテハケ調整を用い、底端部に設定工具の擦痕が認められる。突帯下辺部には突帯の成形および整形に伴う爪痕が、突帯に平行して沈線状に確認でき、こうした爪痕は21と26にも認められる。これら三者は部位や調整方法が異なっているが、突帯形状、ハケメ、胎土、色調の類似性から同一個体の可能性がある。

20～27は、胴部径の復原が可能な資料で、３通りの内外面調整が確認できる。20・21・23・26は、外面にヨコハケ、内面にナデを用い、22・27は外面にヨコハケ、内面にナナメ・タテハケを用いる。

24・25は外面を板ナデ、内面をナデで仕上げている。20は、胴部径30cm、突帯間隔9.8cmを測り、円形透孔を有する資料である。明瞭な静止痕は持たないが、Ｂｃ種ヨコハケを採用している。内面はヨコハケ後、下から縦方向に一連の動作でユビナデが施される。

21は、胴部径が26cmで内面にナデを用いる。下段の外面調整ではＢｄ種ヨコハケ調整を採用しており、強い傾斜の右上がりの静止痕が見られる。上段ではヨコハケ後タテハケが施されており、段を境に外面調整が変化している。22は、円形透孔を有する胴部径28.2cmの資料である。外面は静止痕の浅いヨコハケ調整を施し、一次タテハケ調整が残存している。内面は、下半部がナデ調整であるが、突帯内面から上部ではヨコハケを行う。23は、体部径27.3cmを測り、内面調整にナデ、外面調整にＢｄ種ヨコハケを用い、左上がりの静止痕が確認できる。

24・25はそれぞれ体部径が36.6cm、36.8cmに復原できる。24は突帯が剥離しており、設定工具の２条凹線が確認できる。26は体部径31.6cm、突帯間隔8.4cmを測り、突帯下辺部に19・21と同様の爪痕が認められる。27は内外面ともハケ調整を行う個体で、胴部径は28.2cmである。内面は、タテハケ後突帯内面にユビオサエが確認される。外面はＢｄ種ヨコハケで右上がりの静止痕をもつ。突帯は扁平で平らな面を持っており、突帯成形時の板押さえ後、台形状に整形していない状

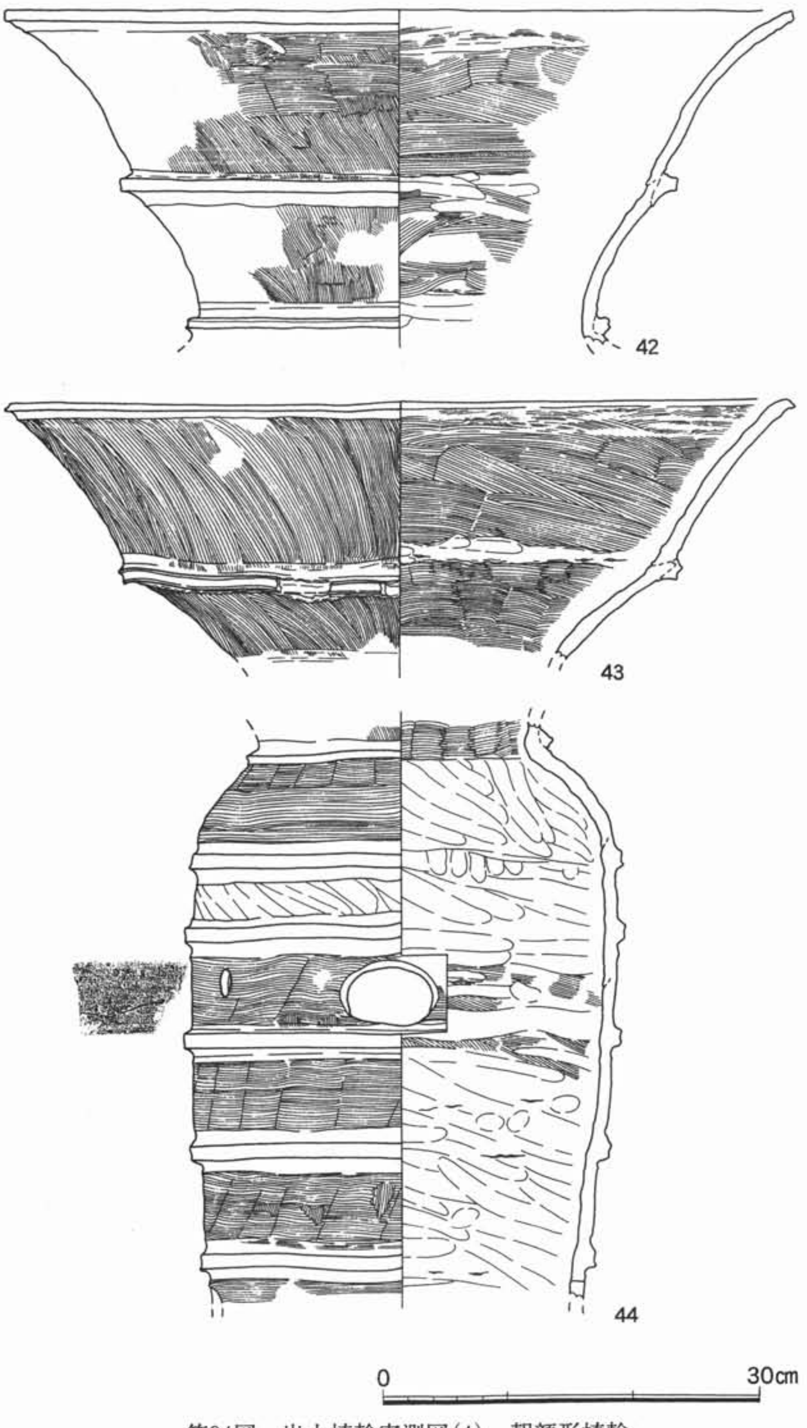


第93図　出土埴輪実測図(3)　円筒埴輪

況がうかがえる。また、突帯上面には木目のような条線が認められる。

28～41は径の復原ができなかった破片資料である。28～32・35は外面ヨコハケ、内面ナナメハケもしくはタテハケを施す資料である。33・34・39・41は外面をヨコハケ、内面をナデ調整するもので、36・37は外面を板ナデ調整、内面をナデ調整する資料である。40のみ外面をタテハケ、内面をナデで仕上げている。そのうち、34は長方形透孔の右角が確認できる。38は「×」の線刻が認められる小破片である。

(2)朝顔形埴輪



第94図　出土埴輪実測図(4)　朝顔形埴輪

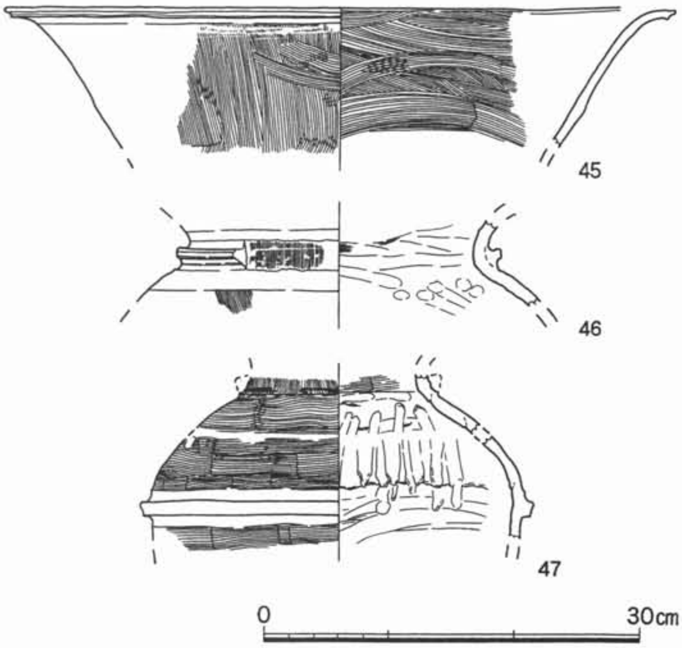
42から47までの資料が該当する。頸部から口縁部の資料はすべて外面タテハケ、内面ヨコハケを施す。体部の資料は、内面はすべてナデ調整であるが、外面調整には胴部から肩部までをヨコハケ調整を施すものと、13のように肩部外面にタテハケを施すものの２種類が確認される。口縁部の成形方法は、一次口縁を成形した後、二次口縁を積み上げ、突帯を貼り付けたもので、過去の報告でいう「口縁部分割成形」に該当する(注15)。

42は口縁部から頸部にかけて復原される資料であり、口径62.7cm、頸部径33.6cmを測る。内面には、頸部突帯の少し上の箇所と口縁部突帯内面の箇所に接合痕が確認できる。それらは頸部突帯内面のナデ調整を切る形で一次口縁の粘土が積み上げられおり、同様に口縁部突帯の内面においても一次口縁内面ナデ調整の上から二次口縁の粘土紐積み上げが行われている。いずれの段も積み上げ終了後にヨコハケを全面に施したのち、粘土紐積み上げに当たる箇所を再度ナデ調整しながら製作している。内面調整と対応する形で外面調整も施されており、一次口縁の接合痕と同じ高さにタテハケの起点が確認できる。また、成形および整形を終えた口縁部突帯の上面にはタテハケの起点が集中して認められる。二次口縁では全面タテハケ後に部分的にヨコハケを施している。

43と44は同一個体だが、接点が僅かなので個々に図示しているが、全体形態としては７条突帯の朝顔形埴輪に復原でき、２段目から口縁部まで残存する資料である。

43は頸部直上から口縁端部までの資料で、口径は63cmを測る。一次口縁部内面のヨコハケ調整が口縁部突帯内面の接合痕に潜り込んでいることから、口縁部突帯まで成形・調整した後に二次口縁の粘土を積み上げ、ナデ調整している状況がうかがえる。さらに、そのナデ調整を切る形で二次口縁部の内面調整のヨコハケが施されている。また、一次口縁部の内面全体に焼成前塗布された赤色顔料がみられる。しかも、突帯の接合痕に入り込んでいることから、二次口縁を積み上げる前に赤色顔料が塗布されたと考えられる。外面調整は、一次・二次口縁ともにタテハケ調整である。突帯剥離面には、突帯貼り付けに際してのナデが確認できる。

44は２段目から頸部までの資料で、透孔が６段目と３段目に穿たれている。胴部径は33.3cmで、突帯間隔は上から順に5.3cm 8.0cm、8.5cm、8.6cmを測る。６段目には円形透孔に直交する位置に、直径1.9cmの小孔が副次的に穿たれており注目される。ま



第95図　出土埴輪実測図(5)　朝顔形埴輪

た、6段目には「～」のようなヘラ記号が認められる。最上段を除く胴部の外面調整はＢｃ種ヨコハケであり、肩部外面は3段に渡ってヨコハケが施されている。最上段のみナデ調整で仕上げられている。内面調整は、4・5段目までは左上がりのナナメナデで、6段目はハケ後ナデ、7段目はヨコナデ、肩部はタテ・ナナメナデ、頸部はヨコハケを行う。6段目中位の接合痕にハケ調整が潜り込むことから、ここが積み上げ休止ラインであると考えられる。

45は二次口縁に当たる部位で、口径は53.4cmに復原できる。口縁端部が屈曲する形態を呈し、外面調整はタテハケで、内面調整は密にヨコハケを施す。

46は頸部に該当し頸部径24cmを測る。内面調整はナデで外面調整はタテハケを用いており、突帯剥離面にタテハケ調整が確認できる。47は肩部から頸部までの資料で、頸部径15.9cm、体部径30cmを測り、非常に焼成が良好で須恵質を呈する。最上段突帯のやや上の箇所で接合痕が確認でき、接合痕以下はヨコナデ、接合痕以上ではタテナデ調整がなされている。また頸部でも明瞭な接合痕があり、それを境にヨコハケ調整に変わる。調整方法が接合痕を境に変化することから、肩部の成形に際して、肩部から頸部までが一連の積み上げ単位であることが窺える。外面調整はヨコハケであり、肩部ではヨコハケを3～4回施している。頸部突帯の剥離面では一次タテハケ調整が確認でき、タテハケの上から施された工具痕が複数箇所に平行して確認される。

(3)形象埴輪

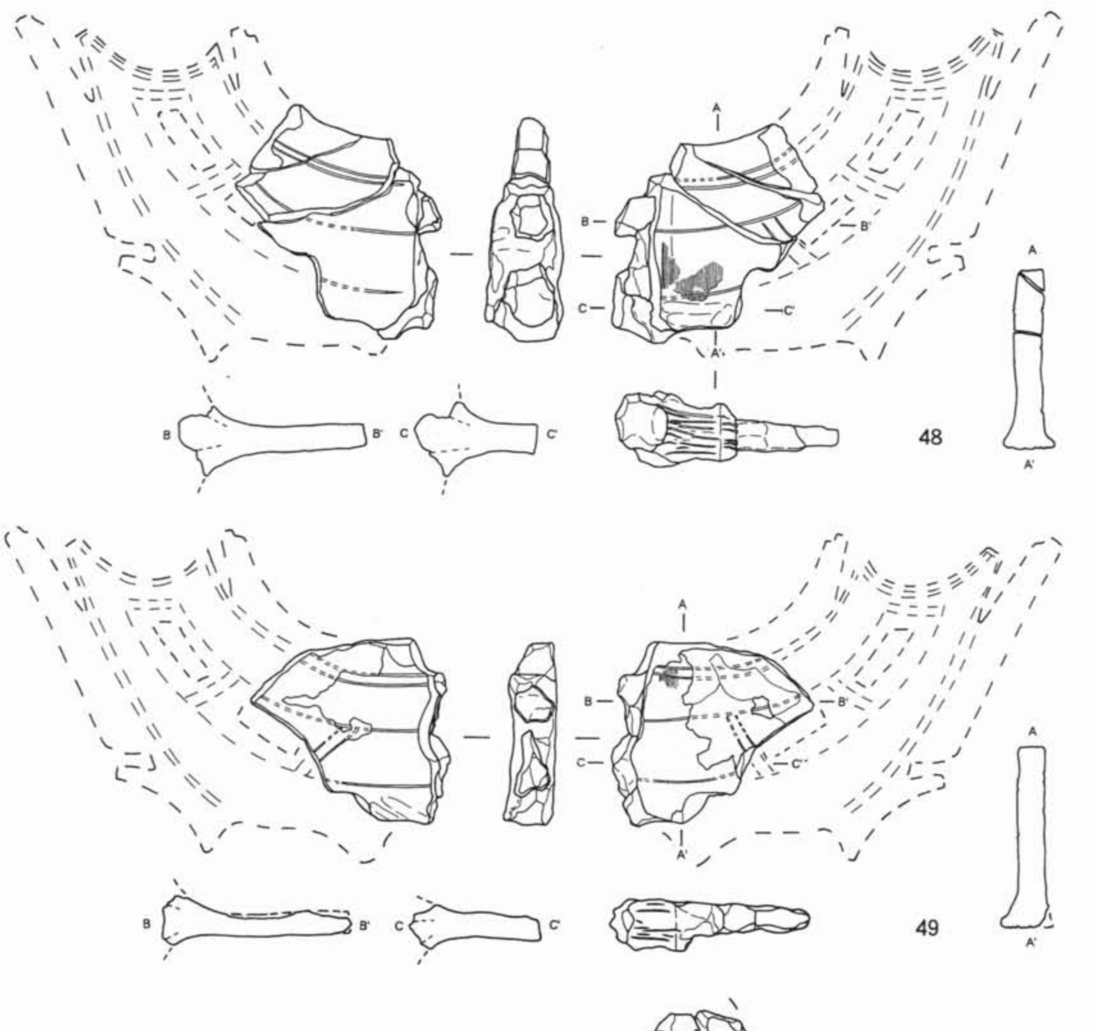
48～55は蓋形埴輪に該当する資料である。48～50は立飾りの羽根で、この三者は接合が可能な資料である。第97図にこれらの合成図を示している。文様構成は、輪郭に沿って2本の沈線で縁取りをし、縁取りに沿ってその間を約3cm間隔で内枠線を1条ずつ2本施す。内枠線の空間を直交する方向に2本単位の線刻を行い、この2本線の上部に長方形の透孔を穿つ。

48・49は羽根の上半部に該当する資料で、両者は左右で接合し、下方から見ると直角に組み合う。いずれも2本の柱状粘土を軸として粘土紐を水平方向に積み上げ、調整を施している。下半部との接合面には接着目的の刻み目が転写され凸状を呈している。

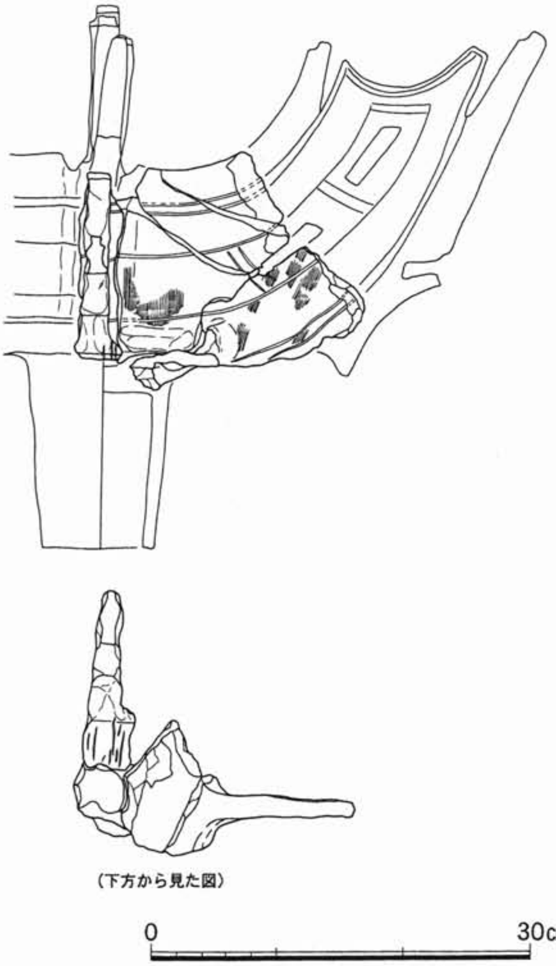
50は48の下面に接合する個体で、立飾りの下半部と受け部に該当し、受け部の立ち上がり部分に立飾り下半部が接着した状態となっている。それらの接着後、受け部中央から数本の刻み目を連続して施し、立飾り上半部(48)との接着を図っている。製作手順としては、立ち上がらせた受け部端面に立飾り羽部の下半部を積み上げた後、刻み目を入れ、その上に羽根の上半分を積み上げるという成形過程が復原できる。立飾りの製作技法については、復原されることは稀であるため、今回の資料は蓋形埴輪の立飾りの製作方法を考えるうえで良好な材料となろう。

51・52も立飾りの羽根である。胎土・色調・焼成が酷似することから両者は同一個体である可能性が高い。先の48～50までの資料よりも器壁が均等に薄く仕上げられており、印象が異なるが、どちらも48～50と同様の文様構成を有する。

53～55は笠部の資料である。53は笠部下端に該当する。内面調整はナデで、外面はヨコハケ調整後線刻を施す。下端に平行する直線を線刻後、それに直交する3本線を上から線刻している。端部突帯の剥離面にはヨコハケが確認できる。54は笠部と体部との接合部分で、内外面ともナデ



第96図　出土埴輪実測図(6)　蓋形埴輪



第97図　蓋形埴輪(48～50)接合状況図

調整が施される。胴部と笠部の接合痕に、接合に際しての接着目的と思われる刻み目が観察される。また、体部と笠部との間には空間を補充したと思われる粘土が確認できる。55も笠部と体部との接合部分である。外面にはナナメハケ後に3本線の線刻が施されている。

56は、鳥形埴輪の羽根部分もしくは甲冑形埴輪の肩甲部分と思われる資料で、ゆるやかに湾曲する形態を呈する。内外面ともナデ調整で、外面には4本の線刻が確認される。

57は盾形埴輪の盾面に該当し、鋸歯文が確認される。58は不明形象破片で、刻み目が施されている。59は、家形埴輪の裾廻り突帯のコーナー部分に該当し、上面にハケ調整が施されている。

60～62は不明形象破片である。60はゆるやかなカーブを描き、内外面ともナデ調整である。外面に赤色顔料が飛沫したような痕跡が残る。61は径が小さい円筒状の形態で、水平に4本の沈線が描かれている。62は、粘土板が接合した状態のもので、家形埴輪の一部もしくは人物埴輪の服裾が考えられる。内面はナデ調整で、外面は細かなハケ調整が施される。

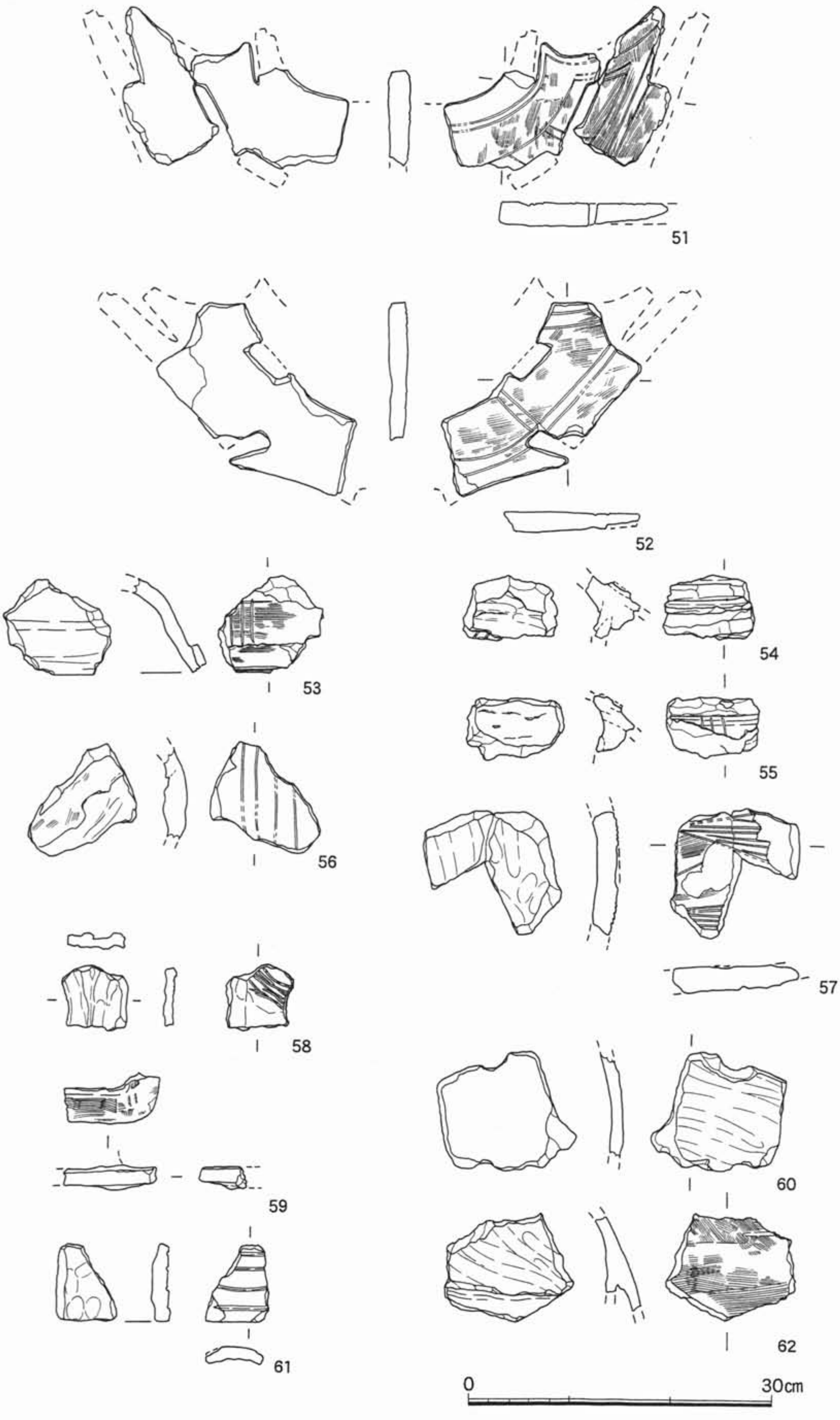
(4)上人ヶ平5号墳の埴輪について

最後に、蓋形埴輪と円筒埴輪の特徴をもとに埴輪の編年的位置付けを行うとともに、派生する問題についても触れておきたい。

1) 蓋形埴輪

今回確認できた蓋形埴輪の立飾りは、いずれも外側に2段の鰭をもち、羽根本体には2条の外縁線と1条の内枠線で区画した空間に二つの長方形透孔を穿つもので、最上辺が円弧状を呈する。これと同様の特徴をもつ資料は、上人ヶ平古墳群中の16号墳出土の蓋形埴輪にも認められる。5号墳と16号墳とでは円筒埴輪も類似することから、同時期に同じ埴輪窯からの供給を受けた可能性が高いと思われる。

この蓋形埴輪に見られる特徴のうち、最上辺が円弧状である点や、外側の鰭を上下段に分割する点、羽部中央に長方形透孔を穿つという点は誉田御廟山古墳(応神陵古墳)に初現があること



第98図　出土埴輪実測図(7)　形象埴輪

から[注16]、５号墳は誉田御廟山古墳よりも後出する時期に位置付けられよう。笠部についても同様に、笠部下端部突帯の存在や３条一帯の文様から川西編年Ⅳ期[注17]に併行する時期を示し、円筒埴輪の編年観と矛盾しない。

さて、この上人ヶ平５号墳出土の蓋形埴輪に類似する事例を、近隣の地に求めるならば、音乗谷古墳の報告内に提示されている５世紀の特徴を示した蓋形埴輪が該当する[注18]。音乗谷古墳は６世紀前半の前方後円墳(全長22m)で、後期の埴輪が主体となるため、当該資料は当古墳に伴う可能性は低いとされている。しかし、音乗谷古墳近傍に存在した古墳のものであることまで否定されるわけではない。同資料は、長方形透孔を羽根本体に２つ穿孔したもので、鰭部分に線刻はなく、５号墳のものと同じ文様構成をもつ。音乗谷古墳例は、４枚の羽根が接合した状態で、立飾り下半部には受け部からの剥離面が認められ、その面には受け皿との接着を図った刻み目が施されている。これは５号墳の48～50の資料で確認できた痕跡と同じ様相を呈しており、同じ製作技法が確認できる点で重要である。両者は同じ奈良山丘陵上の東西に位置し、地理的な親縁性から、５号墳と同一集団もしくは同一生産地からの供給を受けた可能性が十分見込まれる。また、破片資料ではあるが、城陽市芭蕉塚古墳(全長114m)出土の蓋形埴輪にも、５号墳の資料と類似する文様構成が確認できる[注19]。

2）円筒埴輪

円筒埴輪は、過去に報告された５号墳の円筒埴輪とほぼ同じ様相を示しており、過去の報告の「A類」に該当するものである。同じA類の円筒埴輪は、７・８・16・17号墳にも確認されており、そのうち、８号墳からはTK216型式期の須恵器が出土しており、５号墳も同様の時期である可能性が指摘できる。

報告資料の各部位をまとめておくと、口径28～38cm、口縁部高5～7.4cm、突帯間隔8.2～10cm、底部高8.7cm、底径28.8～30cmとなる。外面調整は、Bc種ヨコハケが主体であり、Bd種ヨコハケの資料が数点認められる。

口縁部の形態は、直立口縁と折り曲げ口縁との二者が存在するが、ともに口縁部高を他の段よりも狭く設定する点が共通する。また、円形透孔のほかに長方形透孔が認められ、一部の資料には、副次的な穿孔として小孔が穿たれていた。こうした特徴は、同時期の一般的な円筒埴輪には認められない。そこで注目したいのが、奈良山丘陵を挟んで南に位置するウワナベ古墳の鰭付円筒埴輪である[注20]。

ウワナベ古墳の鰭付円筒埴輪は、①６条７段の段数構成で口縁部高を他の段よりも狭く設定する、②口縁端部を折り曲げる、③円形・長方形透孔を配置する、④副次的穿孔として三角形の小孔を穿つ、⑤底部高が、突帯間隔と揃う一群と突帯間隔よりも高い一群の二者が認められる、といった特徴を備えており、全体的な形状が上人ヶ平５号墳の円筒埴輪と酷似している。

⑤の底部に関して、今回の調査では認められなかったが、過去の報告によると５号墳の円筒埴輪にも底部高が低い一群(底部高９～10cm)と底部高が高い一群(底部高12～13cm)との二者が存在

することが確認できる。[注21] これは、鐘方正樹氏がウワナベ古墳で指摘している割付3式のB型2類とA類にそれぞれ相当するものと考えられ、[注22] 両古墳は同じ割付方式を採用していると言える。

ただし、ウワナベ古墳の資料は5号墳に比べてやや大きく、器高や突帯間隔に差が認められる。また、5号墳からは鰭付円筒埴輪自体は出土していない。しかしながら、5号墳にみられる、口縁部高を突帯間隔よりも短く割り付ける点、「副次的穿孔」らしき小孔が穿たれる点、6段目に長方形透孔を配する点、同じ割付方式を採用する点は、ウワナベ古墳の鰭付円筒埴輪のデザインを祖形として製作された状況を強く示唆する。さらに、ウワナベ古墳出土埴輪は、外面調整にBc種ヨコハケだけでなくBd種ヨコハケも確認でき、[注23] 製作技法の点からも両者の関係の近さがうかがえる。このように、上人ヶ平5号墳の埴輪は、ウワナベ古墳の強い影響下で生産されたと考えてよかろう。

ウワナベ古墳の時期については、西側造り出し部から出土した須恵器によってTK216型式期に位置付けられている。[注24] 5号墳の埴輪は、ウワナベ古墳よりも突帯間隔・底部高が縮小していることから、ウワナベ古墳よりも後出する要素が認められる。しかし、先述の蓋形埴輪の位置づけや、TK216型式期の須恵器が出土した8号墳との円筒埴輪の共通性、ウワナベ古墳との系統関係などを重視するならば、両者を時期的に切り離して考えるのは困難である。したがって、5号墳についてもウワナベ古墳に近い中期中葉の時期の築造と考えられる。

ところで、上人ヶ平古墳群と隣接する地に展開する前期後半の瓦谷古墳群では、佐紀盾列古墳群西群の埴輪と同一のものが使用されている。[注25] ウワナベ古墳と上人ヶ平5号墳にみる両地域間の密接な関係は、前期後半にまで遡る可能性があり、奈良山丘陵近辺で展開される古墳の築造と大規模な埴輪生産を考えるうえで、上人ヶ平5号墳出土埴輪は重要な位置を占めるものである。

(田中智子)

5. まとめ

(1) 上人ケ平5号墳

上人ケ平5号墳は過去に行われた調査と併せて、かなりの部分を調査したことになる。これらの結果を総合するとこの古墳は次のような姿であったと考えられる(第68図)。

1) 墳丘

墳形は造り出し付き円墳ないし帆立貝形前方後円墳と呼ばれるものである。規模全長26.4m、円丘部の直径は23.2m、造り出しの幅9.0m、長さ5.0mを測る。墳丘第1段目は高さ0.6mで、第1段目のテラスは幅1.6m、墳丘第2段目の直径は16.8mを測る。墳丘の高さは推定で3.5m前後であろう。墳丘の斜面の傾斜は約20～25°で墳丘第2段目は途中から傾斜が急になっている。

2) 周溝

古墳築造時本来の周溝の外側上端は調査で検出された溝よりも墳丘寄りで、テラスの内側斜面の延長と、旧地表面の延長線上との交点付近に想定される。一方墳丘第1段目の上端は北トレン

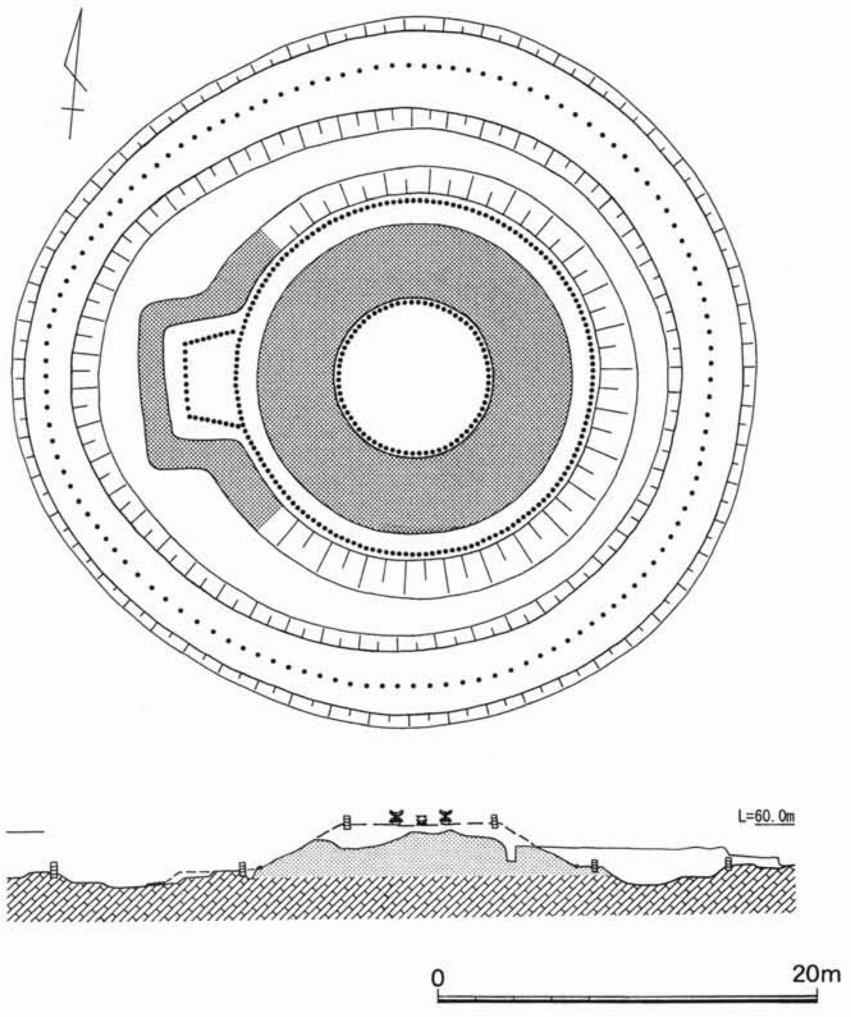
チ断ち割りで確認された墳丘第１段目の斜面の延長と、同テラス面の延長上の交点に求められる。この結果、周溝平面形は倒卵形と言うよりは円丘部から直線的に造り出し部に向けてすぼまる形状を採る。

3）葺石

葺石は造り出し部の墳丘第１段目斜面および墳丘第２段目に葺かれている。最下段に長軸30～40cmの亜円礫を用い、基底列としている。調査範囲内では縦の区画列は確認されず、基底列の上部には拳大の円礫～亜円礫が、奥側がやや下方になるように葺かれている。

4）埴輪列

確認された埴輪列は墳丘第１段目テラス上と造り出し部、周溝外周上の３か所にめぐらしている。このうち、造り出し部には「コ」の字状にめぐらせており、埴輪の樹立には１基ごとに据え付け穴を穿っている。埴輪の間隔は狭く、隣の埴輪と接するか、数cmの間隔を開けて樹立している。墳丘第１段目テラスの埴輪はテラス上に布堀状の溝を穿ち、その中にほとんど間隔を空けずに樹立している。周溝外周上の埴輪列は埴輪の中心間の距離で、約１ｍの間隔を空け、１基ずつ



第99図　上人ヶ平５号墳復原図

据え付け穴を穿って樹立している。いずれの埴輪も第2段目まで埋めている。さらに、原位置を保った埴輪は検出されなかったが、墳頂部で出土した埴輪の量から見て、墳頂部にも埴輪列や蓋形埴輪を主体とした形象埴輪群が存在したことが想定される。

5）埴輪

出土した埴輪には6突帯7段の円筒埴輪と朝顔形埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪がある。円筒埴輪は外面調整がタテハケ後、一瀬和夫氏のＢｃ種ヨコハケを主体とし、一部Ｂｄ種ヨコハケを含む。焼成は軟質のものを含むが、黒斑は存在しない。透かしは円形を主体としながら、埴輪の上から2段目に長方形透かしが若干存在する。突帯は台形が多く、一部「Ｍ」字形が混じる。また、北トレンチで出土した埴輪には帆船を線刻したものがあり、森田克行氏は淀川水運との関係を指摘している。

以上の特徴から上人ヶ平5号墳は古墳時代中期中葉を前後する時期に築造されたと推定される。上人ヶ平5号墳の北西約650ｍに位置する西山塚古墳とはほぼ同時期に築造されたと思われる。南山城全域で比較すると、久津川古墳群の芭蕉塚古墳と近い時期であると考えられる。また上人ヶ平古墳群中の埴輪ではプロポーション、技法、突帯間の距離など、さまざまな特徴が異なっており、むしろ佐紀楯列古墳群のウワナベ古墳出土埴輪に似ている部分もある。

(2) 上人ヶ平遺跡

上人ヶ平5号墳の墳丘上には中・近世墓、長方形状の土坑、野井戸などの後世の遺構が営まれていた。これらのほか、奈良時代に平城京に瓦を供給した瓦窯の工房群の一部として機能した可能性が指摘されている[(注26)]。これらは調査範囲内の検討だけではなく、瓦窯については奈良山丘陵の瓦窯群全体の中での位置づけが必要であろうし、中・近世墓群は上人ヶ平周辺の集落の中世末期から近世にかけての墓制のあり方とも比較が必要であろう。また「上人ヶ平」という地名の興りとも関係がありそうである。こうしたことについて検討するには紙幅の都合もあり、今後の課題としてあげておくに留める。

（福島孝行）

注1　①筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要　(1)内田山遺跡・内田山Ｂ１号墳」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

②筒井崇史・山内基樹「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要　(2)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第101冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

③筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概要　(3)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第109冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

④筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成15年度発掘調査概要　内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第113冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

⑤筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成16年度発掘調査概要　(1)内田山遺跡・内田山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第117冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2006

注2　①小山雅人「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要　(3)上人ヶ平遺跡」（『京都府遺跡調査概

報』第17冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

②戸原和人「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要　(2)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

③小池寛「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要　(1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

④石井清司・伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要　(1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第35冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

⑤石井清司・伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要　(1)上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第40冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

⑥石井清司・伊賀高弘『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

⑦石井清司「木津地区所在遺跡平成５年度発掘調査概要　(2)上人ヶ平埴輪窯第２次」(『京都府遺跡調査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

⑧筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成16年度発掘調査概要　(1)上人ヶ平遺跡第８次」(『京都府遺跡調査概報』第117冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2006

注３　調査参加者　**調査補助員**　大谷博則・川嶋佑佳・坂下実・田中拓史・土屋菜摘子・永野宏樹・山岡匠平・渡辺理気　**整理員**　岡野奈知子・藤井聖名子・山田三喜子・清水友佳子・井上聡・荻野冨紗子・丸谷はま子

注４　『京都府遺跡地図』(第３版）第３分冊　京都府教育委員会　2003

注５　石崎善久「京都府下における礫床をもつ木棺について」『浪江庸二先生・林和廣先生追悼太邇波考古学論集』両丹考古学研究会　1997

注６　梅原末治「木津町市坂の一古墳」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第二十冊　京都府　1939

注７　上人ヶ平５号墳を含む上人ヶ平遺跡および上人ヶ平古墳群の調査は、今回の調査が第９次調査となる。なお、上人ヶ平遺跡に関する調査報告については、注２各文献ならびに注６文献を参照のこと

注８　森田克行「淀川と継体大王」『史跡今城塚古墳シンポジウム　継体大王とその時代』　高槻市教育委員会・高槻市埋蔵文化財センター　2005

注９　注２⑥文献　51頁および第31図参照

注10　石井清司「奈良時代の遺構について」(注２⑥文献　206～212頁)

注11　注６文献　58～59頁

注12　注２⑥文献　40・49頁および第29図参照

注13　注２⑥文献　96～102頁

注14　一瀬和夫「允恭陵古墳の占める位置－埴輪と墳丘－」『允恭陵古墳外堤の調査－国府遺跡80-３区－』大阪府教育委員会　1981

注15　注２⑥文献　109～111頁

注16　川村和子「５世紀代の蓋形埴輪の変遷」(『西墓山古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅲ－』藤井寺市文化財調査報告第16集　藤井寺市教育委員会）　1997

注17　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会）　1978(後に『古墳時代政治史序説』(塙書房1988)に所収)

注18　高橋克壽「音乗谷古墳」(『奈良山発掘調査報告Ⅰ－石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査－』(『奈良文化財研究所学報』第72冊）　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）　2005

注19　小泉裕司・大野壽子『芭蕉塚古墳発掘調査報告書』（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第51集　城陽市教育委員会）　2006

注20　町田章「ウワナベ古墳東外堤」（『平城宮発掘調査報告』Ⅵ（『奈良国立文化財研究所学報』第23冊）奈良国立文化財研究所）　1974

注21　注２⑥文献

注22　鐘方正樹氏は、前期の埴輪は割付方式にしたがって規格が設定されていると指摘しており、突帯間隔と底部高が揃うものをＡ類(突帯間隔＝底部高)、突帯間隔より底部高が高いものをＢ類(突帯間隔<底部高)、突帯間隔より底部高が低いものをＣ類(突帯間隔>底部高)という分類を提示している。Ｂ・Ｃ類のうち、突帯間隔＝口縁部高≠底部高であるものを１型、突帯間隔≠口縁部高≠底部高であるもの(口縁部高が突帯間隔もしくは底部高の1/2で割り付けられるもの)を２型としており、ウワナベ古墳に認められる底部高の高い一群をＢ類２型、底部高の低い一群をＡ類に当てている。このような、Ⅲ期の要素がⅣ期に残存する状況は大和に特徴的な現象であり、大和の保守的な生産体制の表れとされている。

鐘方正樹「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」（『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会）2003

上田睦「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」（『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会）2003

注23　宮内庁書陵部陵墓課編『出土品展示目録埴輪Ⅳ』（宮内庁書陵部）2003　29項写真(57)参照

注24　植野浩三「須恵器生産と須恵器工人－奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして－」（『文化財学報』第11集　奈良大学文学部文化財学科）　1993

注25　石井清司・有井広幸編『瓦谷古墳群』（京都府遺跡調査報告書第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

廣瀬覚「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」（『史跡　五色塚古墳　小壺古墳発掘調査・復原整備報告書』　神戸市教育委員会）　2006

注26　石井清司「造瓦所について」（注２⑥文献　213～218頁）

付表２　内田山Ｂ２号墳埋葬施設ＳＸ12出土玉類観察表

番号	種別	材質	長さ（径）mm	厚さ mm	色調	穿孔	位置
1	丁字頭勾玉	滑石	30	9	D2	両	北
2	丁字頭勾玉	滑石	30	8.8	D2	片	北
3	勾玉	滑石	35.5	12	B4	両	北
4	勾玉	滑石	35	12	D5	両	南
5	勾玉	滑石	32	10	D2	両	北
6	勾玉	滑石	31	11	B4	両	北
7	勾玉	滑石	31	10	D7	片	北
8	勾玉	滑石	30	8	D2	片	南
9	勾玉	滑石	30	4.5	B4	片	北
10	勾玉	滑石	28.5	7	B4	片	南
11	勾玉	滑石	30	8.5	D7	両	北
12	勾玉	滑石	21.5	5	B6	片	南
13	勾玉	滑石	21.5	3.5	C3	片	南
14	勾玉	硬玉	20	5.1	B4	両	北
15	勾玉	滑石	20.5	5.5	B4	両	南
16	勾玉	滑石	20	5.5	B4	片	南
17	勾玉	滑石	20	5	B4	片	南
18	勾玉	滑石	20	5.5	E2	片	南
19	勾玉	滑石	20	6	E2	片	南
20	勾玉	滑石	20.5	4.5	B4	両	南
21	勾玉	滑石	20	5.5	B4	片	南
22	勾玉	滑石	20	5	B4	片	北
23	勾玉	滑石	20	6	B4	片	南
24	勾玉	滑石	19	5	B4	片	南
25	勾玉	緑色凝灰岩	20	5.5	D1	片	南
26	勾玉	滑石	19	5	C1	両	南
27	勾玉	滑石	20	6	D5	片	南
28	勾玉	滑石	18	4.5	B4	片	北
29	勾玉	滑石	19.5	6	B4	片	南
30	勾玉	滑石	19.5	4	D5	両	南
31	勾玉	滑石	18	4	E2	片	南
32	勾玉	滑石	19	4	C3	片	南
33	勾玉	滑石	19	5.5	B4	片	南
34	勾玉	滑石	13	2.5	B4	片	南
35	勾玉	滑石	18	4.5	E2	両	南
36	勾玉	滑石	18	3.5	D2	両	南
37	勾玉	滑石	16	3	B4	片	北
38	勾玉	滑石	16	4	B4	片	北
39	勾玉	滑石	17	3	B5	片	北
40	勾玉	滑石	16	4.5	E2	片	南
41	勾玉	滑石	16	2.9	B5	片	北
42	勾玉	滑石	16	4	C3	片	南
43	勾玉	滑石	16.3	4	B4	片	北
44	勾玉	滑石	15.5	3.5	B4	片	北
45	勾玉	滑石	15	3.5	B4	両	北
46	勾玉	滑石	16.5	3.5	D3	片	南
47	勾玉	滑石	16	3	B5	片	北
48	勾玉	滑石	15	4.5	B6	片	南
49	勾玉	滑石	14.1	2.2	B5	片	北
50	勾玉	滑石	15	3	B4	片	北
51	勾玉	滑石	14.2	2.2	B5	片	北
52	勾玉	滑石	15	3	B5	片	北
53	勾玉	滑石	15	3.6	B4	片	北
54	勾玉	滑石	15.5	4.1	B4	片	北
55	勾玉	滑石	「14.5」	3	B5	片	北
56	勾玉	滑石	12.5	3.2	B4	片	北
57	勾玉	滑石	13	3.8	B4	片	北
58	勾玉	滑石	14	3.1	B4	片	北
59	勾玉	滑石	14	3.5	B4	片	北
60	勾玉	滑石	14	4.5	D1	片	北
61	勾玉	滑石	12	3.1	B4	片	北
62	勾玉	滑石	13.5	4	D2	片	南
63	勾玉	滑石	12	4	B4	両	北
64	勾玉	滑石	13.3	3	B4	片	北
65	勾玉	滑石	13	3.5	B4	片	北
66	勾玉	滑石	12.5	3.5	D1	両	北
67	勾玉	滑石	12	3	B4	片	北
68	勾玉	滑石	12	3	B4	片	北
69	勾玉	滑石	12	2.5	B4	両	北
70	勾玉	滑石	12	3.8	B4	片	北
71	勾玉	滑石	12	2.5	B4	片	北
72	勾玉	滑石	12.3	3.1	B4	片	北
73	勾玉	滑石	12.2	3.5	B4	片	北
74	勾玉	滑石	12.5	3	B4	片	北
75	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
76	勾玉	滑石	13.1	3.5	C1	片	北
77	勾玉	滑石	12	2.5	B4	片	北
78	勾玉	滑石	12	3	D2	両	北
79	勾玉	滑石	12	3	B4	片	北
80	勾玉	滑石	13	3	B4	片	北
81	勾玉	滑石	13	3	B4	両	北
82	勾玉	滑石	12	3	B4	片	北
83	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
84	勾玉	滑石	12.5	3	B4	両	北
85	勾玉	滑石	12.5	3	B4	両	北
86	勾玉	滑石	12	3.1	B4	片	北
87	勾玉	滑石	12.1	3	B4	片	北
88	勾玉	滑石	12	2.5	B4	片	北
89	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
90	勾玉	滑石	12	3	D2	両	北
91	勾玉	滑石	12.3	3	D2	両	北
92	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
93	勾玉	滑石	13	3.1	B4	両	北
94	勾玉	滑石	13	3.5	B4	両	北
95	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
96	勾玉	滑石	12.5	3.6	B4	両	北
97	勾玉	滑石	12	3.2	B4	両	北
98	勾玉	滑石	12	3.2	B4	両	北
99	勾玉	滑石	12	2.8	B4	片	北
100	勾玉	滑石	12	2.5	D1	片	北
101	勾玉	滑石	12	3.5	B4	両	北
102	勾玉	滑石	11.8	3.2	B4	片	北
103	勾玉	滑石	12	2.9	B4	片	北
104	勾玉	滑石	11	4	B4	片	北
105	勾玉	滑石	11	2.5	B4	両	北
106	勾玉	滑石	12	2.9	B4	片	北
107	勾玉	滑石	11	3.5	B4	片	北
108	勾玉	滑石	12	2.5	B4	片	北
109	勾玉	滑石	11.1	3.3	B4	片	北
110	勾玉	滑石	12	3	B4	両	北
111	勾玉	滑石	11	3	B4	片	北
112	勾玉	滑石	12	2.5	B4	片	北
113	勾玉	滑石	11	2.5	B4	片	北
114	勾玉	滑石	11	3.1	B4	片	北
115	勾玉	滑石	10.8	3.5	D1	両	北
116	勾玉	滑石	12	3.2	B4	両	北
117	勾玉	滑石	11	3.5	B4	片	北
118	勾玉	滑石	「6.5」	2.8	D2	片	北
119	勾玉	滑石	「12」	3	D2	片	北
120	勾玉	滑石	「11」	2	B5	片	北
121	勾玉	滑石	「8」	3.5	B4	両	北
122	勾玉	滑石	11	3	B4	両	北
123	勾玉	滑石	11	3	B4	両	北
124	勾玉	滑石	10.5	2.8	B4	片	北
125	勾玉	滑石	10.5	3	B4	片	北
126	勾玉	滑石	10	3	B4	片	北

127	勾玉	滑石	10	2.1	B4	片	北
128	勾玉	滑石	10.5	3	B4	片	北
129	勾玉	滑石	11	3	B4	片	北
130	勾玉	滑石	11	4	B4	片	北
131	勾玉	滑石	11	2.5	B4	片	北
132	勾玉	滑石	11	2.5	B4	片	北
133	勾玉	滑石	11	3.3	B4	片	北
134	勾玉	滑石	10.5	2.8	B4	片	北
135	管玉	緑色凝灰岩	4	11.5	D1	両	北
136	管玉	緑色凝灰岩	5	11	D1	両	北
137	管玉	緑色凝灰岩	5	10.5	D1	両	北
138	管玉	緑色凝灰岩	3.1	「11」	B5	両	北
139	管玉	緑色凝灰岩	4.1	20	B5	片	南
140	管玉	緑色凝灰岩	3.5	「10」	B5	両	北
141	管玉	緑色凝灰岩	3.5	「10.5」	B5	片	北
142	管玉	滑石	4	「10.5」	C1	両	北
143	管玉	緑色凝灰岩	3.5	「9.5」	B5	不明	北
144	管玉	緑色凝灰岩	4	「9.5」	B5	両	南
145	管玉	滑石	4	「10」	C1	両	北
146	管玉	緑色凝灰岩	3	10.5	B5	片	北
147	管玉	緑色凝灰岩	4	「12」	B5	両	北
148	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14	B5	両	北
149	管玉	滑石	4	13	C1	両	北
150	管玉	緑色凝灰岩	3.5	13	B5	両	北
151	管玉	緑色凝灰岩	4.5	12	D1	両	北
152	管玉	緑色凝灰岩	4	13.5	B5	両	北
153	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14	B5	両	北
154	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14.5	B5	両	北
155	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14	B5	両	北
156	管玉	緑色凝灰岩	4	14	B5	両	南
157	管玉	緑色凝灰岩	4	13	B5	両	北
158	管玉	緑色凝灰岩	3.5	13	B5	両	北
159	管玉	緑色凝灰岩	3.5	「15」	B5	両	北
160	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14.2	B5	両	北
161	管玉	緑色凝灰岩	3.5	14	B5	両	北
162	管玉	緑色凝灰岩	4	16.4	B5	両	北
163	管玉	滑石	5	16.5	B4	両	北
164	管玉	滑石	3.5	17.1	E4	両	南
165	管玉	滑石	4.5	17	B4	両	北
166	管玉	滑石	5	16.5	B4	片	北
167	管玉	緑色凝灰岩	3.5	18	B5	両	北
168	管玉	滑石	3.7	23	B4	両	北
169	管玉	緑色凝灰岩	3.6	「18.5」	B5	片	北
170	管玉	緑色凝灰岩	3.5	18	B5	片	北
171	管玉	滑石	4.5	19	B4	両	北
172	管玉	緑色凝灰岩	3.5	18.6	B5	両	北
173	管玉	緑色凝灰岩	3.8	19.2	D1	片	南
174	管玉	滑石	5	18	D2	片	北
175	管玉	緑色凝灰岩	4.1	21.2	D1	不明	南
176	管玉	緑色凝灰岩	3.5	19	B5	両	北
177	管玉	滑石	4.5	20	B4	両	北
178	管玉	緑色凝灰岩	4	23.5	D1	両	南
179	管玉	緑色凝灰岩	4.5	24.5	D1	片	南
180	棗玉	不明	6	18.5	A4	両	南
181	棗玉	不明	6	18.5	A4	両	南
182	棗玉	不明	7	16	A4	両	南
183	棗玉	不明	6	15.5	A4	両	南
184	棗玉	不明	6.1	15.4	B3	両	南
185	棗玉	不明	5	15.5	A4	両	南
186	棗玉	滑石	5.5	12	E2	両	南
187	棗玉	不明	5	14	A4	両	南
188	棗玉	滑石	6.2	15.5	B6	両	南
189	棗玉	滑石	6.5	11.5	E3	両	北
190	棗玉	滑石	6	11	D7	両	北
191	棗玉	滑石	6	11	E3	両	北
192	棗玉	滑石	5.5	10.5	D7	両	北
193	棗玉	滑石	6	11.5	D7	両	北
194	棗玉	滑石	6	10.5	C4	両	北
195	棗玉	滑石	6	10.5	E3	両	北
196	棗玉	滑石	6	10.5	D7	両	北
197	棗玉	滑石	6.5	10.5	D7	両	北
198	棗玉	滑石	6	10	E3	両	北
199	棗玉	滑石	6	9.5	D7	両	北
200	棗玉	滑石	5	10	B4	両	北
201	棗玉	滑石	5.5	10	E3	両	北
202	棗玉	滑石	5.5	10	E2	両	北
203	棗玉	滑石	6	10	D7	両	北
204	棗玉	滑石	5.5	10	E2	両	北
205	棗玉	滑石	5	9.5	D7	両	北
206	棗玉	滑石	6	11	E2	両	北
207	棗玉	滑石	6	9.5	B4	両	北
208	棗玉	滑石	5.2	10	E2	片	南
209	棗玉	滑石	5.5	9.5	B4	片	北
210	棗玉	滑石	6	9	D7	両	北
211	棗玉	滑石	6	10.5	E2	両	北
212	棗玉	滑石	5	10	E2	両	南
213	棗玉	滑石	6.5	10.5	E2	両	北
214	棗玉	滑石	5.5	10	E2	両	北
215	棗玉	滑石	5.5	9.5	D7	両	北
216	棗玉	滑石	5	9.5	B4	両	北
217	棗玉	滑石	5	9.5	E2	両	北
218	棗玉	滑石	6	9	D7	両	北
219	棗玉	滑石	5	10	B4	片	南
220	棗玉	滑石	5.5	8.5	D7	両	北
221	棗玉	滑石	6	10.5	D7	片	北
222	棗玉	滑石	5.5	9.5	E2	両	北
223	棗玉	滑石	5	10.5	C4	両	北

224	棗玉	滑石	5	9	D7	両	北
225	棗玉	滑石	5.2	10	E2	片	南
226	棗玉	滑石	5.5	9	E2	両	北
227	棗玉	滑石	5	8	B4	両	北
228	棗玉	滑石	5	8	E2	両	南
229	棗玉	滑石	5.5	9.6	D7	両	北
230	棗玉	滑石	6	9	E2	片	北
231	棗玉	滑石	5	8.5	E2	両	南
232	棗玉	滑石	6	9.5	D6	両	北
233	棗玉	滑石	5	9	C4	両	北
234	棗玉	滑石	6	9.5	E2	両	南
235	棗玉	滑石	5.5	8.5	D7	両	北
236	棗玉	滑石	6	9.5	E3	両	北
237	棗玉	滑石	5.5	9.5	D7	両	北
238	棗玉	滑石	5	8.5	D5	両	北
239	棗玉	滑石	5	9.5	B4	両	北
240	棗玉	滑石	6	9	D7	両	北
241	棗玉	滑石	5.5	9.5	E3	両	北
242	棗玉	滑石	5.2	9	E2	両	南
243	棗玉	滑石	5.5	9.5	D7	両	北
244	棗玉	滑石	5.5	9.5	D7	両	北
245	棗玉	滑石	5	8	B4	片	南
246	棗玉	滑石	5	9	B4	両	南
247	棗玉	滑石	5	9	B4	両	南
248	棗玉	滑石	5	8.5	B4	両	南
249	棗玉	滑石	5	8.5	B4	両	南
250	棗玉	滑石	6	9.5	D7	両	北
251	棗玉	滑石	6	9.5	D7	両	北
252	棗玉	滑石	5.5	9	D7	両	北
253	棗玉	滑石	5	9	E2	両	北
254	棗玉	滑石	6	9	E3	両	北
255	棗玉	滑石	4.5	9.3	E2	片	南
256	棗玉	滑石	5.5	9	D7	両	北
257	棗玉	滑石	4.3	8.7	E2	片	南
258	棗玉	滑石	6	10	D7	両	北
259	棗玉	滑石	6	9.6	E2	両	南
260	棗玉	滑石	5	8.4	E2	両	北
261	棗玉	滑石	5	9	D7	両	北
262	棗玉	滑石	5.5	8	D7	両	北
263	棗玉	滑石	5.1	8.5	E2	両	北
264	棗玉	滑石	5.5	8.5	E2	両	北
265	棗玉	滑石	5.5	9	D2	片	北
266	棗玉	滑石	5	9	D2	片	北
267	棗玉	滑石	5.5	9	D2	片	北
268	棗玉	滑石	5.5	9	D2	片	北
269	棗玉	滑石	5.2	9	D2	片	北
270	棗玉	滑石	5	8	E2	両	南
271	棗玉	滑石	5	8.4	E2	両	北
272	棗玉	滑石	5.5	9	D2	両	北
273	棗玉	滑石	5.5	8	D7	両	北
274	棗玉	滑石	5.5	9.5	E3	両	北
275	棗玉	滑石	5.5	9.5	E3	両	北
276	棗玉	滑石	6	9.2	D2	両	南
277	棗玉	滑石	5	9	E2	片	南
278	棗玉	滑石	5.5	9	D2	両	北
279	棗玉	滑石	5.5	9	E2	両	北
280	棗玉	滑石	5	8.5	E2	両	北
281	棗玉	滑石	5.5	8.5	E2	両	北
282	棗玉	滑石	5.5	8	E3	両	北
283	棗玉	滑石	5	8.5	B4	両	南
284	棗玉	滑石	5	8.6	E2	片	南
285	棗玉	滑石	5	9	E2	片	南
286	棗玉	滑石	5	9	E2	片	南
287	棗玉	滑石	4.3	8.5	E2	片	南
288	棗玉	滑石	5	8	E2	両	北
289	棗玉	滑石	4.2	8.5	E2	片	南
290	棗玉	滑石	5.5	8.5	D7	両	北
291	棗玉	滑石	6	9	E3	両	北
292	棗玉	滑石	5.5	10	E2	両	北
293	棗玉	滑石	5.8	11.5	D7	両	北
294	棗玉	滑石	5.5	10	D7	両	北
295	棗玉	滑石	5.5	9.5	D7	両	北
296	棗玉	滑石	6	9.5	D7	両	北
297	棗玉	滑石	5.5	8.5	D7	両	北
298	棗玉	滑石	5.1	9	D7	両	北
299	棗玉	滑石	5.5	8.5	D7	両	北
300	算盤玉	滑石	7	4	E2	片	南
301	算盤玉	滑石	7	3.5	E2	片	南
302	算盤玉	滑石	6.5	4	E2	片	南
303	算盤玉	滑石	8	5	E2	片	南
304	算盤玉	滑石	6.5	4	B4	片	南
305	算盤玉	滑石	7	4	E2	片	南
306	算盤玉	滑石	7.5	3.5	E2	片	南
307	算盤玉	滑石	7	3.5	E2	片	南
308	算盤玉	滑石	7	4	E2	片	南
309	算盤玉	滑石	7	5	B4	片	南
310	算盤玉	滑石	7	4	B4	片	南
311	算盤玉	滑石	7	3	E2	片A	南
312	算盤玉	滑石	7	4.5	E2	片	南
313	算盤玉	滑石	7	4	B4	片	南
314	算盤玉	滑石	7	4	E2	片	南
315	算盤玉	滑石	6.5	4	E2	片	南
316	算盤玉	滑石	7	4	B4	片A	南
317	算盤玉	滑石	7	3.5	E2	片	南
318	算盤玉	滑石	7	4	B4	片	南
319	算盤玉	滑石	6.5	3.2	B2	片	南
320	算盤玉	滑石	6.2	4.2	B4	片	南
321	算盤玉	滑石	7	3.5	B4	片	南
322	算盤玉	滑石	7.5	4	E2	片	南
323	算盤玉	滑石	6.1	3	E2	片	北
324	算盤玉	滑石	6	3.1	E2	片	北
325	算盤玉	滑石	6	4	E2	片	北
326	算盤玉	滑石	7	4.5	E2	片	北
327	算盤玉	滑石	6.5	3.5	D1	片	南
328	算盤玉	滑石	8	4.5	B4	片	北
329	算盤玉	滑石	6.5	3	D1	片	北
330	算盤玉	滑石	6.5	3.5	E2	片	南
331	算盤玉	滑石	6.5	4	B4	片	南
332	算盤玉	滑石	6.5	4	E2	片	南
333	算盤玉	滑石	6	3	B4	片	南
334	算盤玉	滑石	6.5	3.5	B4	片	南
335	算盤玉	滑石	6.5	4.5	B4	片	北
336	算盤玉	滑石	6	4	D2	片	南
337	算盤玉	滑石	6.2	3	B4	片	北
338	算盤玉	滑石	6	3.2	E2	片	南
339	算盤玉	滑石	6.5	3.5	E2	片	南
340	算盤玉	滑石	4.1	2.2	D1	片	北
341	算盤玉	滑石	7	4.5	E2	片	北
342	算盤玉	滑石	6.5	4.2	D2	片	南
343	算盤玉	滑石	6	4	B2	不明	南
344	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
345	算盤玉	滑石	6	3.3	B4	片	南
346	算盤玉	滑石	6.3	3.9	B4	片	北
347	算盤玉	滑石	6	4	E1	片	南
348	算盤玉	滑石	6.5	4	B4	片	北
349	算盤玉	滑石	6	3.2	E2	片	南
350	算盤玉	滑石	5.5	2.5	E2	片	南
351	算盤玉	滑石	5.5	2.5	E2	片	南
352	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
353	算盤玉	滑石	5.2	3.5	D5	片	南
354	算盤玉	滑石	5.5	3.2	D5	不明	南
355	算盤玉	滑石	6	3.5	B2	片	南
356	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片A	南
357	算盤玉	滑石	6.3	5	E2	片	南
358	算盤玉	滑石	6	4	B4	片	南
359	算盤玉	滑石	5	3.1	D2	片	南

360	算盤玉	滑石	6.5	4	B2	片	北
361	算盤玉	滑石	5.5	2.5	E2	片A	南
362	算盤玉	滑石	6	4.3	E2	片	南
363	算盤玉	滑石	6	3	B4	片	北
364	算盤玉	滑石	5.5	3.5	E2	片	南
365	算盤玉	滑石	6	2.5	E2	片	南
366	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
367	算盤玉	滑石	5.4	3.1	D2	片	南
368	算盤玉	滑石	5.5	3.3	D5	片A	南
369	算盤玉	滑石	5	3.5	B6	片	南
370	算盤玉	滑石	5.2	2.3	E2	片A	南
371	算盤玉	滑石	6.1	4.2	E2	片	南
372	算盤玉	滑石	5.2	3.1	E2	片A	南
373	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
374	算盤玉	滑石	5	4	E1	片	南
375	算盤玉	滑石	5	3.1	D5	片	南
376	算盤玉	滑石	5.5	2.5	E2	片B	南
377	算盤玉	滑石	5	3	E1	片	南
378	算盤玉	滑石	5.5	2.5	B4	片A	南
379	算盤玉	滑石	5.5	3	B4	片	南
380	算盤玉	滑石	6.9	4	E2	片	北
381	算盤玉	滑石	6	2.5	E2	片	南
382	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
383	算盤玉	滑石	5.8	4	E1	片A	南
384	算盤玉	滑石	5.2	4	E2	片	南
385	算盤玉	滑石	6	3	E2	片A	南
386	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
387	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片A	南
388	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
389	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
390	算盤玉	滑石	5	3.5	D5	片	南
391	算盤玉	滑石	4.1	2.3	E2	片A	北
392	算盤玉	滑石	5.5	3	B2	片B	南
393	算盤玉	滑石	5.1	2.2	B4	片	北
394	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
395	算盤玉	滑石	5	3.2	B6	片	南
396	算盤玉	滑石	5.5	2.5	B4	片A	南
397	算盤玉	滑石	5	3	D1	片	北
398	算盤玉	滑石	6	3.5	D1	片	北
399	算盤玉	滑石	5.5	3	A1	片	北
400	算盤玉	滑石	5.5	3.5	E2	片	南
401	算盤玉	滑石	5	3.8	D5	片	南
402	算盤玉	滑石	4.5	2.5	B4	片A	北
403	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
404	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
405	算盤玉	滑石	6	2.5	E2	片A	南
406	算盤玉	滑石	5.5	3	A3	片	北
407	算盤玉	滑石	6	2.5	A3	片	北
408	算盤玉	滑石	5.5	2.5	A2	片	北
409	算盤玉	滑石	5.5	3	C3	片	南
410	算盤玉	滑石	6.5	4	B2	片	南
411	算盤玉	滑石	5	2.5	C3	片	南
412	算盤玉	滑石	5.5	5	A1	片	北
413	算盤玉	滑石	6.5	3	B4	片	北
414	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
415	算盤玉	滑石	5	2.5	E2	片A	南
416	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
417	算盤玉	滑石	6	2.5	E2	片B	南
418	算盤玉	滑石	5	2.9	B4	片A	北
419	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
420	算盤玉	滑石	6	3	A1	片	北
421	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
422	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
423	算盤玉	滑石	5	3	E2	片	南
424	算盤玉	滑石	6	3	E2	片A	南
425	算盤玉	滑石	5.5	2.5	B4	片	南
426	算盤玉	滑石	6	3	B4	片	南
427	算盤玉	滑石	6	2	E2	片	南

428	算盤玉	滑石	6.1	4	B4	片	南
429	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片B	南
430	算盤玉	滑石	5	3	B4	片	南
431	算盤玉	滑石	5.5	2.5	E2	片B	南
432	算盤玉	滑石	5.5	3	A2	片	北
433	算盤玉	滑石	6	3.5	A1	片	北
434	算盤玉	滑石	6	3	E2	片	南
435	算盤玉	滑石	5	3	E2	片	南
436	算盤玉	滑石	5.6	3.1	E2	片	南
437	算盤玉	滑石	5.5	3.7	A3	片	北
438	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
439	算盤玉	滑石	6.5	4	E2	片	南
440	算盤玉	滑石	5	2.5	A1	片	北
441	算盤玉	滑石	6	4	A2	片	北
442	算盤玉	滑石	5.5	4	A1	片	北
443	算盤玉	滑石	5.5	3	B4	片	南
444	算盤玉	滑石	6.5	4	B2	片	南
445	算盤玉	滑石	5.5	3.5	E2	片	南
446	算盤玉	滑石	5.5	3.2	A3	片	北
447	算盤玉	滑石	6	3.5	C3	片	南
448	算盤玉	滑石	6	2.5	E2	片	南
449	算盤玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
450	算盤玉	滑石	6.5	4	B2	片A	南
451	算盤玉	滑石	5	3	B4	片A	北
452	算盤玉	滑石	5	2.5	B4	片A	北
453	算盤玉	滑石	5	3	D1	片	北
454	算盤玉	滑石	5	2.8	D1	片	北
455	算盤玉	滑石	4.1	3.3	B4	片	北
456	算盤玉	滑石	4.5	3	B4	片	北
457	算盤玉	滑石	5	2.5	B4	片	北
458	算盤玉	滑石	5	3	C1	片	北
459	算盤玉	滑石	5	2.1	B4	片B	北
460	算盤玉	滑石	4.5	2.5	B4	片A	北
461	算盤玉	滑石	4.8	3	B4	片	北
462	算盤玉	滑石	4.8	2.9	D1	片	北
463	算盤玉	滑石	5	2.5	E2	片	北
464	算盤玉	滑石	4.5	2.9	B4	片	北
465	算盤玉	滑石	4.5	2.5	B4	片	北
466	算盤玉	滑石	5	2	B4	片A	北
467	算盤玉	滑石	4.5	2.5	E2	片A	北
468	算盤玉	滑石	5	3	B4	片	北
469	算盤玉	滑石	5	3	E2	片A	北
470	算盤玉	滑石	4.5	2.3	B4	片	北
471	算盤玉	滑石	4.5	3	B4	片	北
472	算盤玉	滑石	5	3	D1	片	北
473	算盤玉	滑石	4.5	3	B4	片	北
474	算盤玉	滑石	4.5	2.2	D2	片	北
475	算盤玉	滑石	4.5	2.5	B4	片A	北
476	算盤玉	滑石	5	2.5	E2	片	北
477	算盤玉	滑石	4.5	2.5	B4	片	北
478	算盤玉	滑石	5	2.5	B4	片A	北
479	算盤玉	滑石	4.5	2.4	B4	片	北
480	臼玉	滑石	3.3	3.8	D2	片	南
481	臼玉	滑石	3	4	E2	片	南
482	臼玉	滑石	3.3	4	D5	片	南
483	臼玉	滑石	3	4	E2	片	南
484	臼玉	滑石	3	3.3	D5	片	南
485	臼玉	滑石	3	4	D2	片	南
486	臼玉	滑石	4	2	E2	片	南
487	臼玉	滑石	3	3.2	D2	片	南
488	臼玉	滑石	4	3	E2	片	南
489	臼玉	滑石	3	2.2	D2	片	南
490	臼玉	滑石	3.8	2.6	E2	片	南
491	臼玉	滑石	3.2	3.8	E1	片	南
492	臼玉	滑石	3.5	3.7	D2	片	南
493	臼玉	滑石	4	2.5	E2	片	南
494	臼玉	滑石	3.2	4	D2	片	南

495	白玉	滑石	3.2	3	B6	片	南
496	白玉	滑石	3	3	D5	片	南
497	白玉	滑石	3.5	2	E2	片	南
498	白玉	滑石	3.2	3	D5	片	南
499	白玉	滑石	3.2	2.5	D2	片	南
500	白玉	滑石	2.8	3	E2	片	南
501	白玉	滑石	3.2	2.8	E2	片	南
502	白玉	滑石	3.1	2.1	E1	片	南
503	白玉	滑石	3.8	2.5	E2	片	南
504	白玉	滑石	6	3.2	A5	片	北
505	白玉	滑石	6	2.5	A5	片	北
506	白玉	滑石	6	2.8	A5	片	北
507	白玉	滑石	6	4.1	E2	片	南
508	白玉	滑石	6.6	2.5	E2	片	南
509	白玉	滑石	4	1.5	E2	片	南
510	白玉	滑石	5	2	E2	片	南
511	白玉	滑石	5	2	E2	片	南
512	白玉	滑石	6	5	E2	片	南
513	白玉	滑石	6	3	B2	片	北
514	白玉	滑石	5.1	3.5	A3	片	北
515	白玉	滑石	6	4.5	A1	片	北
516	白玉	滑石	5.1	4	D2	片	南
517	白玉	滑石	5	4	B4	片	南
518	白玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
519	白玉	滑石	5.5	4	E2	片	南
520	白玉	滑石	6	2	A5	片	北
521	白玉	滑石	5	4	E2	片	南
522	白玉	滑石	5	4	B2	片	南
523	白玉	滑石	6	2.5	B2	片	南
524	白玉	滑石	5.9	2.7	A5	片	北
525	白玉	滑石	5.1	2.5	A5	片	北
526	白玉	滑石	5	3.2	E1	片	南
527	白玉	滑石	5	3	C3	片	南
528	白玉	滑石	6	2.3	B6	片	南
529	白玉	滑石	5.5	3.5	B4	片	南
530	白玉	滑石	5.5	3.5	E2	片	南
531	白玉	滑石	5	4	E1	片	南
532	白玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
533	白玉	滑石	5.8	2	E2	片	南
534	白玉	滑石	5.2	4	B6	片	南
535	白玉	滑石	5	2.5	B2	片	南
536	白玉	滑石	6	2.8	B6	片	南
537	白玉	滑石	5.5	2.5	E2	片	南
538	白玉	滑石	5.5	2.5	B2	片	南
539	白玉	滑石	5.5	4	B4	片	南
540	白玉	滑石	6	3.5	E2	片	南
541	白玉	滑石	6	3	E2	片	南
542	白玉	滑石	5.5	2.5	B2	片	南
543	白玉	滑石	5.8	4.3	A3	片	北
544	白玉	滑石	6	2.5	B2	片	南
545	白玉	滑石	6	3	B2	片	南
546	白玉	滑石	5.5	3	E2	片	南

547	白玉	滑石	6	2.2	E2	片	南
548	白玉	滑石	6	3.5	A1	片	北
549	白玉	滑石	6	3	B2	片	北
550	白玉	滑石	5	3.5	D4	片	南
551	白玉	滑石	5	2.5	B4	片	北
552	白玉	滑石	5	3	E2	片	南
553	白玉	滑石	5.8	2.5	B6	片	南
554	白玉	滑石	6	2.8	B2	片	北
555	白玉	滑石	5.5	3.5	B2	片	南
556	白玉	滑石	6	2.9	B2	片	北
557	白玉	滑石	5	3	C3	片	南
558	白玉	滑石	5.5	2.5	E2	片	南
559	白玉	滑石	5	3.2	D2	片	南
560	白玉	滑石	6	2.5	A5	片	北
561	白玉	滑石	6	2.5	A5	片	北
562	白玉	滑石	5	4.1	D2	片	南
563	白玉	滑石	5	2.5	E2	片	南
564	白玉	滑石	6.2	2.5	E2	片	南
565	白玉	滑石	5	2	E2	片	南
566	白玉	滑石	5	4	D2	片	南
567	白玉	滑石	6.1	3.1	E2	片	南
568	白玉	滑石	5.5	1.8	D1	片	南
569	白玉	滑石	5	4	D2	片	南
570	白玉	滑石	5	4	B2	片	南
571	白玉	滑石	5	2.2	E2	片	南
572	白玉	滑石	5	3	B6	片	南
573	白玉	滑石	5	3.3	D5	片	南
574	白玉	滑石	5	4	E1	片	南
575	白玉	滑石	6	2.2	B2	片	北
576	白玉	滑石	5	4	E2	片	南
577	白玉	滑石	5.5	3	E2	片	南
578	白玉	滑石	5.5	4	B2	片	南
579	白玉	滑石	5	2.5	B4	片	南
580	白玉	滑石	5.2	3	B6	片	南
581	白玉	滑石	4.5	2	E2	片	南
582	白玉	滑石	5.5	1.8	E2	片	南
583	白玉	滑石	5.5	2.5	B4	片	南
584	白玉	滑石	5	3.5	B4	片	南
585	白玉	滑石	5	3	E1	片	南
586	白玉	滑石	5	3	E2	片	南
587	白玉	滑石	5.5	3.5	E2	片	南
588	白玉	滑石	6	3	E2	片	南
589	白玉	滑石	5	3.1	E2	片	南
590	白玉	滑石	4.5	2	E2	片	南
591	白玉	滑石	5	2.5	E2	片	南
592	白玉	滑石	4	4	D5	片	南
593	白玉	滑石	6	4	E2	片	南
594	白玉	滑石	5	3	B6	片	南
595	白玉	滑石	5.1	2.8	E2	片	南
596	白玉	滑石	4.5	3	E2	片	南
597	白玉	滑石	4.6	3.3	E2	片	南
598	白玉	滑石	5	2	E2	片	南

凡例

色調対応表

A1 褐色	B1 オリーブ褐色	C1 灰白色	D1 明緑灰色	E1 青灰色
A2 にぶい褐色	B2 灰オリーブ色	C2 灰色	D2 緑灰色	E2 暗青灰色
A3 黄褐色	B3 オリーブ黒色	C3 暗灰色	D3 緑灰色に明緑灰色の脈	E3 暗青灰色に緑灰色の脈
A4 黒褐色	B4 オリーブ灰色	C4 暗灰色に緑灰色の脈	D4 緑灰色に暗青灰色の脈	E4 青黒色
A5 灰黄褐色	B5 明オリーブ灰色		D5 暗緑灰色	
	B6 暗オリーブ灰色		D6 暗緑灰色に灰色の脈	
			D7 暗緑灰色に緑灰色の脈	

穿孔方法対応表

片　片面穿孔　　片A　片面にくぼみ　　片B　上下両面にくぼみ

図　　　　　版

図版第57　内田山遺跡・内田山古墳群第６次

(1)内田山遺跡・内田山古墳群全景（南から）

(2)第６次調査地全景（東から）

(3)第６次調査地全景（右が北）

(1)第６次調査地調査前全景
（南から）

(2)第６次調査地調査前全景
（北から）

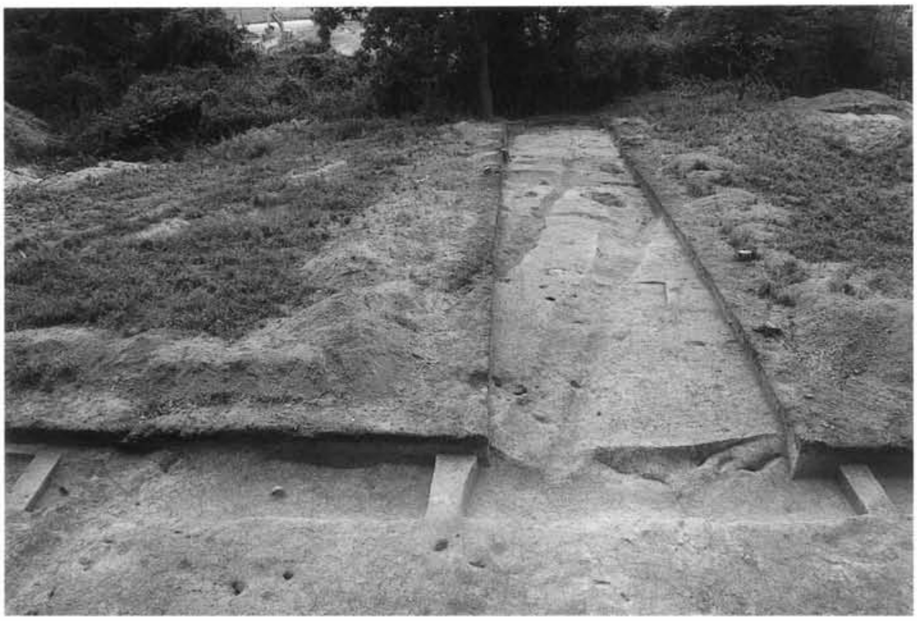
(3)表土および竹根除去作業
（北から）

⑴試掘調査第２トレンチ全景
（東から）

⑵Ｂ３号墳周溝ＳＤ１検出状況
（北から）

⑶ＳＤ１東南コーナー
埴輪検出状況（東から）

⑴第１・５トレンチ全景(南から)



⑵第３トレンチ全景Ｂ２号墳周溝
検出状況(東から)

⑶第４トレンチ全景(南西から)

⑴Ｂ４号墳南西コーナー
周溝ＳＤ３検出状況（南から）

⑵周溝ＳＤ３内埴輪検出状況
（西から）

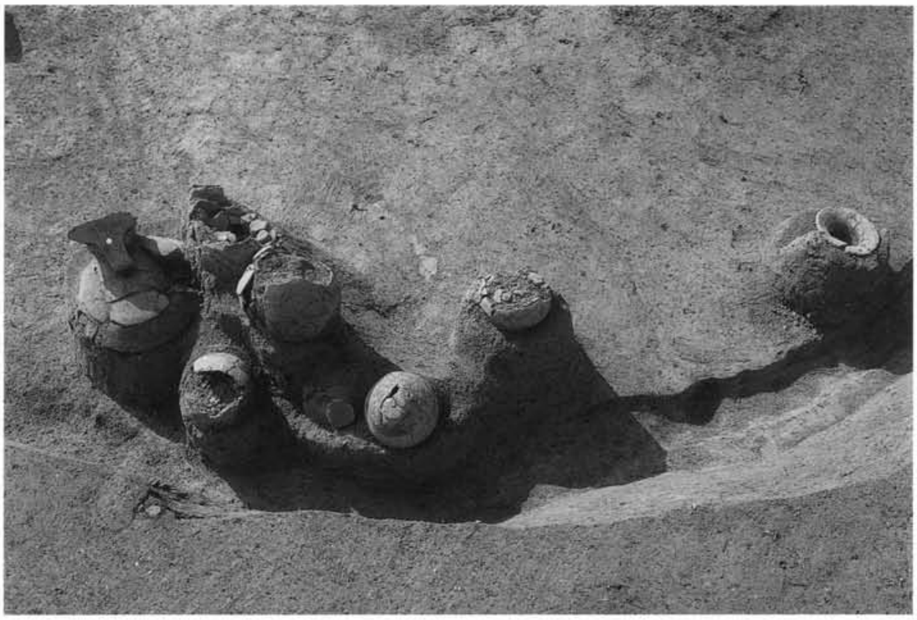
⑶周溝ＳＤ３溝底部埴輪棺ＳＸ35
（北から）

⑴第６次調査地全景（南から）

⑵竪穴式住居跡ＳＨ８・
掘立柱建物跡ＳＢ13（東から）

⑶竪穴式住居跡ＳＨ27（東から）

⑴竪穴式住居跡ＳＨ24（南西から）

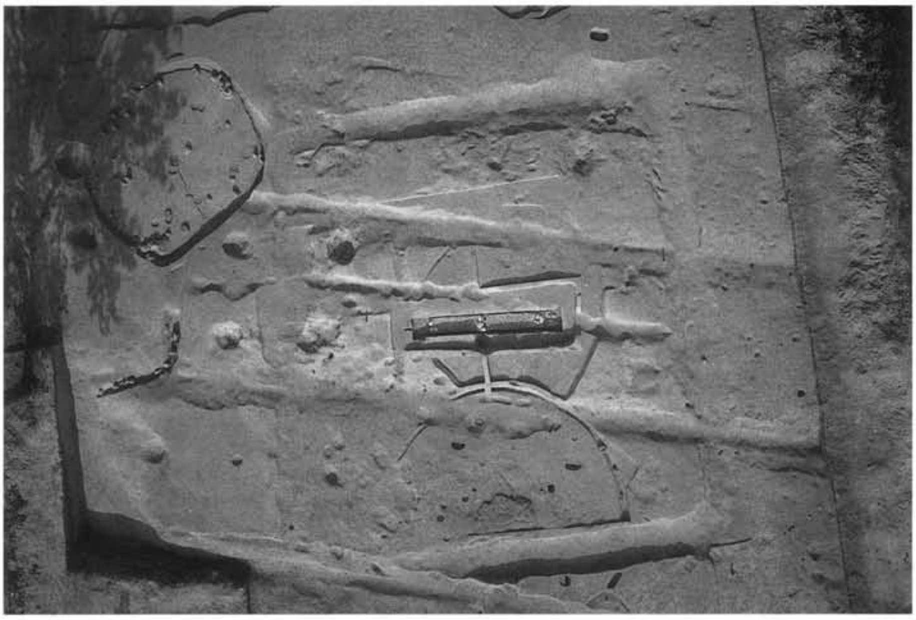

⑵竪穴式住居跡ＳＨ24内
土器出土状況（北東から）

⑶竪穴式住居跡ＳＨ24内土器群
（南西から）

(1)溝ＳＤ11(東から)

(2)溝ＳＤ38(東から)

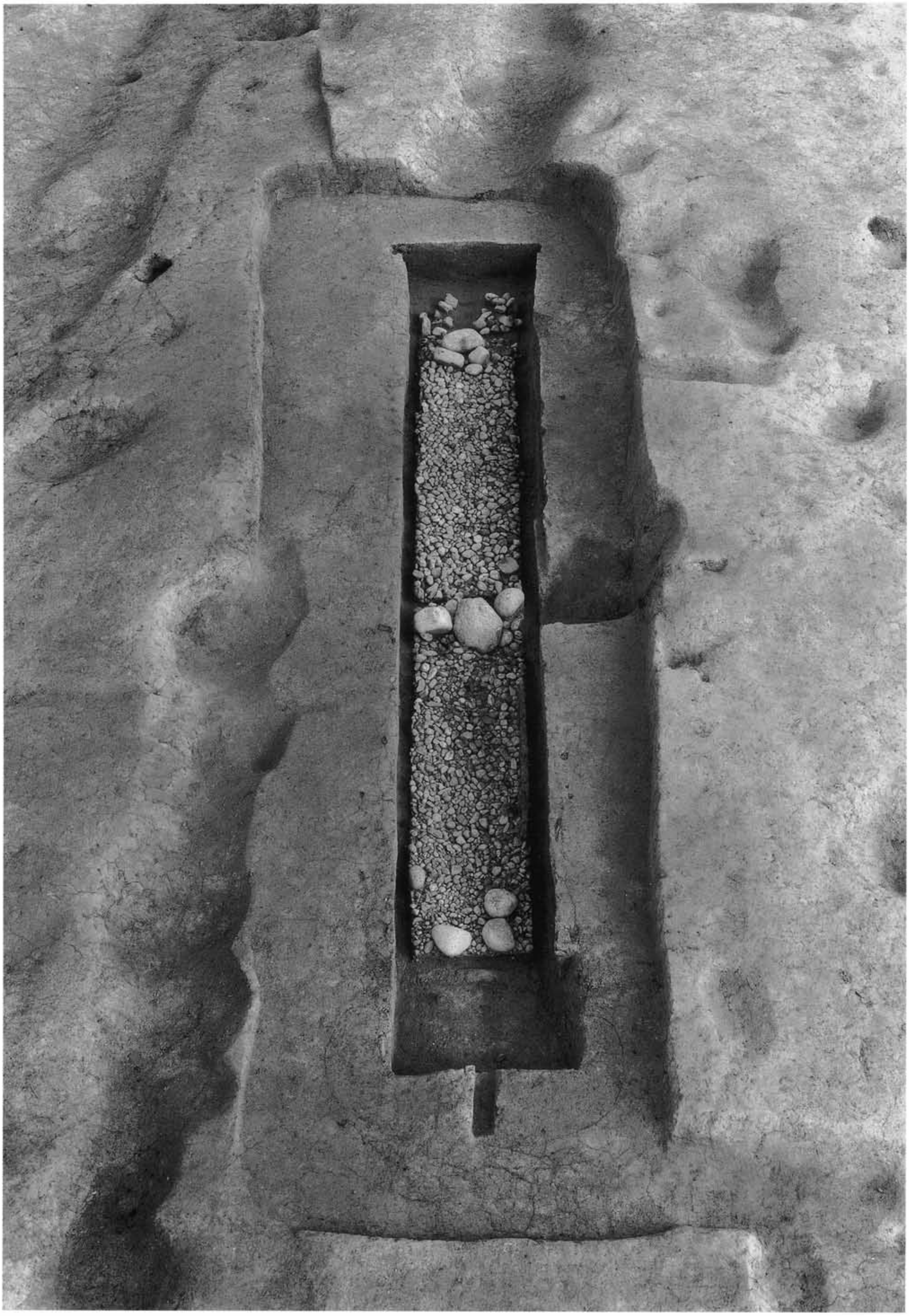
(3)集石遺構ＳＸ23(西から)



⑴Ｂ２号墳全景（上が北）

⑵Ｂ２号墳全景（北から）

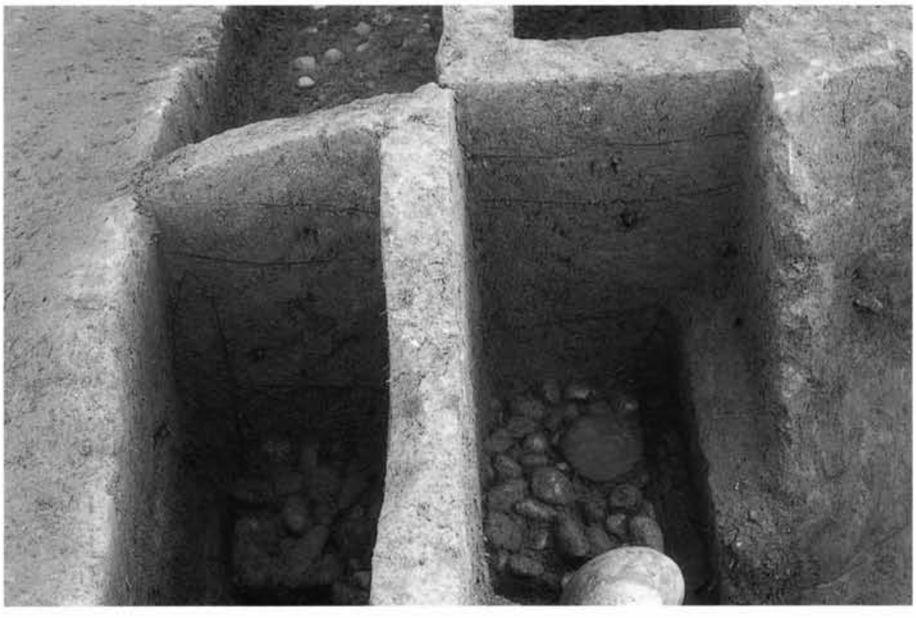
⑶Ｂ２号墳埋葬施設
ＳＸ12検出状況（北から）



埋葬施設ＳＸ12全景（西から）

⑴ＳＸ12東小口板痕跡（北から）

⑵ＳＸ12中央部東西畦断面
（南から）



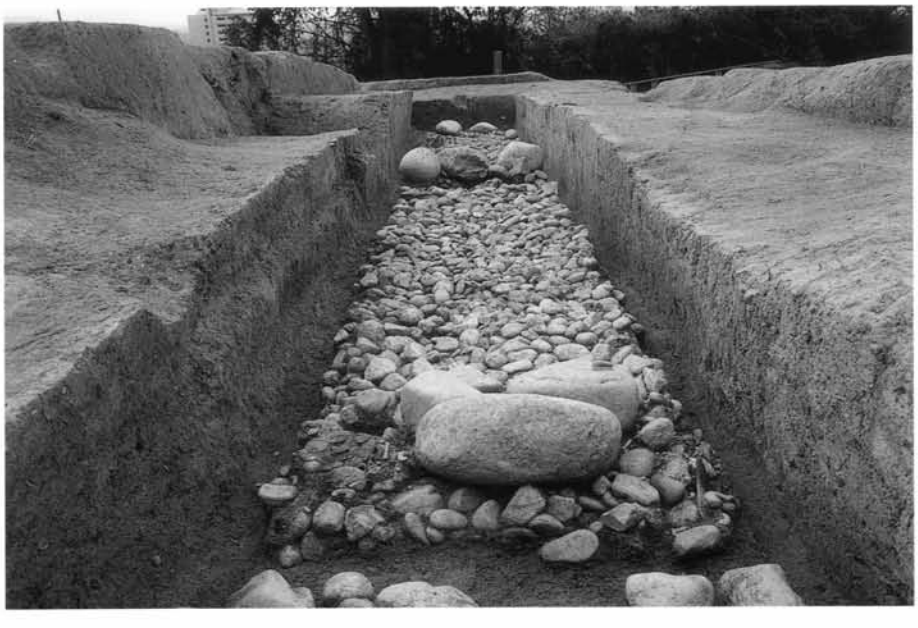
⑶ＳＸ12中央部南北畦断面
（西から）

⑴ＳＸ12東主室内行花文鏡・玉群出土状況(西から)

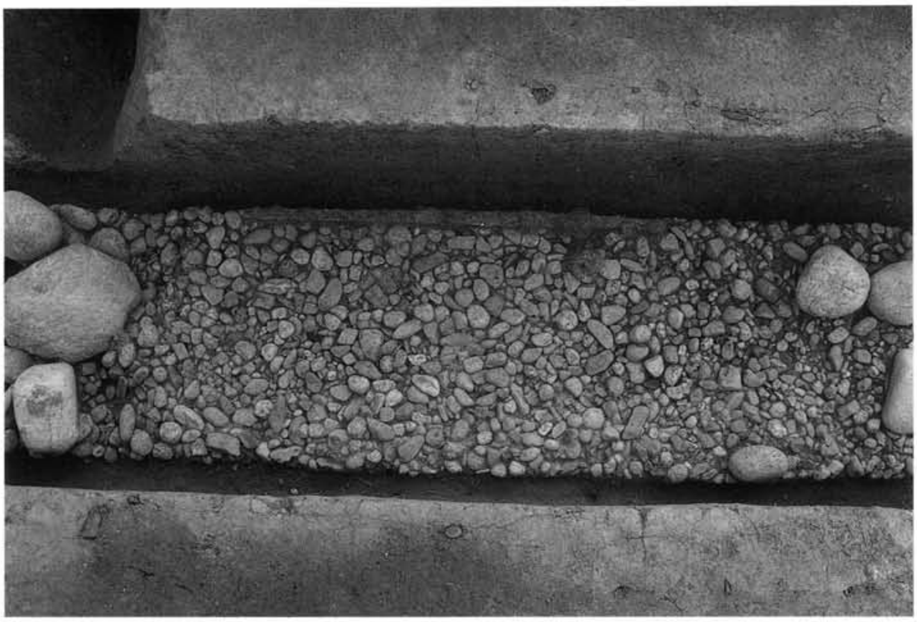
⑵ＳＸ12東主室内行花文鏡・玉群出土状況(北から)

⑴東主室枕石南側の内行花文鏡と玉群（西から）

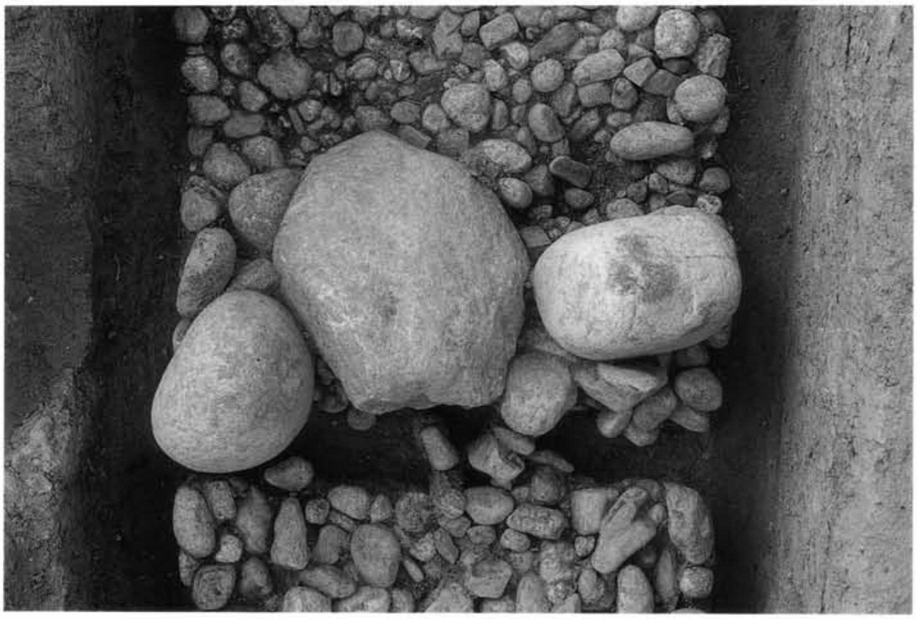
⑵東主室枕石北側の玉群（西から）



⑶ＳＸ12棺内礫床と枕石（東から）

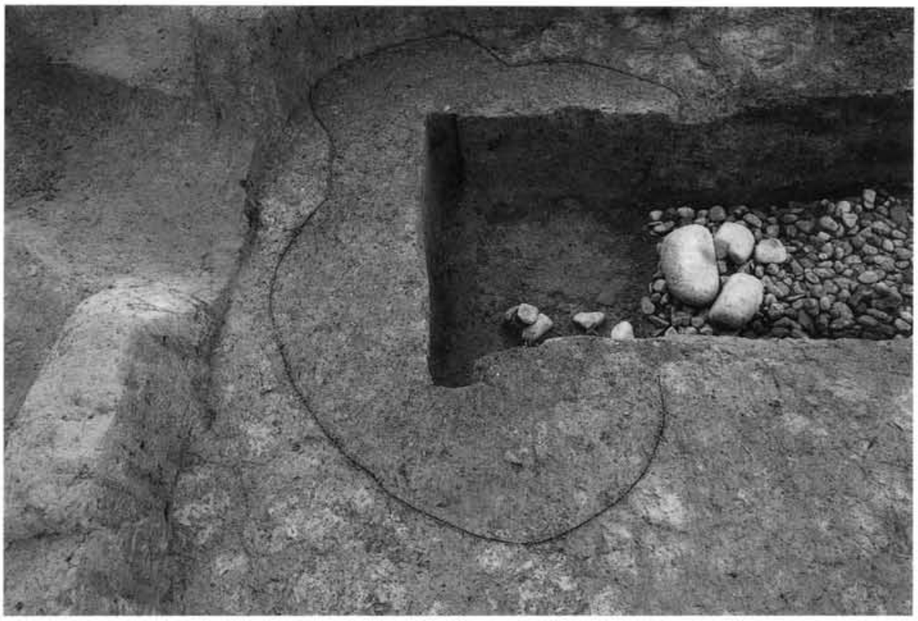


⑴西主室と鉄刀・ヤリガンナ
（北から）

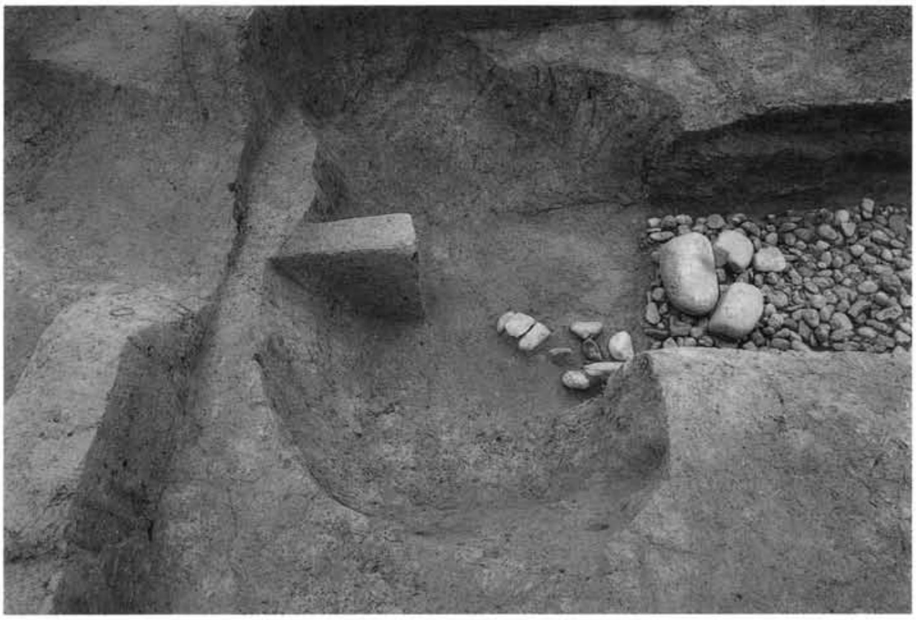


⑵西主室東側枕石（西から）

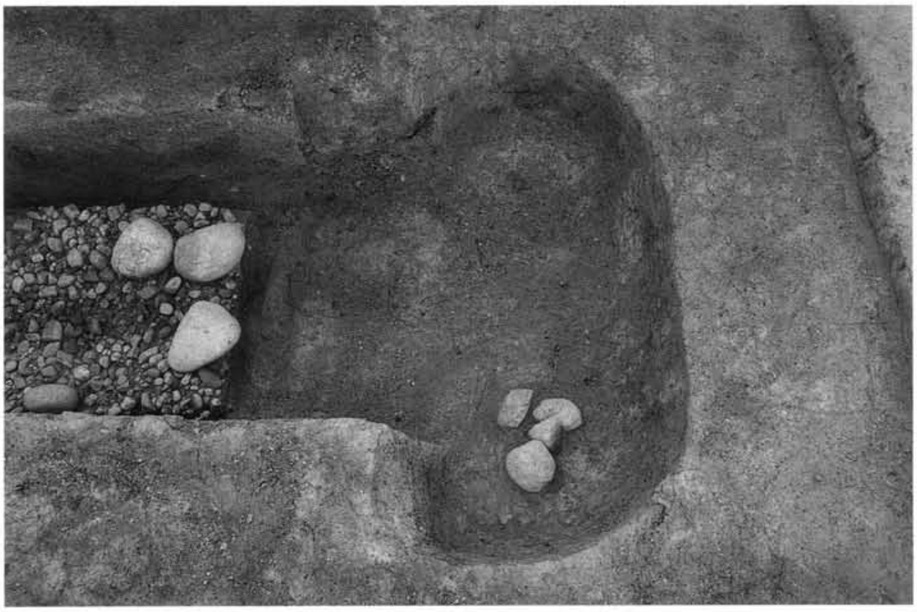
⑶西主室西側枕石と
西副室内石製紡錘車（東から）



⑴土坑ＳＫ26検出状況（北から）



⑵土坑ＳＫ26（北から）

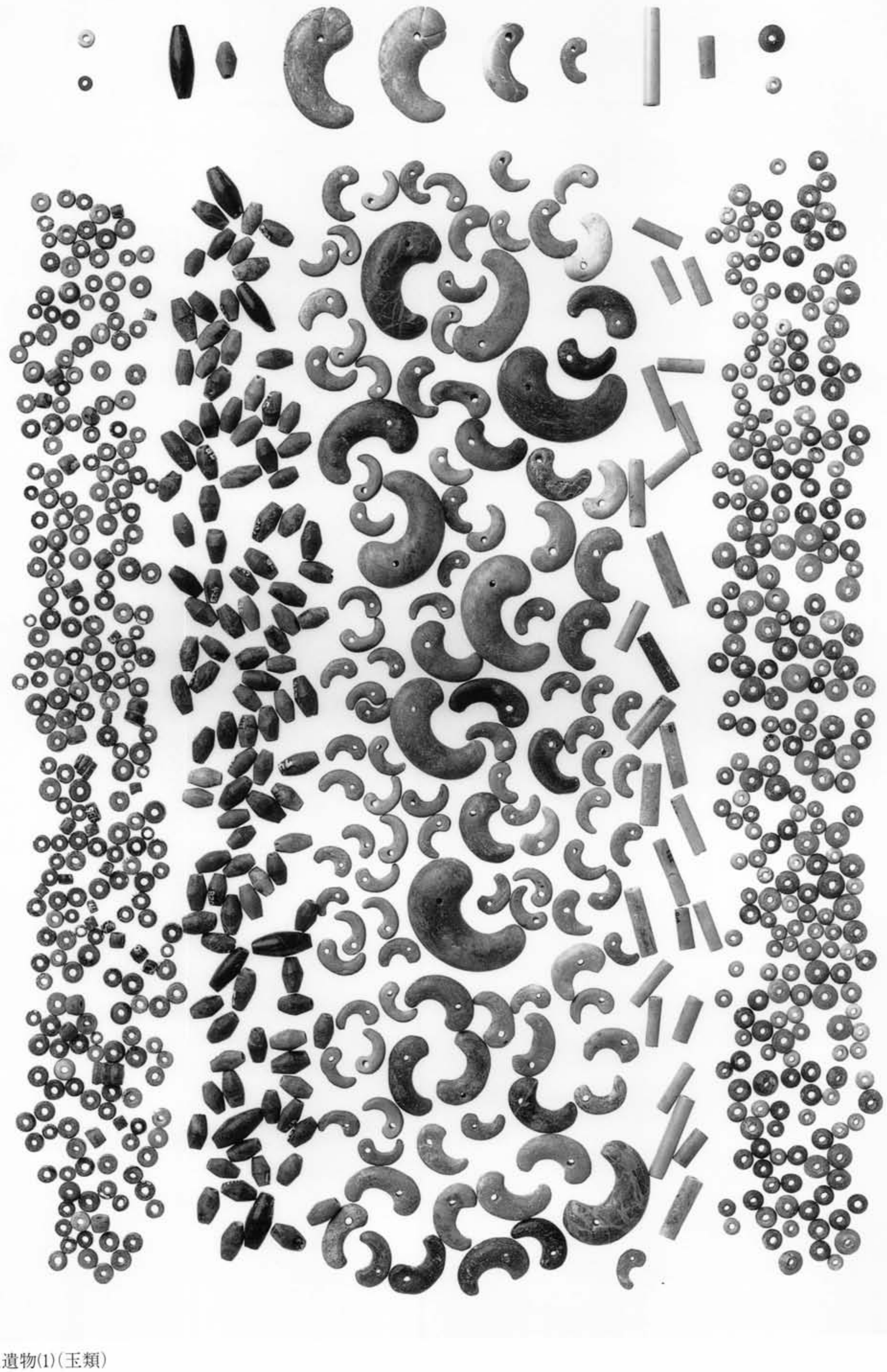


⑶土坑ＳＫ25（北から）

⑴ＳＸ12墓壙断ち割り断面（西から）

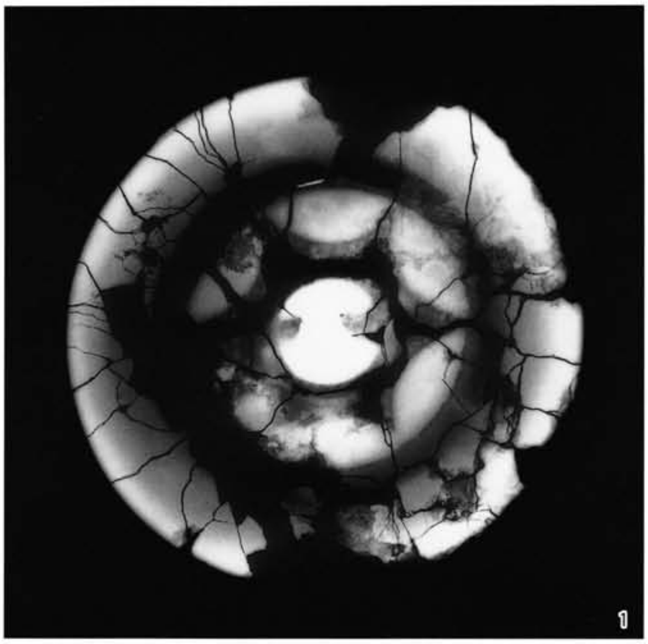
⑵ＳＸ12完掘全景（西から）

⑶内田山遺跡・内田山古墳群現地説明会（南から）



出土遺物(1)(玉類)

2


1

3

4

5

6

7

出土遺物(2)

図版第75　内田山遺跡・内田山古墳群第６次

1

21

7

34

35

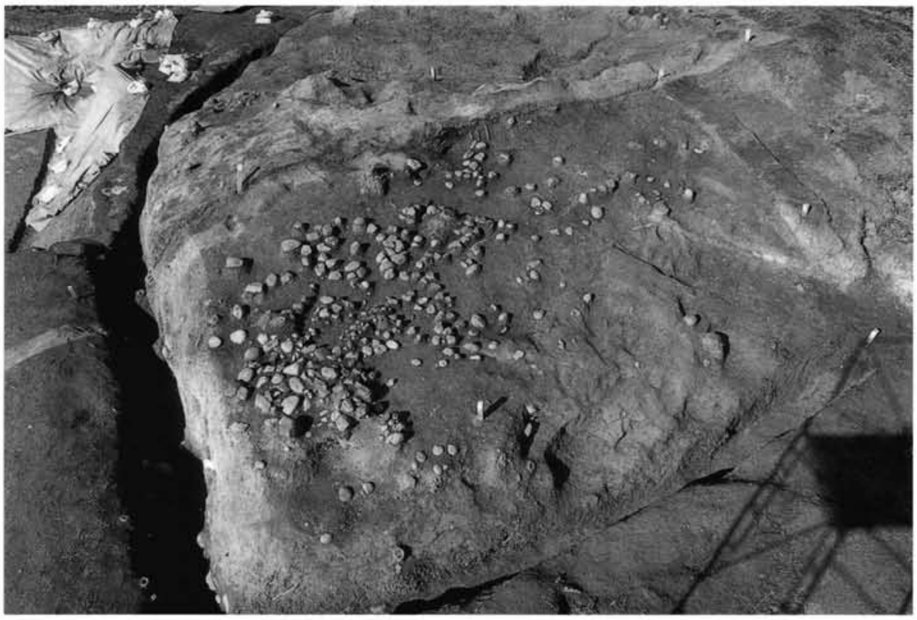
27

出土遺物(3)

⑴上人ヶ平５号墳調査前遠景
（南から）

⑵墳丘南部表土除去後全景
（南西から）

⑶墳丘西部裾埴輪破片・葺石
検出状況（南西から）



⑴墳頂南東部集石群（東から）

⑵墳頂部中・近世墓群検出状況１
（南西から）

⑶墳頂部中・近世墓群検出状況２
（西から）

(1)上人ヶ平５号墳墳頂部
（南西から）

(2)墳頂部攪乱坑（南西から）

(3)墳頂部攪乱坑（西から）

図版第79　上人ヶ平５号墳

⑴墳頂部埋葬施設検出状況
（西から）

⑵墳頂部埋葬施設検出状況
（東から）

⑶墳頂部埴輪片検出状況（東から）

(1)墳丘東トレンチ転落葺石・埴輪検出状況(東から)

(2)墳丘東トレンチ葺石・埴輪列検出状況(東から)

図版第81　上人ヶ平5号墳

(1)東トレンチ墳丘斜面転落葺石
除去前(東から)

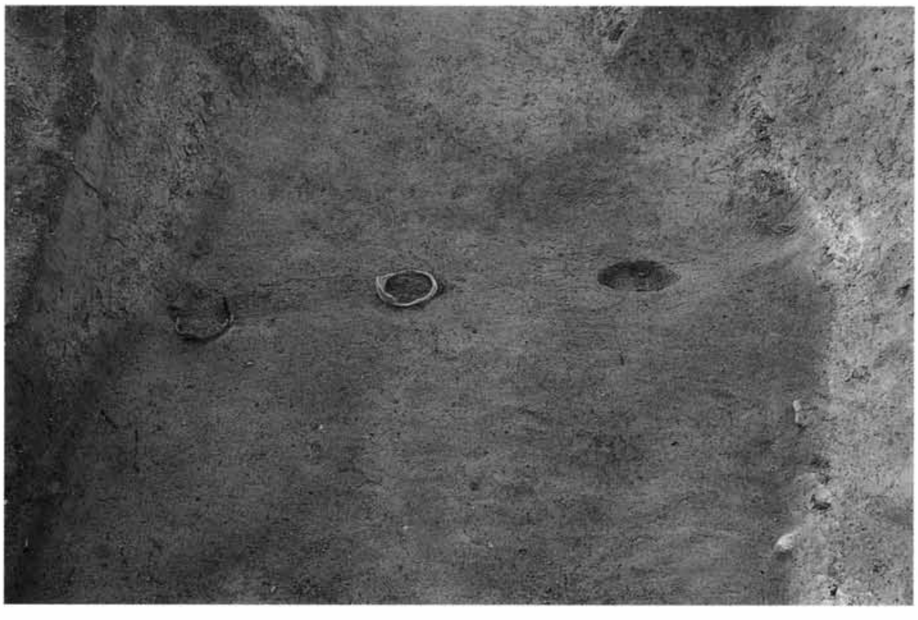
(2)同・転落葺石除去後葺石
基底部・埴輪列1(東から)

(3)同・転落葺石除去後葺石
基底部・埴輪列2(東から)

図版第82　上人ヶ平５号墳

(1)東トレンチ墳丘裾部南壁断面
（北から）

(2)東トレンチ周溝東岸部南壁断面
（北から）

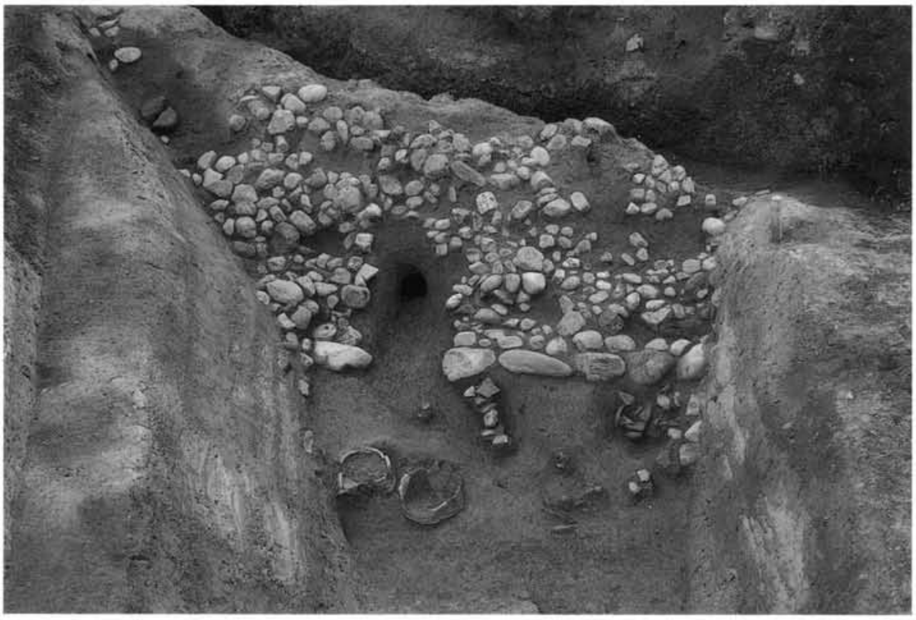


(3)東トレンチ周溝外側埴輪列
（東から）

(2)墳丘北トレンチ葺石・埴輪列検出状況(北から)

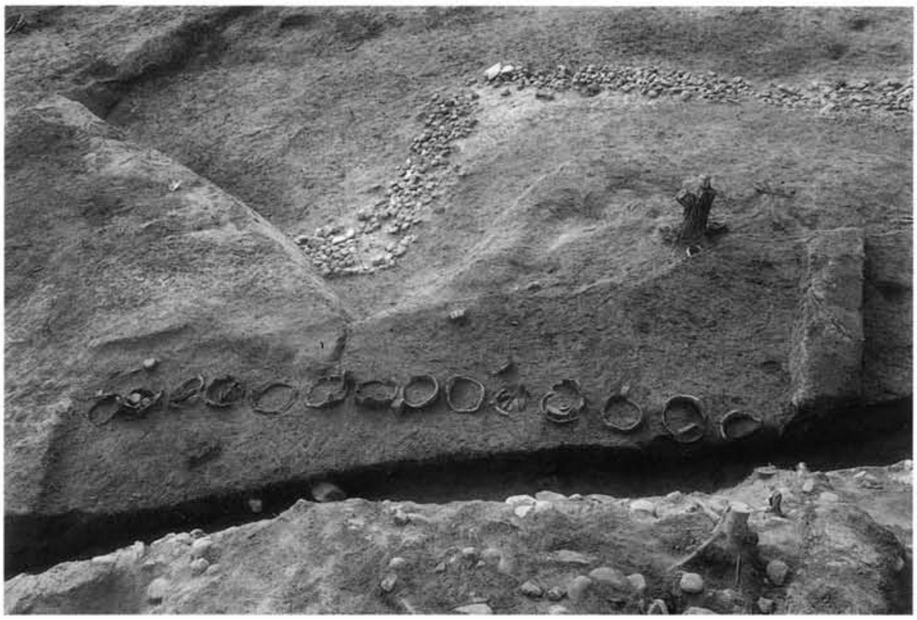
(1)墳丘北トレンチ転落葺石・埴輪検出状況(北から)

⑴北トレンチ墳丘斜面転落葺石
除去前（北から）

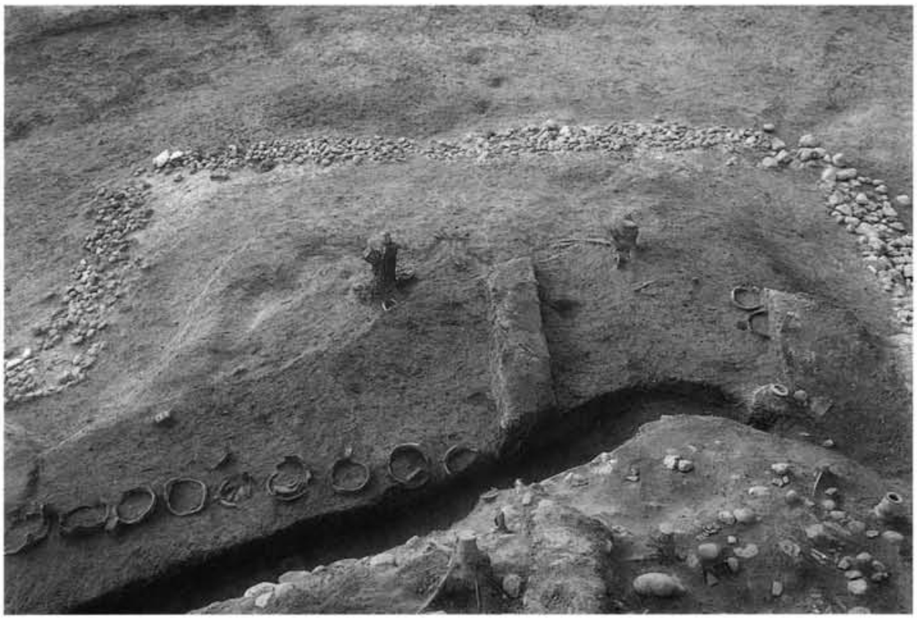


⑵同上転落葺石除去後葺石
基底部・埴輪列１（北から）

⑶同上転落葺石除去後葺石
基底部・埴輪列２（北から）



⑴上人ヶ平５号墳造り出し部
（東から）



⑵墳丘西側２段目テラス埴輪列
（北東から）

⑶造り出し部と墳丘西側２段目
テラス埴輪列（南東から）

1

2

3

14

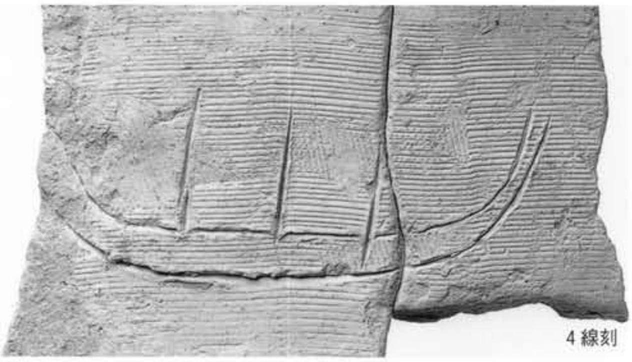
15

20

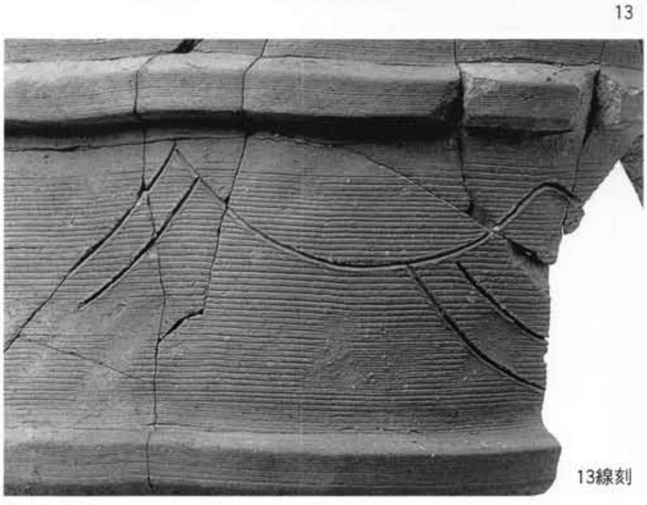
出土遺物(1)

図版第87　上人ヶ平５号墳

4


4 線刻

13


13線刻

42

43

44

出土遺物(2)

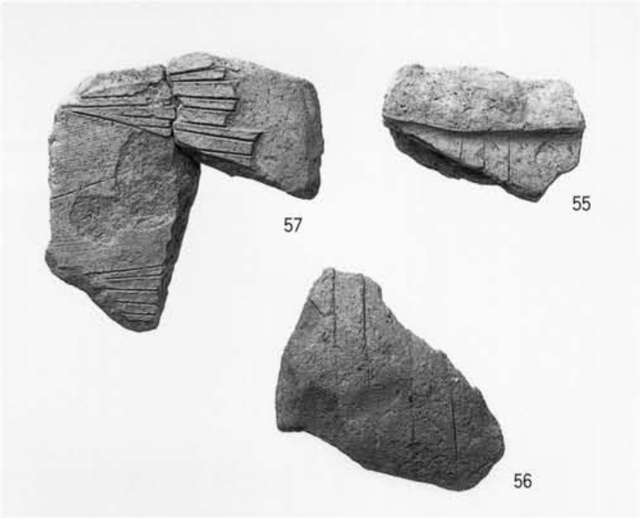
図版第88　上人ヶ平5号墳

18

52

51

50



57 55 56

48

49

出土遺物(3)